資料

（昭和四十四年十月）

第十四回「合宿教室」（阿蘇）感想文集

社団法人　国民文化研究会

今上天皇御歌（昭和二十年）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとゞめけりたゞたふれゆく民をおもひて

合宿第四日目に、元侍従次長・木下道雄先生によってなされた御講義は、天皇陛下の大御心についてのお話であり、全参加者に深い感銘を与えた。この文集の随所にその感想が見られるので、ここに天皇の御歌を掲載することにした。

第十四回「合宿教室」（阿蘇）感想文集

目次

「はしがき」に代えて……小田村寅二郎…2
今年の〝合宿教室〟（阿蘇）を振り返って…九州大学・三年・小柳左門…5
「合宿教室」の日程紹介……8
参加学生の大学名・参加人数……15
講師・助言者などの紹介……15
終了間ぎわに記した走り書きの感想文……18
短歌詠草……合宿中の創作作品（講師・助言者を含め三百九十名分）……111
あとがき……137

「はしがき」に代えて

小田村寅二郎

ここに編集した「感想文」と「短歌」は、ことしの夏、阿蘇（ホテル大観）で挙行した第十四回〝合宿教室〟における、参加者諸君のものである。

全国（五十大学）から集まった大学生を主軸とする参加者全員（内訳は、男子大学生224、女子大学生19、小・中・高校教諭61、会社などからの社員参加者17、計321名、それに主催者側として招聘講師4、大学教官10、小・中・高校教諭20、その他社会各層での勤務者37、記録と写真および事務関係11、総計403）が、四泊五日間、風光佳絶な阿蘇のカルデラの宿舎で寝食を共にし、全期間を通じて誠心誠意「学問とは、人生とは、祖国とは」について、真剣な追求を展開した。

時あたかも、全国的に連鎖反応を呈していた大学紛争にも、ようやくマンネリ化の徴候が見えだし、学生・教官の双方に、事態変転への英知と真勇が強く要請せられ出した時期であった。また一方、大学紛争の真似事が一部の高校にも出始めたし、それと呼応するかのように一部の小・中学校においては、日教組教師たちの狙いが、校長・教頭をロボット化し、実質的な人民管理体制の「実」を取ろうとする動きとなって現われ始めてきた。

こうした教育界内部における反体制諸活動は、上は大学において、一部の教授、助教授、講師、助手、副手、大学院生、大学生という全構成層を「縦に貫いた線」となってあらわれ、高校においては、大学生の意識分子が、その出身母校の意識教師と連繋し合って、高校生の洗脳に従事するという「両面作戦の開始」となり、小・中学校においては、「日教組の倫理綱領の、より忠実なる実践」が、その組合員たる個々の教師たちに、改めて強く要請せられるようになってきた。

これら一連の勢力は、その数において、日本の教育従事者総数に対比してさほどのパーセントを示してはいないが、「現状を破壊しようとする運動」なるものは、「全体においては少数なるがゆえに」ということで、これを放置するわけにはいかない。現に、わが国におけるこれら一連の教育界反体制勢力に対して、これを援護射撃する有名新聞があるのをはじめ、言論界の主流の一部も、国民の興論をその方向に向けようと積極的に意図しているし、これらが一体となって、祖国崩壊への重要な尖兵の役割—「学問」の名において、また「言論」の名においての両面平行作戦—を展開しているように思われるからである。

わが国の教育界、言論界が、学問（文化科学の分野）の名のもとで営んできたことの中に、「何か本質的な誤りがあったのではないか」という疑問は、すでに早くから心ある人々の口にのぼっていたところである。私どもの合宿教室が、過去十四年間にわたって荊棘の道を踏み分けてきたのも、まさにそこに主眼を置いてのことであった。いまの世の中では、学問の世界にも、言論の世界にも、あまりにもイデオロギーのやりとりが氾濫しすぎている、そして、論理の勝負だけが学的権威さを占有しているかの感が深い。

こうした社会趨勢のさなかに立って、今年も〝合宿教室〟が開かれた。まず開会のはじめに、例年のようにこの学界、言論界の主潮についての指摘がなされる。そして、学問に取り組む心組みについての反省から始まり、平素つい馴れっこになっているお互い同士の対話概念理論のやりとり—のムードから、まずわれとわが心を解き放つ努力が開始されたのである。それには勇気も必要であった。また、お互い同士のあいだで安易に認め合ってきた友情なるものも、馴れ合い式の付き合い方では、友情の名に値しないことが気づかれてくる。やがて、相手が口に出す言葉が、その場その場をつくろう口先だけの言葉かどうか、また頭の先だけで整理した理窟に過ぎないかどうか、あるいは、その言葉がどんなにタドタドしくとも、心の底からの実感を伴った声かどうか、それら

を判別する力が身についてくる。いわば心を働かせて講義を聴き、心を働かせて書物を読み、心を働かせて班別討論に臨むようになる。だから、ポツンと一言語った友だちのその言葉から、その友の真実の心を受け止めることもできるようになり、半面、虚勢を張った大言壮語や、滔々とシヤベリまくる饒舌の徒に巻き込まれることがなくなる。人間の尊厳性に立っての付き合い方が、スタートラインにつく。

さて、ここに集録した「感想文」は、こうした四泊五日間の努力のあと、参加者諸君が、〝合宿教室〟解散間ぎわの短い時間に、〝走り書き〟で書いてくれたものである。緊張した日々の続いた直後に書かれたものであるので、なかには感激のほどばしるままに、ややオーバーとも見える表現もあろうし、合宿についての評価もまた過分なものがないわけではない。またなかには、平素聞き馴れた学園での理論的講義とはかなりに趣きの異なった講義が多かったために、あるいは、講義のあとでの班別討論のあり方が、日ごろの学生間のそれとちがって、理論の筋だけの勝負ではなく、相手のまごころを求めての対話であったために、それらに大きな戸惑いをされた人たちも、決して少なくなかった。そしてごく少人数ではあったが、さいごまでこの合宿になじめずに、真向から批判的な感想をぶつけるように書いて帰ってゆかれた人たちもおられた。（この少数の方々の感想文は、他の方々のように要点だけに集約することが困難であったので、特に原文の長さを尊重して掲載することになった）

次に、この文集の巻末に載せた「短歌」は、すべてこの〝合宿教室〟での参加者、助言者、講師の習作である。はじめて短歌を詠んだ人々は、全体の三分の二以上もおられたのではなかろうか。一人でいればおそらく永久に、「和歌をつくる」ことなどなかったかも知れない方々が、こうして「人生の一里塚」を刻印された意義は、きわめて深いものがあると思う。山田輝彦講師の行き届いた「導入講義」を聴かれて、和歌を詠むためには、理窟を詠んではだめで、自分自身の実感（人生体験として心に刻まれたまま）を、ありのままに、五、七、

五、七、七の三十一文字にして見よ、と教えられ、皆その通りに努力したはずであるのに、創作されたものには、本人の無意識のうちに、理窟を並べた作品ができてしまう。友だち（第三者）にそれを指摘されて、はじめて、ハッと気づく。理窟のとりこにされてしまった現代人が、生き生きとした人間に立ち戻る困難さを、まざまざと知らせてくれた一コマであった。それゆえにこそ、班員同士で批評し合った「創作短歌の相互批判」の時間が、どんなにお互いにとって楽しくかつまた、重大な意義をもった経験になったことか、一人では到底なし得ない勉強の仕方が、そこに実感を伴って経験されたと思う。

さいごに、私のこの「はしがき」につづいて、本文を繙かれる前に次の学生の一文を、先にお読みいただきたいと思う。それは、この〃合宿教室〃における学生リーダーの一人が書いたものであるが、この〃合宿教室〃で何が、どのような姿勢で求められていったか、それを、学生の立場から率直に書いてくれたからである。

今年の〃合宿教室〃（阿蘇）を振り返って

九州大学医学部三年　小柳左門

「大衆団交」「自己否定」「大学解体」などの言葉が氾濫し、赤旗がなびき、アジビラやアジ演説がごったがえしている学内にあって、僕達は一体どうこれに取り組めばよいのか。何を求め、何を心の拠り所とすればよいのであろうか。自分の回りの友達が次々に彼らの「理論」に引きつけられていくのを見る時、一体僕は何と言って引きとめることができるのか。学内をなんとかして正しくしたいという気持も、友達や運動家にぶつかって行くうちに、力を失い挫けそうになる。だが、自分のそのような逃げようとする心を叱咤せねば、大学はついに荒れ放題になってしまうと感じた時、「こ

れではいけない」といつも頑張ってきた。そうした時に、何より有難いのは、友だちと先輩たちであった。

僕が今度の合宿で強く求めつづけたもの、それは、こうした学内で、雄々しく挫けずに「生きゆく力」であった。

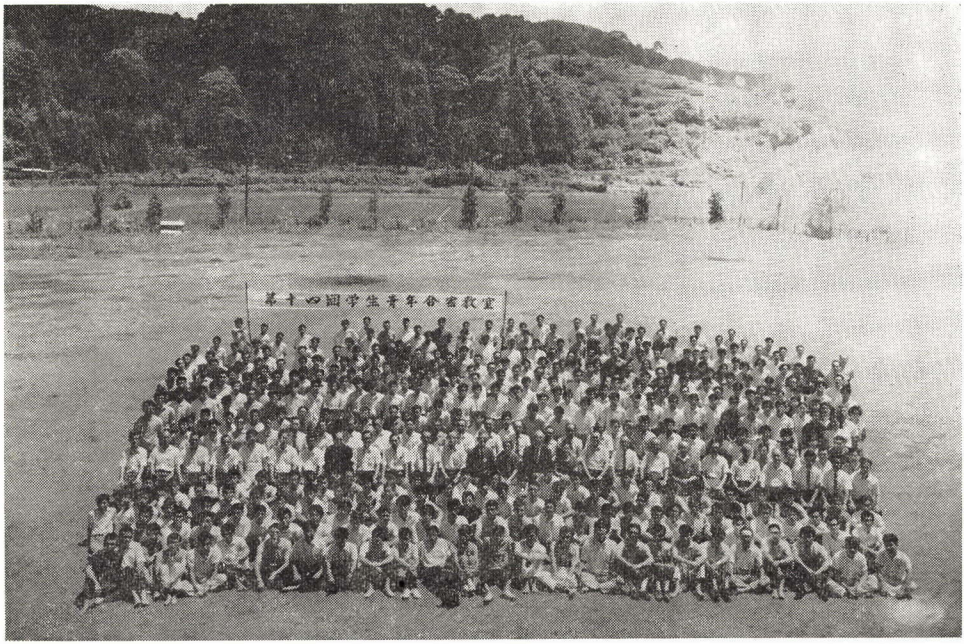
大学で友達と論争する。その時僕達はとかく論理に頼りがちになる。学生大会の決議は、どちらがより論理的かによって決められてしまう。大学の授業でなされるものは、「知識の積み重ね」と「論理の組み立て」が主だからでもあろう。そのような思考法ばかりを身につけた結果、我々の心は殺伐にならざるを得ない。そこには溌剌なる人間の心の躍動などは見るべくもない。武装学生の目はどんよりと濁り、口からは「言葉」というより「記号」めいたものがたてつづけに飛び出してくる。だがこれが果して学問を追求する場といえるものなのか。このような言葉と論理だけの遊びみたいなものが、どれだけ人間の魂と結びつくものはなのか。そこには、欠落した重要な〝何もの〟かがあると思ってきた。

その〝何もの〟か、それは「生きゆく力」のような気がしてならなかった。僕達は今度の合宿教室で、それを体得しようと努力した。大学では得られぬ、ひしひしと僕達の胸に迫る〝何もの〟か、それを求め続けた。

木下道雄先生が、今上陛下にお仕えした時の御体験談をお話された時などは、僕は、陛下のありのままの御姿にじかに触れる思いがし、天皇を中心にして生きているということに、ありがたい気持で一杯になった。理論を超えた世界、人と人の暖かい心のふれあい、そこにこそ我々の求めるべきものがある。それを実感として確かめ得た喜びは、この感想文の中の、随所にあらわれているにちがいない。

僕達は、この合宿教室で、和歌の創作と相互批評という時間によって、言葉の正確な表現と体験の正確な把握とについて、きびしく学んだ。岡潔先生のお話しの後、一人の学友が先生に質問をした。だが、その質問者の言葉の一つ一つについて、先生は、その質問の言葉が不正確きわまりないことについて厳しく指摘された。先生のお話を正確に受けとめるということは、先生がそのお言葉以外では伝えることができないとして選ばれた言葉で表現されたのだから、そのお言葉を勝手に概括した別の表現に代えて質問するのは許せない、という御指摘でもあった。こうした岡先生の指摘のされ方に、恐ろしい程の学問の厳しさを感じたのは、決して僕一人ではなかったと思う。

班別討論の中でも、各自が自分の体験を正確な言葉で表現することがどんなに大切なことか、また、相手の言葉を正しく受けとめて話し合うことが容易なことでないことを知らされた。極端に言えば、論理や知識はどうだっていい。心のうちを、ありのままに言い現わすことの方がどんなに大切なことであろうか。痛感のない所、喜びも悲しみが隠されての会話や理論展開の中に、果たして真の学問がありうるのか。合



阿蘇における〝第14回合宿教室〟（参加者 403 名）昭44. 8・7～11（ホテル大観にて）

宿が進むにつれて、皆は今まで自分でこれが思想だと思っていたものが、つき崩されて行くのを感じたに違いない。だが、その崩されたあとに、僕達の心に焼きついて離れないものは、きびしく指摘しあった友達や、先生方のまなざし、姿、そして、そのお言葉ではなかったろうか。僕達にとって大切なものは、左翼運動家に対するイデオローグではない。人の心の悲しみが分る、友の苦しみをともに分ちあえる、そんな自分になることなのだ。その豊かな情操の上にはじめて、正しい思想が息づき始めると思う。

感想文の班別

第 1 班 ⟶ 第 23 班 ……男子学生班

第24・25 班……女子学生班

第31班 ⟶ 第 38 班 ……教員班

第41・42 班……社会人班

指揮班 ……男子学生 4 名

第十四回「合宿教室」の日程紹介

とき　昭和四十四年八月七日（木）～八月十一日（月）四泊五日間

ところ　熊本県阿蘇町大字小里「ホテル大観」

第一日

（八月七日・木曜日）

班員自己紹介　（午後二時～二時四十五分）

開会式　（午後二時四十五分～三時十五分）

一、国歌斉唱（二回続けて斉唱）

一、黙禱（われらの祖国を守るために尊いいのちを捧げられた祖先のみ霊に対して黙禱を捧げた）

一、あいさつ

（大学教官有志協議会を代表して）　明星大学教授　奥田克巳氏

（国民文化研究会を代表して）　国民文化研究会理事長　小田村寅二郎氏

（参加学生を代表して）　熊本大学　工　三年　松田信一郎君

合宿の構成の説明及び運営上の諸注意　〃合宿教室〃運営委員長　日商岩井㈱　沢部寿孫氏

生活規律上の諸注意　〃合宿教室〃学生班長代表　東京大学　経　二年　石村善悟君

参加者自由発言　（参加学生を中心として学園生活における日頃の感想を思い思いに登壇し自由に発言）（一時間半）

夜

主催者側自由発言（国民文化研究会及び大学教官有志協議会会員による自由発言）（一時間半）

班別討論（一時間半）

（男子学生班二十三班の班長を六つのグループに分け、合宿運営委員の司会により、毎晩行なった）

検討会（十時半〜十一時半）

運営委員会（運営委員によるその日の検討会・十一時半より毎晩深更まで続けられた）

第二日（八月八日・金曜日）

午前

国旗掲揚・体操（七時）（第三日以降も同じ）

○講義「国家と大学」（一時間半）

鹿児島大学教授　川井修治氏

質疑応答

班別討論（一時間半）

午後

リクリエーション（昼食時に歌唱指導）

○講　義「学問と教育を、正しいそれ〴〵の軌道に載せるために」（一時間半）

国民文化研究会理事長・亜細亜大学講師　小田村寅二郎氏

質疑応答

班別討論（一時間）

夜

○講　義「これからの国造り——物心両面の理想は何か」（二時間）

世界経済調査会理事長　木内信胤氏

質疑応答

班別討論（一時間）

第三日

（八月九日・土曜日）

午前

あいさつ

亜細亜大学学長　太田耕造氏

○講　義「欧米は間違っている」（二時間）

奈良女子大学名誉教授　岡潔氏

質疑応答

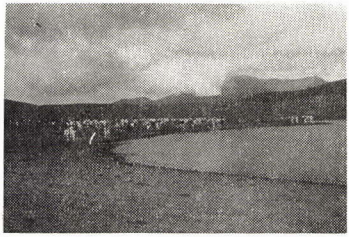
班別討論（一時間）

記念写真撮影

午後

○講　義「和歌創作導入」（一時間）福岡県立若松高校教諭　山田輝彦氏

阿蘇登山（二時出発・五時帰着）



阿蘇登山

慰霊祭

祖国を守るために尊い生命を捧げられた、すべてのみおやの御霊を祭る慰霊祭は、篝火にうつし出された中庭に、特設された式場で簡単な中にも厳粛にとり行なわれた。

夜

班別輪読（一時間半）

慰霊祭（一時間）

班別懇談（三十分）

第四日

（八月十日・日曜日）

午前

○講話「宮中見聞談」（一時間半）

元侍従次長　木下道雄氏

○講　義　「和歌は日本文化の精髄である」（一時間四十五分）

亜細亜大学教授　夜久正雄氏

午　後

○古典講義　「文字の学者日用を知らず」（一時間半）福岡県立修猷館高校教諭　小柳陽太郎氏

班別輪読（一時間）

地区別・大学別懇談会（一時間）

夜

和歌全体講評（一時間）　福岡県立若松高校教諭　山田輝彦氏

和歌相互批評（班別に行った）（一時間半）

最後の夜の集い（一時間）

四泊五日の合宿生活を顧み、明日の別れを惜しみつつ、参加者全員で茶話会をもった。

第五日

（八月十一日・月曜日）

午前

全体意見発表　（一時間半）

参加者全員の集う中で、つぎつぎに登壇して合宿の感想と決意など、率直な意見発表がなされた。

班別討論　（四十五分）

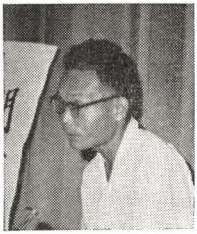
合宿四日間をかえりみて（一時間）　国民文化研究会理事長　小田村寅二郎氏

感想文執筆　（三十分）和歌をそえて提出、本感想文集はこれを集録したものである。

閉会式　（三十分）

一、国歌斉唱（二回続けて斉唱）

一、あいさつ



（大学教官有志協議会を代表して）　鹿児島大学教授　上田　通夫氏

（国民文化研究会を代表して）　国民文化研究会副理事長　浜田収二郎氏

（参加学生を代表して）　九州大学　医　三年　小柳左門君

参加者（学生—五十大学）　鹿児島大　鹿児島経済大　熊本大　熊本商大　熊本短大　大分大　長崎大　佐賀大　九大　九工大　九州歯大　福岡大　西南大　福岡教育大　北九州大　九州産業大　岡山大　山口大　香川大　皇学館大　神戸大　京大　名工大　花園大　大阪外大　奈良女大　京都女大　玉川大　専修大　上智大　東大　明星大　法大　拓殖大　一橋大　早大　亜細亜大　防衛大　日大　神奈川大　東海大　明大　中大　埼玉大　桜美林大　青山学院大　慶大　工学院大　富山大　東北大

計二百四十三名（内女子十八名　高校生一名を含む）

（社会人班）　会社員　熊本県小中・高教諭　福岡県中・高教諭　信用組合　大学助手　団体職員　**計七十八名**

ほかに—**（招請講師）**四名、**（大学教官）**十名、**（その他の助言者）**五十七名、**（事務局）**十一名

参加者総合計四百三名

来賓・教官・助言者などの紹介（敬称略）

来賓教官

熊本大学名誉教授　松本唯一
亜細亜大学教授　筑紫平蔵

助言者

水野農業問題研究所　水野武夫
明星大学教授　奥田克巳
長崎大学学生部　植木九州男
鹿児島大学教授　上田通夫
元武雄市教育長（現市会議員）　毛利潮
熊本・砥用町立東中学校教頭　北島道治
社団法人国民文化研究会副理事長　浜田収二郎
熊本県・林業研究所指導部長　瀬上安正
自由民主会館・管理部会議室主任　今泉重郎
共同通信社・論説委員　島田好衛
元八代市教育長（現助役）　加藤敏治
富士学院教務部次長　加部隆三
玉造・こんや旅館主　青砥宏一
亜細亜大学講師　倉前義男
下関・宝辺商店経営　宝辺正久

電源開発㈱・伊予電力所事務課長　長内俊平
横浜・舞岡八幡宮宮司　関正臣
大分県・国見町教育委員会教育主事　三重野悌次郎
岡山県立笠岡商業高校教諭　名越二荒之助
福岡県立宇美商業高校教諭　小林国男
熊本市役所・経済部長　徳永正巳
佐賀県立佐賀工業高校教諭　末次祐司
小泉明会計事務所所長　小泉明
安田信託銀行・渋谷支店長　松吉基順
山陽電気軌道㈱・山口営業所所長　加藤善之
熊本・八代市厚生会館事務局長　百崎素明
福岡県立八幡西高校教諭　村田英雄
熊本市立竜南中学校教諭　松浦良雄
㈱千代田コンサルタント総務課長　上村和男
亜細亜大学・学生部学生主事補　千々和純一
神奈川県立横浜翠嵐高校教諭　國武忠彦
神奈川県立横浜平沼高校教諭　福田忠之
新技術開発事業団・管理部業務課　野間口行正
中京コカコーラボトリング㈱　高村光紀
日商岩井㈱東京支店・海外統括課　沢部寿孫

皇宮警察本部・皇宮護衛官　亀井孝之
医師　木田浩隆
九州大学大学院・医学研究科　田村潔
亜細亜大学・広報室職員　岡部篤厚
東京鋼鉄工業㈱・浜松営業所　大川寿雄
長崎県経済農協連・園芸販売課　内田英賢
農林省林業試験所・農林技官　行武潔
宮崎・都城市立庄内中学校教諭　坂東嘉美
㈱講談社・広告局　磯貝保博
神奈川県立新城高校教諭　山内健生
神奈川・箱根町立仙石原小学校教諭　岩越豊雄
東京・関東高校教諭　井上佳彦
九州大学付属病院内科研修医　友池仁暢
八幡製鉄㈱・管理部組織課　今林賢郁
富山県立福光高校教諭　岸本弘
熊本・嘉島町立嘉島中学校教諭　北島照明
㈱富士銀行福岡支店・営業課　島津正数
兵庫県立姫路北高校教諭　伊藤三樹夫
熊本県立御船高校教諭　片岡健
近畿大学付属小学校教諭　堀切勝之
熊本県立八代高校教諭　高瀬邦一
三井石油化学工業㈱・人事課　河原倫子
岩波書店㈱　梅田咲子
日商岩井㈱広島支店・経理課　折本求
東急建設㈱・建築技術員　奥冨修一

合宿運営委員

（助言者と兼務）上村和男・国武忠彦・沢部寿孫・亀井孝之・田村潔・今林賢郁・北島照明・岸本弘（いずれも前出）
（東大二年）石村善悟・（皇学館大四年）山脇敏夫・（長大四年）田中洋・（岡大三年）菅志郎
（熊大三年）高田允

写真班

（最高裁判所・秘書課）西川伍朔

記録班

（国民文化研究会職員）石井恭子・（福岡市）菅野テル・（八代市）中津睿子・（熊本市役所）中山悦子・（福岡修猷館高三年）松尾新子・（同一年）西高辻信美・（鹿児島甲南高一年）川井治子・（お茶の水大付属高一年）小田村和江・（福岡城南中二年）小柳志乃夫

合宿事務局

走り書きの感想文

第一班—男子学生—

日本の国柄を肌で感じた五日間

この五日間は、生れてから今迄のうちで最も緊張した日々でした。開会式の君が代斉唱で、体中がジーンとするのを覚え、また、木下道雄先生の天皇陛下のお話をお聞きして、なにか涙があふれ出そうな気持ちになった。日本は、二千年余り続いている天皇を中心として、国民が天皇をお慕いし、また、天皇も国民の上を思われながら、その歴史を形作っている。同一民族、同一言語の一大家族であるということを、直接肌で感じたような気がしました。岡潔先生が『文化勲章を天皇から頂いた時に、なんともいえない感動をうけた、それが日本民族というもの』とおっしゃったが、それがなんとなく自分にもわかるような気がしました。

（九州歯科大学　三年　小田展生）

諸先生方の人生態度に心うたれた

自分自身の考え方のあいまいさ、いいかげんさというものに、自分ながらいやけがさしてきた。日々の生活態度、言葉を一つ一つ思うにつけ、痛烈な自己嫌悪がわきあがってくるのをおさえることができない。一つの事柄に対し、今までの自分は考え方が余りに浅く表面的であった。そしてそのようなあさはかな自分をさし置いて、分ったような顔をして、人前でえらそうにのべたことが、はずかしく思われる。講義をされた多くの先生方のお話しの折、そのお話の姿勢にうかがわれたきびしい人生観と、厳格で真面目な御態度に、ほんとうに頭を下げずにはおられない。

（熊本大学　法　一年　曾根田　満）

真剣に生活していなかったことに気づいた

日本的精神、あるいは仏教的精神とはどんなものであるかを知りたいと思って合宿に参加しました。しかし、人の話だけを聞いてそのようなものを知ることができるのではなく、自分自身の行動の中に自然とあらわれるものであり、知識として理解できるものではないと思いました。

最後の全体意見発表の時間に、「今迄、合宿でやってきたことは『まごころ』とか『謙虚さ』という様な言葉に酔っていたにすぎない」という発言を聞き何とも云えぬ腹立だしさを覚えました。今までは、間違っていることに対して、心から怒りを感ずる程、真剣に生活していなかったことに気がつきました。

（東北大学　工　三年　河合忠雄）

友に合宿の話をしてやりたい

この合宿は初めての参加ですが、参加学生の多いこと、一つの問題を真剣になって考えるということに驚きました。五日間があっという間にすぎ去ったように思えます。

私の大学は別に学生紛争はありませんが、九州大学や西南大学から三派や民青の活動家がやって来て、少数しかいない私の大学の活動家達と一緒になって学内でデモをやっております。私は、大学へ帰ったらこれらの学生活動家の友達に合宿の話しをしてやりたいと思います。

合宿に参加して自分にプラスになったことは、自分でものを考える力がついてきたことです。やっと友達になったのにもう別れていかなければならないと思うと本当に悲しい気持がします。

（福岡大学　経　二年　大熊信久）

大きな収穫があった

四泊五日の合宿生活の中で、僕は何かつかんだ。それが何なのかハッキリと表現することは出来ないが。人として生活していく際の自分の姿勢を正さなければいけないことがわかった。また、一人の人間として真剣に生きること、考えることは苦しい。この合宿で真剣に生きることの厳しさの一端を体験することができたのは、大きな収穫であった。言葉はそれを実感として自分の心の内で感じて口にしなければ無意味であることもわかった。

学協活動をやっていく上に何か今迄に欠けていたものがわかった気がする。

（長崎大学　工　一年　西田伸二）

自分の考えを言い尽し得なかった

人に誠心をもって接するということは難かしい。明日死んでも悔いは無いと云う心境で渾沌とした日常生活を、その本質を見失なわずに生きるということもまた難かしい。この困難を克服して生きるということは大変なことだと思った。これを乗り越えていくには、痛烈な反省と、苦悩と悲嘆と焦燥に満ちた大きな壁を乗り越えねばならないのだ。これは今の

私には至難のわざであると知った。また、班別討論で友と話す時、自分の気持を思うがままに云えなかった。友の話しに即座に自分の意見が出て来ない。友に十分に自分の考えを言い尽し得なかった。それが残念でならない。しかし何かをつかんだようだ。これを明確にして心の支えにしたい。

（九州大学　歯　二年　吉田哲太郎）

講義の聞き方も教えられた

今まで学んできたものと異なった物の考え方や意見を聞くことができ、心が豊かになった。また規則正しい生活は気持がよく素晴らしいものであった。ここでは、「与えられたもの」を一心不乱になって考えることができた、講義においては、講義の聞き方まで教えられた。

今後はすべて、自分との戦いであると思うと心に大きな負担を感じるが同時に大きな可能性も生れてきたと思う。

（神奈川大学　経　二年　森本誠司）

心に思うことを素直に云えなかった

班別討論で色々と討論しあったが、それは正しい意味での討論ではなかった。班員のお互が自分を飾り、なかなか心に思うことを素直に話そうとしなかった。本当に心に思っていることを誰れにはばかることなく云って欲しかった。私も心に思ったことを素直に云いたかったが、どうしても云へなかった。班の人々に申し訳ないと思うとともに本当に残念であった。

合宿に参加するときは消極的であったが、参加して本当によかった、ただそれだけです。この良き経験をこれからの学園生活に如何に生かして行くかが、大事なことと思います。悔いない生活をするよう頑張ります。

（専修大学　商　一年　堀之内耕司）

何もわかっていないことがわかった

諸先生方の講義にも、正直に言って深く感銘したわけでないし国文研の主旨が納得できたわけでもない。友の言うことが完全に解ったわけでもない。この合宿で何を得たかというと、自分は何も解っていないのだということ、そして何も解っていなかった箇所がおぼろげながらわかりかけてきたということを痛切に感じたことである。

ひとつだけ気になったのが、マルキシズムは誤りであると断定していることでした。

（九州大学　農　三年　広瀬将徳）

心から話せなかった

人生を心の底から語り合いたかった。涙しながら、あるいは大きな声で笑いながら友と心を開いて語り合いたかったのだがそれがどうしてもできなかった。

それは、私が今まであまりにも紳士的で相手の納得できない意見にも、まあまあの態度でつき合い、悪いことをはっきり悪いときめつける生活態度に欠けていたからだと思います。

（玉川大学　文　一年　青木常泰）

第二班―男子学生―

岡潔先生に叱られてうれしかった

三日目、岡潔先生の御講義後の質疑応答の時、強いおしかりを受け、班に帰ってからも班員から批判を受けた。しかしそれらの言葉がうれしかった。実にうれしかった。卒直に批判してくれる人の言葉が何の抵抗もなく心に入ってくる、そういう人に会えた喜びを自分は素直に感じ得たのだ。人と人との交わりの中にもそういうものがあるということ。この合宿教室に警戒心を持っていたというのが正直なところだったが、でも今は、思い切って飛びこんでみてよかった、来てよかった、という気持でいっぱいだ。

（玉川大学　教　一年　松岡康生）

天皇のお人がらにふれてうれしかった

木下先生の御講話をお聞きして陛下のお人がらにふれることができたことがうれしく、有難い思いでいっぱいです。

御講話の最後に声をつまらせつつ「私は年寄で、もうお目にかかることもないだろう。どうか私の話を覚えておいてください」とおっしゃいました。祈る様なお気持であられたと思います。

岡先生に質問し、一喝された友達が最後に、自分は「今までしかられたことがなかったんだな」とぽつりと心を開いた言葉を吐いてくれた時は本当にうれしかった。

（上智大学　経　二年　北崎伸一）

魂のふれ合いを感じた

この合宿に初めて参加し、同じ友達、あるいは多くの先輩たち、先生から、ほんとうに有意義なお話をたくさん聞いた。そしてその人達の内心よりほとばしり出た言葉を聞き、その人の魂にふれたように思う。顔も知らぬ者同士が同じ屋根の下で暮すことによって、共に語り合うという体験はめっ

たに得られない機会であり、貴重な体験でした。

（明星大学　理工　二年　斉藤　茂）

『やるぞ』という力がわいてきた

合宿直前まで結婚と就職のことに悩み、どう決断していいのか迷い、苦しくて堪えられない位だった。不安とあせりで、頭が混乱し、合宿一日目は何が何だかわからなかった。しかし二日目からの講義で、自分の存在について大きなショックを受けた。これまでの自分の思想とか生き方が大幅にゆれ動き、何が何だか、自分が何を考えているのか、混乱してしまった。でも、このショックが、どういうものであったのか今は表現できない。頭が混乱しているにもかかわらず、何かやるぞという力が強烈にわきあがってくるのである。

（法政大学　法　三年　田村平八）

心のふるさとに帰った気持

非常に素直に先輩の言葉、諸先生の御講義を受け取める事が出来た。木下先生の体験を通じての天皇のお人柄についての御講話には涙が流れてしようがなかった。いつも国民全体の幸福を考えられ、祈られ、それを行動に表わされている天皇。まさに真心の道をお歩きになる天皇。何か遠い昔に忘れてしまった心のふるさとに帰った気持がする。

（大分大学　経　二年　藤戸清澄）

心のこもった言葉にうたれた

班別討論の時、ちょっとよくわからないと尋ねると、本当に納得がいくまで、こんこんと話して説いてくれた班員の心のこもった言葉に、私はうたれた。そういう雰囲気の中で、私も、気がねなしに思ったことを語ろうとするが、どうしてもためらいがちで、恥かしいということが先に立ち、言葉が出てこない。私の心の殻はこんなにもかたいのかと、その時ほど自分がいやで、情なく思えたことはなかった。

（岡山大学　理　一年　湯浅　保）

心身共に疲れた

この合宿で自分は疲れました。精神的にも肉体的にもたいへん疲れています。多くの事柄をぶっつけられました。私はそれを逃げていたのかも知れません。

国文研の人達は激しい熱情を持っています。そのことはすばらしいことに違いありません。併し私は、本能的にあまりに激しいものに対しては、危惧の念を覚えます。私は静かでも力強い情熱を持ちたい。激しくほとばしり出るものは、長

く続かないという予感がするのです。

（鹿児島大学　法文　三年　玉田末信）

第三班―男子学生―

生命の躍動を体験した

この合宿はすばらしいものだった。なんといっても、これからの生活態度、すなわち、心の姿勢をどうすれば良いかわかったからだ。観念のみで考えたり、傍観者的態度でものをみつめることのまちがい、そしてそのような態度は自分の心を生かすことができないこともわかった。精一杯に力を出しきって物事に没入するとき、そこに喜びが生まれ、生命が生き生きとしてくることを知った。

班別討論の時には、自分の体験と照らしあわせて一生懸命考えながら話した。しかし、さらに、自分の言葉を先生にきびしく直されたときには魂がゆれうごいた。すごい緊張だった。

友達から学び得たものも大きなものであったが、古典の中に生きる人々の心の姿勢がすばらしく立派であることを知って感銘を受けた。これからは、それを自分の生活態度にしようとただ思うばかりです。

（九州大学　経　二年　藤井清孝）

太子の御言葉が心に伝わってきた

口で言い表わすことのできない何かが胸のなかで渦巻いている。この阿蘇に来る以前の自分は、友の心にとびこんでいけずもどかしさばかり感じていたが、今は「あれではいけなかった。自分の心を包み隠さず話せば必ず通じあえるのではないか」と心から自分に言い聞かせています。

『若し自らに縛（ばく）有りて能く彼の縛を解かんは、是の處（ことわり）有ること無し。若し自らに縛無くして、能く彼の縛を解かんは、斯れ是の處有り』との聖徳太子の御言葉が、身にしみて痛いほど自分の心に伝わって来ます。涙で目頭が熱くなるような思いを大切にしてこの合宿以後も生きてゆきたいと思っています。

（九州歯科大学　三年　深水康寛）

他人に甘えていた

大合宿に初めて参加し、しかも班長ということで、最初はどういうふうにして合宿に取り組むか本当に迷いました。一日目は班のなかに何かみぞがあり、なかなか胸襟を開いて心からぶっつかるということができず、各人が思い思いの方角を向いているように思えました。この時、岡潔先生が『自分の目で見、自分の頭で考えなさい』といわれたお言葉に強い

ショックを受けました。それまでの自分はあまりにも他人に甘え、何か外側の自分だけを見せていたように感じました。班別討論で率直にこのことを述べたら、班員が本当に心を開いて自分の思いを述べ始め、お互いの気持が通じ合うようになった時は本当にうれしく思いました。

（法政大学　法　四年　猪股文彦）

自分の持ち場で最善を尽くしたい

「参加してよかった」まずこう言いたい。この合宿で自分の心があまりにも汚れていることを知りました。人の素直な気持の美しさを感じました。

多くの人達が学園で正常化のために努力しているのを聞き、また諸先生のお話をうかがい、自分の持ち場で最善を尽くそうという気持が強く沸きあがってきております。

（玉川大学　工　二年　福岡英一）

真摯な態度を実感した

自分にも、他人にも、そして人生に対しても真摯な態度で臨むということ――これが合宿で得たひとつの実体験です。どんなに素晴らしい美辞麗句をもってしても、真摯な態度から出たなまの言葉には決してかなわない、ということを感じました。

（一橋大学　経　一年　黒岩良樹）

身近かなものからわかっていきたい

「頭では知り得ても、本当に解ることはできない」これがこの合宿で解ったことです。これから自分のやることは知的にではなく体験を通して解ろうとして努力すること以外に何もありません。ひとつひとつ、身近かなものから解っていきたいと思っております。

（長崎大学　教　一年　本田　栄）

自分の思想は自分で創らねばならない

やっぱり人間は一人でした。それにたえきれず何かをアテにしてやって来た僕の考えが甘かったようです。

僕はふたたび一人で去らねばなりません。しかし、この合宿で感じた恩師の暖かいお心とそれに対する感謝の念を大切にして生き続けるつもりです。

（京都大学　教　一年　財津順一）

心に響かない言葉は使わないように心がけたい

話すということはこれほど難しいものだったのか。事実、話しているのはこの「私」なのだが、「私」が本当に思っていることとは別の、ささいな知識を遠慮会釈もなしにしゃべっていたのだ。その知識たるものはいつでも手に入るし、いつでも捨てることができる代物なのだ。そして不正確な単語の羅列に終ってしまう。そういう時は、必ずといってよいほど自分の言葉に飽いてしまう。また相手の言葉もそういう風に聞えてくる。これは決して良いことではない。簡単にはできないかも知れないが、心に響かない言葉は使わないように心がけていかなければならない。

（鹿児島大学　法文　三年　金津洋雄）

日本文化を正確に理解しなければならない

日本の文化を次の世代に伝えるためにはまず自分が正確に理解しなければいけない。体験からにじみ出た言葉は本当に人々を感動させると思った。また、物事に対しては、忠実で誠実でなければならないことも学んだ。

この合宿で学んださまざまな事が、私の将来に良き指針を与えてくれると思う。

（拓殖大学　商　四年　加藤茂男）

第四班―男子学生―

友の心にじかにふれる難しさを痛感した

友人の心を本当に理解し、その気持にじかに触れるということがいかに至難のことであるかを痛感させられました。自分では友の言葉に心を傾けて聞き入っているつもりなのですが、どうしてもわからないことが幾度かありました。岡先生のご講義の質疑応答の時、質問した学生が先生のお言葉を正確に受けとめていないのを、先生が厳しく御指摘になりました。そこで私は、岡先生御自身の使われるお言葉のひとつひとつが、先生のお心の中の明確な実体とかたく結びついているのを感じました。友の心にじかに触れるためには、その人の言葉を正確に受けとめ、その言葉に結びついている心の中の実体や感動を正確に感じとることが最も大切なことだと思いました。

（岡山大学　医　二年　田中輝和）

全身が震えるほどの感動

『杖を取り去ってみろ、そのあとに何が残るのだ』と厳しいお言葉で小柳先生は語られましたが、そのことは今年の二

月頃からひしひしと感じておりました。木下先生のご講話を拝聴し、理論の支配する世界とまったく違った世界があることを全身が震えるほどの感動をもって確信しました。それこそ人間の生活であると思いました。その生活に心の奥底から感じ入ることのできる自分自身も、たしかに生活をしているのだと思いました。私が憂えていた、政治が文化を食いほろぼしつつあるという事態に対し、文化を創っていくものは正義、愛などの大言壮語ではなく、まさに生活そのものであるとの小田村先生のお言葉が強く心に響きました。

（東京大学　教養　一年　加来至誠）

学生運動に全力を傾けることができる

私の大学生活のすべては学生運動にかけられているし、それを抜きにしては私の大学生としての存在は考えられないように思います。一、二年生の時、私は学生運動と学問とを対比して考え、その中間に自己を置き苦しんでいました。しかし苦しみながらやってきた学生運動を通し、またこの合宿を通して両者は決して相対立するものではないことを確信しました。このことが今後の私の学生運動の不動の信念となりつつありますし、自信をもって運動に全力を傾けることができるような気がします。私が本当に望んでいる学生運動を追求していくということは、学問および人生を追求することと確信しました。

（長崎大学　教育　三年　熊本　司）

人生を味わいながら生きたい

夜久先生のご講義で『感じることのできる人間になれ』という意味のことを言われましたが、私はそれを聞いて、今までの自分が、何と感じることの少い人間だったのだろうかと痛感しました。自分の周囲のあらゆるものに対して、豊かな気持をたえず心の中にもちながら学問に対処する、それは辛いことや悲しいことをも伴うものであり、それだけに人生に味わいがあるのだろうと思いました。味わいながら生きるということは、たとえそれが短い生であったとしても、人間が精いっぱい心に感じながら生活するのであれば素晴しい一生だなと思いました。また自己に厳しくなければいけないことを痛感しました。自分をたえずみつめながら、厳しい姿勢で生き抜かねばならないと感じました。

（鹿児島大学　法文　三年　岡本幸信）

感動できる人間になりたい

自分の悩みの一部でも解決できればという気持でこの合宿に参加した。おぼろげに解決の糸口をつかんだような気がするがはっきりとしていない。自分自身の殻のなかにとじこも

り、相手の言ったことを概念的なものとして受け取り、半ば失望しかけたこともあった。

しかしながら、本当のことを知る為には自分自身を赤裸々に出さなければならないのではないかと思った。もっと自分を見つめていかなければ、いつまでたっても何も得ることもなく終ってしまうのではないかと思います。感動できる人間になりたいと思います。

（亜細亜大学　法　二年　新井修身）

緊張した気持を持続しなければならない

期待に胸をふくらませて来たものの、最初は求めていたものと違い失望した。というのは、学生運動をしている人がその同志を求めるために、それぞれの状況を述べていると思ったからだ。しかし日がたつにつれて自分が求めていたような内容になり、そのなかに入ることができるようになった。ここでの体験が今後どのように自分に影響していくのか、全くわからないが何かが蓄積されたように思う。

この合宿で先生方が話されたことは、十分にはわかっていない。頭の中がグラグラしている感じだ。ただ緊張した気持を持続しなければならないと痛感した。

（玉川大学　文　一年　岩垣博士）

班別討論が楽しかった

合宿の予定表を見て、班別討論とか輪読などがあることに驚きました。実際、初めての合宿で自分はこんなことを上手にできるのかと不安でした。しかし、合宿が一日一日と過ぎるにしたがって、この班別での討論がおもしろいものになってきました。この班別討論で、言葉じりだけでその人のすべてを判断することがいかに誤っているかを痛切に感じました。

（皇学館大学　文　二年　小串芳夫）

理論では説明できないものがあった

五日間の合宿ではっきりと確信を持って感じることのできたことは、理論ではどうしても説明することの出来ない「人間の本質的なもの」があるということです。そしてそれなくしてはどんな理論も真実味のないただの理屈になってしまう。その本質は人の心といえるでしょう。その心は人に人生の知恵を与えてくれる最も本質的なものなのです。そして諸々の知識を得るための出発点となる筈のものなのです。それをこんどの合宿でやっと解ったと自信を持って云えます。

（九州大学　医　三年　江頭啓介）

感動を表現することは難しい

もっとも感動したのは、木下先生の〝天皇のお人柄〟について、体験に基づいて話されたことです。体験を大切にして良いものに感動する心を持つこと――それは日常生活のなかにもあることがわかりました。しかし、班に帰って話してみるとなかなかわかっているほどうまくいえません。何も言わないでいる時の苦しさは耐え難いものです。感動を自分の言葉として表現することは難しい、ということがわかりました。

（早稲田大学　文　一年　藤井　貢）

第五班―男子学生―

迷いに迷って参加したが

迷いに迷って来た合宿でした。国文研は右翼ではないだろうかという偏見や、ひとつの思想に固執してたまるかという気持が強くありました。しかし私のこの様な考えは見事に打ち破られました。美しい人間の気持というものが、大切だということをこれほど強く感じたこともありません。自分の殻にとじこもってしまっている為にその気持を十分に表わせない。またその気持の囲りに様々のゴミがからみついて、その感覚が消えかかってしまっている者もいます。しかし、その人間をいつくしみ、まごころを尽くすという感覚こそがわれわれのすべてではないかということを感じました。

（早稲田大学　法　一年　古川　忠）

天皇と国民との美しいふれ合い

この合宿で強く心に刻みつけられたのは、木下先生の御講話であった。先生のお話を聞いて、天皇の大御心にふれ、そして天皇と国民との美しいふれ合いをお聞きして胸からこみあげてくるものがあり、いつしか涙が流れていた。この合宿には数回参加して、天皇・国家・学問そして人生のことを考えてきたが、何かしら私の心とはへだたりがあるようなもどかしさを感じていた。しかし木下先生のお話を聞いた時、天皇と国家とそして私の生き方が統一されるような感動を覚えた。天皇の御製を拝誦して、大御心をあおぐことが国を想う心に連らなり、そして私の人生を叱咤してくれるように思いました。

（鹿児島大学　法文　四年　松木　昭）

日常生活にこの体験を持続していきたい

今年の合宿は私にとってようやく自己を目ざめさせてくれ

たように思います。山田先生の「時事問題は応用問題で、それ以前に人間の本質を知るべきだ。その本質を教え、それを学ぶのがこの合宿教室だ」との言葉を聞き、私たちが日頃サークルで行なっている討論がいかに本質を忘れた空論であるかを痛感させられた。そしてその本質を強く感じたのが慰霊祭でした。この合宿で学んだものをいかに日常生活において持続させるか、あるいは行動として具体化していくかが私に与えられた課題です。学生運動だけが行動することではないと思います。私は私の与えられた状況の中で、友達を一人でも多くふやしながら、まずサークルを通して活動して行きたいと思っております。

（鹿児島経済大学　経　三年　相徳和義）

天皇の大御心に触れた

木下先生のご講話を聞き、はじめて天皇の大御心に触れた思いがしました。我々の先人達が天皇を慕い、天皇を国の中心として幾世代もの間、生活してきたことを伺って涙がこみあげてしかたがありませんでした。

この気持が岡先生のお話に通ずるものなのかなと思えてきました。それで岡先生が、班に来られた時に、このことをお話ししたら、先生は「こましゃくれた受け取り方だ、そんなこましゃくれたことを感ずる前に、大御心がわかったら、あ天皇に申し訳ありませんでした、私が悪うございましたと感じられないのか」と強い語調でいわれました。そして「伊勢の内宮、外宮をおのづとお慕い申しあげる素直な心をもつことだ」とほとんど聞きとれない位のお声であったが心をこめて教えて下さいました。その時私は一言もいえずに、じっとうつむいてしまいました。そして私は素直に感ずる心がいかに大切であるかを思い知らされました。

（法政大学　法　三年　小川洋司）

天皇陛下を身近かに感じた

この合宿で掴んだ唯一のことは自分で真剣に考え、自分の考えを確立させることです。それから木下先生のお話を聞いて、今まで漠然としか考えていなかった天皇陛下のことを、具体的な事象をまじえて話されたことで、天皇陛下がぐっと身近かに感じられ、陛下をお慕いする心が強まり、木下先生が言葉につまられるたびに自分の心も感情が昂ぶって、先生と自分とが真に一体となっているような感じを持ちました。特に皇居前の広場での分列式における陛下の御態度についてのお話に心を打たれました。

（上智大学　法　一年　飯白誠一）

討論の本当の姿を知った

今までわれわれが行なってきた討論は理論ばかりで本質をついていなかったようです。今回の合宿で行なわれた班別討論は、理論をたたかわすのではなく、自分の感じたことを率直に述べ、また正直に、自由に、話し合う形をとっております。その結果、みんなが活発に自由に自分の意見を発表できる場を持てたのです。今回の合宿で得たこの経験を他の討論でも大いに生かしていこうと思っております。

（亜細亜大学　経　二年　荒平　裕）

真剣なまなざしに心うたれた

班別討論において、私が最も心うたれたものは班長の小川君の真剣なまなざしであった。

自分にはあまりにも大きな甘さがあったと反省しています。真剣に生きたいと思います。

（福岡大学　法　四年　久保文剛）

祖先の血を受け継いでいる自分

今まで大学生活を過ごしてきて、いろいろな意見を聞き、またいろいろな本も読んだ。けれども自分の考えが浮草のように、地についたものではなかったのだ。その大きな原因は自分の頭で考えなかったことである。「自己とは何ぞや、社会とは何ぞや」と考えてきたが、それはまったく考え違いして来たことを知った。自己とはぽつんと宙に浮いているのではなく、遠い先祖からの血を受け継いで来たもので、日本の祖先の歴史を知らなくては何もわからないということだ。これからの自分の歩む道がどのようなものであるかわからないが、苦しい時も「僕だけが苦しい目に会っているのではない」という気持で、希望ある人生を送りたい。

（長崎大学　経　一年　北村好信）

第六班—男子学生—

人間のあたたかさを感じた

四泊五日の合宿を顧みるとき、私の心の奥底には何か生き生きとした力強い若い生命が燃えるのを感じます。〝日本人としてまた一人間として私は何かを為さねばならぬ〟そんな気持がするのです。

合宿で知り合った友、その友の一つ一つの言葉や口調、そして行動が私に何か〝人間のあたたかさ〟を教えてくれた。

御講義に際しては、胸が熱くなるものを感じた時が幾度も

ありました。大学では得られないような、心と心の対話を私は無言のうちに交したような気が致します。

（上智大学　法　一年　山口良男）

勉強するぞ！

合宿が始って、いろいろな先生方のお話を聞き、班別討論などを通じて痛切に不勉強さを感じ、一時はがっかりしましたが、現在は〝勉強するぞ〟というファイトに満ちあふれています。また強い感動を覚えて聞いた木下道雄先生のご講話の一番最後で、先生が我々に「皆さん、これからの日本をよろしくお願いします」と言って頭を下げられた時、僕は〝自分も将来日本を背負って立つ者の一人なのだ〟という使命感を切実に感じました。

これからは人間の真心が素直に感じられるような人間になるよう努力していこうと思います。いつまでも「人を信じる気持」を大切にしていこうと思います。

（東北大学　工　三年　岸本洋一）

すばらしい〝日本人の心〟

私は今までこの五日間程充実した日々を過したことはない。我々日本人の生き方にじかに接した思いだ。〝日本人の心〟それはすばらしく尊いものだ。我々は過去の祖先のそれを受け継ぎ、現在にはらませ、さらに将来に伝えてゆく使命がある。それにつけても諸講師の御話を聞けば聞く程、自分の不勉強さと、これまで何となく自分が日本人であることさえ自覚せず過ごして来た日々が悔やまれてしかたがない。僕はここで学んだことを基礎にして、それをさらに深めて自分の人生観を確立し、これからの将来の方向性を見定めたいと思っている。我々の大分大学でも、紛争が継続的に発生している。だが今こそ、我々の学園を真の意味において正常化し、勉学のできる大学にしなければならない。

（大分大学　経　二年　斉藤公明）

今までの経験にない真剣なもの

初めての参加であったので、なかなかなじめなかったり、分らないことが数々あったが、諸先生方のご講義に関しては、今までに経験することのなかった何か真剣なものを感じ取れた。合宿は五日間と短いものであったが、その間に感じ取ったものは今後の私の生活のあらゆる面で影響をおよぼすような気がする。しかし今ここで感じ取っているものを、今のこの強さでいつまでも持ち続けることは難しい。これからは努めて、この気持を大切にできるような生活をしたいと思

う。

（早稲田大学　商　三年　片山　裕）

知識にたよれない苦しい思い

学問の場は、真剣に学ぼうとする意欲ある友が集った時にこそ実現するのだと思った。班別討論の時、始めのうちは今までに蓄積していた知識で話し合っていたが、それでは自分の心は何も友と通じ合わなかったし、話せば話す程お互いが遠ざかっていく気がした。自分は一生懸命やっているのに、友はどうしてこちらに心を向けないのだろうと友を非難する気になった事もあった。自分の中に蓄えていた知識が僕の心の中で価値がなくなり、バラバラにくずれていって、何も自分の中に残っているものがなく、知識にたよれない苦しい状態がきた。それからであったと思う、自分が相手の心に全身を傾けようとし、友も身近なことで自分の感ずることをいうようになったのは。以後は班別討論を楽しみに講義を聞いた。見ず知らずの友が合宿を機縁に何でも素直に話せる友となれたことは、喜びであった。今後ともこの交わりをたやさずに続けたい。

（西南学院大学　文　四年　小野吉宣）

別れるのが寂しい

本当にあっというまに過ぎてしまった四泊五日でしたが、大変有意義であったと思います。諸先生の御講義は、みな熱意あふれるご講義で、深く感銘を受けました。特に木下先生のお話の時には、思わず目頭が熱くなることが何度もありました。班の人達とも何かこのまま別れるのが寂しい気持がしています。これからも僕は、日本の古典を真剣に学び続けて行くつもりです。

（早稲田大学　文　三年　原川猛雄）

先人の生き方を学びたい

人間が一人一人本当に幸福を感ずるとはどのようなことなのか。生きていてよかった、この世に尽くすことができたと一生をふり返って思うようなものはどのようなことなのか。そして自分が自己の無力さを腹の底まで感じ、またそれでもなお、この人の世に何か役に立つことができるのではないかということを、繰り返し考え続けてきた。このようなとき、先人は何を考えたであろう。どのように悩み苦しみ行動したのだろう。僕は日本の古き偉大な思想家の言葉を読もう。自分の命が、日本に流れる民族の命の中に生き生きとよみがえるのではないかと思う。

（九州大学　理　四年　中原誠男）

密度の濃い講義

何か満ちたりない安心できない、あせりに近い気持からこの合宿に参加いたしました。合宿を終えようとする今もこの気持はありますが、来てよかったという気がします。僕は自分の考えに自信がなかったので、人の考えに対するしっかりした意見がいえなかったのですが、みんなの真剣な態度、何とか自分の考えを僕に分かってもらおうとする態度には心打たれるものがありました。

また、大学における授業とは変わった感じの、何か、より密度の濃いそれぞれが充実した講義や講話をお聞きして、感銘深いときを過ごすことができました。

内容に関しては、安易に批判じみた考えをまず立てて、つい自己満足におちいっているときもありました。これからは常に自己に厳しくありたいと思います。

（九州工業大学　化　二年　末次義明）

人間性を奪回したい

三派や民青との熾烈な学園紛争の渦中にあって、ともすればぐらつきひるみがちな自分の心に闘いぬくための強烈な使命感を再び身につけたいと思って参加した合宿でしたが、自分が単なる三派や民青のアンチ（反対）としての存在になりつつあったことに気づかされました。すなわち、いままでは戦術、戦略のためと称しておれば、嘘をつくということにも一片のはじらいも覚えないようなありさまでした。三派を憎悪しつづけることが一種の闘争のエネルギー源となりつつあった自分の心にいま気付き、これからは早急に真の意味での人間性を奪回することがいまの自分にとって急務だと思われました。

（長崎大学　経　二年　犬塚博英）

仕方なく参加したのだったが

この合宿に参加することは、はなはだいやで仕方なく来た感じでした。だから、班の人と一緒になっている場合でも、気がめいり余り楽しくなかった。途中でいやに思ったこともあった。講義をきいて、みんな感動しましたといわれる。ぼくも本当に感動するのもあったが、解からないところがかなりあって、班別討論でも自分の意見をのべることが出来ない。講義をきいて、天皇が本当に人民のことを思っていることはよくわかりました。ぼくは日本に天皇がおられることに異論はありません。でも天皇制とかになると、まだ理解できないところもあります。

この合宿で感じたことは、みんな素直であられることであ

る。いままでのぼくはひねくれていたのだろう。これからは相手の立場にたって、話などもきいていかねばならないと思いました。

（西南学院大学　文　一年　国平与四雄）

第七班―男子学生―

心が通いあう喜びを知った

感慨深い合宿であった。いいかげんな態度を許さないきびしい姿勢によって気まずい雰囲気が漂うこともあった。気まずい思いを避けるために私達はなれあいになってしまって笑ってすごしがちである。しかしその笑いの中には本当の喜びは少しもない。笑った後に残るものは空虚なやるせない感じだけである。そういった姿勢を徹底的に打破して「なになにすべし」の中に己れを素直に貫き入れておおしく進む姿勢を僕はこの合宿に見い出しました。その過程において起こる面白くない現象も真剣なるが故に共感を呼び、心が通い合うことによって、完全に氷解してしまうということがわかりました。小田村先生の御講義が終って今僕の心を満たしているのは、静かな安らかな思いです。この合宿が日本の永遠なる生命に触れさせてくれたからかもしれません。

（山口大学　経　二年　合志栄一）

日本民族の一員であることに誇りをもった

まず第一に感じたことは、「自分の心に率直でなかった」ということです。心で感じていけばよいものを、頭で理解しようとし、ある一つの定義づけができたら、それですべてよしとして来た態度、その狭量さ、不確かさを最も強く感じました。陛下に対する心情にも、今まで漠然と陛下を敬う心でありました。それは今までの日本人のたとえば習慣からくるものだろうぐらいに考えて、たいして気にとめておりませんでした。それがここでお話をうかがううちに、日本人の心の底に由来するしっかりした感情ではないかと思うようになりました。木下先生の御講話を拝聴して、陛下の心の気高さにうたれると共に、日本人であるからこそ、分列式の青年達は、陛下の心にうたれて雨の中で外套をとるという、陛下と彼らが同じ次元で心を通い合わせることができたのだと思いました。そしてその心に共感できる自分も日本人であったのだと強く感じました。

この合宿で自分が日本人である、日本民族の一員であることを誇りを持って言えるようになったこと、それが一番うれしいことです。

（明星大学　理工　一年　楠本達士）

教育に欠けていたものがわかりかけた

若い教員の方の力強い言葉が印象に残り、また真剣な態度に何か今まで経験したことのないものを感じた。私はできるならば、もっと教職にある方と接したかった。それは現在の教育に何かが欠けていると小、中、高校を省みて思うからです。しかしこの四日間の合宿を通じてその欠けているものがわかりかけた気がしますし、さらに自分で思考する際の指針を得られたことは、私にとって貴重な合宿でありました。そしてまたある一人の教員の方が、君達の中からも我々の仲間になってくれる人を期待すると言われた言葉は、もしかすると私の迷っていた将来を決定するかもしれません。

（早稲田大学　法　一年　北原賢三）

感受性を養うよう努力したい

この合宿で、僕は今まで事物、人などをみるとき、いつも傍観者的立場に安住していたことに気づいた。だからそこには、感銘も喜びもそれほど強くうまれなかったのだと思います。「四日間の合宿をかえりみて」という題でお話された小田村先生の御言葉が、実にずばりと僕の心をついたと思います。言葉をスローガン化してしまえば、その中には生きた人間の心が通っていないとおっしゃいましたが、丁度そのような現状に僕自身がいたのだということがつくづくわかりました。岡先生がおっしゃったように、僕は頭頂葉の感受性を養うよう努力します。だが反面、今までの自分の態度を正すのはつらいことですが、僕はその見栄のようなものを打ちやぶる努力は怠るべきでないと思った。

（長崎大学　水産　一年　久留島　学）

人間のすばらしさを感じた

まず人間のすばらしさを感じました。先生方は人間の凡夫さつまらなさを知るのが、自分がより前進したことだとおっしゃった。人間がよりよく生きるにはどうしたらいいのかということを求めてやまない先生方のご努力やきびしさに心をうたれました。また人間の凡夫さを知った人々の強さとか、人生に対する先生方の生き方のもつ自信というものが、うらやましくてたまりません。

（鹿児島大学　教　一年　米倉秀一）

人間本来の飾りのない心

僕は合宿で、人間の生き方を学んだ様に思う。ここに来る前は余り気が進まなかった。何故なら国文研という名や、出

席される先生や、或いは「日本への回帰」を読んで右翼だと誤って思い込み、心情的に反発したから。しかし、共産主義が伝統とか情緒とかおよそ心に関することを一切否定するのにも賛成できなかった。講義を聞いてはっきり解ったのはまず制度とか、主義とかが問題ではなく、大切なのは人間本来の飾りのない心だということです。それから、僕は皆のように、あんなに感動することはできなかった。僕がこの合宿で本当に得心がいったのは、小柳陽太郎先生のあの講義である。その中でもプリントにでてきた「思想とか理解とかいうものは、それのとりことなるのでなく、それを使いこなさなければならない」ということだ。これからはなお一層古典を学び、マルキシズムを研究し、日本の歴史を知り、多くの人と心が通じ合うように努力していきたいと思う。

（九州大学　法　一年　木村俊夫）

自分の甘さを反省している

今心残りなのは、ぼくにはやはり初対面の人と話すということに対するてれくささや、勇気のなさ、また気心のしれてるものと話している方が楽しいと思う自分自身に対する甘さがあったことを強く反省している。もっと最初から班員の一人一人に積極的に飛びこんで接していたなら、きっと皆が心の底から湧きあがってくる尊い言葉を述べてくれたのにと思う。

（一橋大学　商　三年　北川文雄）

素直さがよみがえってきた

中学生のころには持っていたと思われる「すなお」な気持と言うものが、今よみがえってきたように思う。今までには、口を開けば心にもないことを喋ってしまい、後でいやな気分になってしまうことがありましたが、今後はないだろうと思います。

（亜細亜大学　法　三年　牛ノ浜和人）

正確に言葉を吟味したい

昨年の初めての参加の時の班別討論では、自分の意見や考えらしきものを割合多く述べたように思います。しかし今回の班別討論ではなかなか自分の考えや思っていることは述べられませんでした。何も「良いことを言ってやろう」と言う心積りはなかったのです。友達に解ってもらえるように、自分の思っていることを忠実に述べようと思えばなかなか適当な言葉が出て来ないのです。自分の心情に忠実であろうとすればするほど発言はむづかしくなるような感じが致しました。和歌創作でも同じことが言えるのではないでしょうか。心の奥底から湧き上ってくる心情を適確な言葉で以って表現しようとすれば、なかなか適確な言葉は見付からないものです。

しかし、言葉の吟味を続けて行き、その適確な言葉を見出した時には、何か言い知れない嬉しさを感じます。私は二回目の合宿に参加して、これだけしか言えませんが、言葉では表現しにくい何ものかを掴んだことは確かです。

（皇学館大学　文　二年　白江恒夫）

裸の自分にぶっつかることができた

合宿は五日という短期間ではあったが、学内において、三派、民青対策などにおわれ、索漠とした生活のなかに忘れていた裸の自分にぶっつかることができた。そうすることによっておのずと班で、合宿にきた人との間にこだわりのない交わりができた。これからの人生の指標とすべきものに触れ得た感じである。

（大分大学　経　三年　浦崎貞治）

第八班―男子学生―

眼前の霧がはれた思い

最後の小田村先生の「合宿四日間を顧みて」のお話しの中で先生が「みなさん有難とうございました。私達の至らなかったところもありましたでしょうが……」と、おっしゃられた時、私達学生の中には先生方のお気持も解らず批判した者もいたことを思うと、本当に感激して涙が出そうになりました。去年合宿に参加した時は色々悩んでいましたので、がむしゃらに講義を聞きました。ご講義の全てが理解できたとは思いませんが何か私の求めるものがそこにありそうに思いました。今年再び参加してだいぶ目の前の霧が晴れて、よくお話の内容が解りました。今宿で得たこの言葉では言えない感銘を、今からの私の糧としていきたいと思います。

（長崎大学　経　三年　田中日出治）

観念論に走らぬ自己を形成したい

合宿に初めて参加したのですが率直に云えば〝難しい〟ということです。僕は日共系、反日共系と呼ばれる国体の変革のみを企てている連中を何とか説き伏せられるものがここで得られるのではないかと思って来ました。しかし、そのための理論を得ようとすれば、やはり理論は理論で、結局観念的なものに陥っていくような気がしました。何故我国の国体が二千年以上も続いてきたかを考えるならば、国体を変革しようとすることが如何にくだらぬことであるか自明のことだと思います。日本の皇統は国を支配するとか、支配されるといった支配服従の関係ではなく、天皇と国民の親子の如き信頼関係が我国の大もとであり、これが根本に強く流れていたからこそ、我国の皇統は続いてきたのだと思います。諸先生

の著作を読むことにより、〝難かしい〟と感じた講義をいくらかでも正確に理解して観念論に走らぬように自己を形成し、国につくすことが出来たら幸いです。

（慶応義塾大学　法　二年　小川　章）

天皇の御心を理解できた

岡先生の言葉にふれ、それまでは心の鏡が曇っているために感動というものを素直に受けとめることが出来ない状態であったのに、曇りが取れるとびっくりするように生き生きと自由な心になり感動をそのまま受けとめることができるようになった。木下先生の御講話の感動は特に強いものでした。理論的に天皇と国民のつながりを解明してもそこからはひからびた天皇像しかでてこない。お話しにもあったように天皇が国民のことをいかに考えていらっしゃるかを知ることが天皇を理解できる一番の近道だと思いました。私たちが日本の文化、伝統、歴史について学ぶ際の心がまえも天皇を理解するのと同じことだと思いました。本当にいいもの、正しいことは誰でもそれを理解できるということを確信すると共に、正しいものは周囲の状況に左右されずつらぬいていきたいと思います。

（長崎大学　経　四年　佐藤健治）

なにかが心の中に残った

僕は初めてこの合宿教室に参加したのですが、来る前は少しでも知識を増やして全共闘、民青などの人々を論破してやろうなどと考えていました。しかし、五日間の合宿を終え、今までの自分が何と小さな愚かな考えしかできず、また、自分自身で考えたことではなく他人の意見をそのまま言っていたのにすぎなかったことを強く感じました。

今、それが何であるか言葉で表現できないのですが、自分なりに何かが心の中に残ったのではないかと思います。

（熊本大学　法文　一年　福永好紀）

目先のことだけしか考えていなかった自分

話すということは何と難しいことであろうか。聞くということは何と難しいことであろうか。自分の心の内を、友に話そうと思ってもその思っていることの半分も表現できない。先生方の話をお聞きしてもおっしゃりたい内容は聞いていなくて、言葉の端々だけしか聞いていない。全く申し訳なくお顔も見ることが出来ないような気持です。目先のことだけしか考えていなかった自分の心は、何と小さくあさはかであったことか。この合宿に来て大変良かったと思っています。だ

が今の自分は霧の中に入っているようで、解ったようでまた全々解っていないような気持もします。ただ何かをつかんだような気持ははっきりとあります。

（早稲田大学　商　一年　西山芳克）

真の教育の場であった

小田村先生は最後のお話しで、私の感じていた言葉にはならぬ想いを云い現わして下さいました。他の誰がどのように思おうと私はこの合宿が本当の意味での教育の場であったと信じます。

（防衛大学校　四年　矢野　進）

現在のままの自分では死ねない

この五日間ほど私に深い感銘と同時に寂しさを与えた日はありませんでした。私は、いままで以上に死への怖れがつのりました。何故ならば私はここで人生の深さと懐かしさを真に知ったような想いがするからです。今の私に実感としてせまってくるものは、今のようなままの自分では死ねないということです。

（福岡教育大学　一年　廣　修治）

感銘、感動などの言葉で表現できない

合宿に来て本当に良かった。ただそれだけです。今日最後の班別討論、小田村先生の「合宿教室を顧みて」の中のお言葉の一つ一つ、木下先生の天皇陛下のお話など、感銘、感動などと言う言葉で表現すれば自分の胸の奥からこみ上げて来るあの熱い何とも言えぬものが消えるような何か強い印象を受けました。是非来年も参加したいと思います。

（拓殖大学　政経　一年　松浦伯郎）

現在の大学ではできぬ経験をした

このような合宿に参加したのは初めてであった。参加する前は一体どんなことを話しあうのだろうか、また見知らぬ全国の学生と一緒に話し合いをすることができるだろうかなどと不安であった。しかし班別討論をやっているうちにこの合宿が単に知識を断片的に述べあうような会ではないことを知った時、大学での講義がいかに知識のみの学問であるかをまざまざと知らされた。現在の日本の大学ではできぬ、美しい自然の中で全国の学友たちと一緒に勉強できたことは、大きな収穫であった。岡先生は日本人の心は日本人の国土になると述べられその実感を大事にせよと言われた。もう一度学問

と祖国と人生とを考えてみたい。

（亜細亜大学　経　二年　石川俊男）

第九班―男子学生―

新たな自分を再発見した

この度の合宿生活で、自分自身の心の中に具体的な刺激を与えられました。今まで、何んと純粋な心が欠けていたことか、そして素直でなかったのだろうかということが、胸にジーンと感じられました。もう一度始めからやり直してみたい、今まで何を追求してきたのだろうかと考えると、言葉を口にすることができません。小田村先生の厳しいお言葉により、新たな自分を再発見しました。そして週に一度必ず明治神宮に参拝し心を清めたいと思います。また、木下先生がお話しになった「天皇」について、心から溶けこんで行きたいと思います。今、私は、すべてが転機のように実感し、本当に心から感謝できる人間になりたいと思います。

（玉川大学　工　二年　橘　国太郎）

古典の勉強をもっとしたい

こんにち私たちに最も多く欠けているものは、相手に対する感謝の念ではないかと思います。班員と共に語りあい、相手の心を真に想えば、感銘を受けることがいかに多いか。合宿におけるこの体験はこれから大きな、すばらしい心を創り上げて行こうと考えていた私には大変得る所がありました。また日本の文化の伝統が何であるか、その精神がはっきりと判らなくともある程度つかめた事がうれしくてたまりません。古きものを知るにはやはり私達の祖先の遺されたものを学び、その中から会得したいと思います。そのためには古典の勉学をもっとせねばならぬと強く思います。

（明星大学　理工　三年　山本晴生）

今までの自分から脱皮しえた

一年におよぶ東大紛争の中で私が強く感じていたのは、偉大なものに触れた時、また、大切なものだと思った時の感動を持続させることが自分にはできないということでした。感ずべき時にも感じ得ず、発憤すべき時にも発憤できない自分でしたが、今回の合宿にむけて、何がしかの心の準備をしてゆくうちに、そんな自分から少しづつ脱皮しえたというのでしょうか、講義を聞く自分の心に先生方の御言葉が激しく敏感に感じられました。

小柳先生から班別討論の時に受けた叱責、それすら、その次には新しい力となって自分の体の中に湧いて来るものを感

じられたのです。もちろん、それらの力は十分なものとは言えないでしょうが、以前にも増してそう感ずることが出来たのは、共に学ぶ学友と、お教えを頂いた先生方のお力にあずかることが大きいと思います。先生方や学友諸兄に感謝せずにはいられない自分です。

（東京大学　教養　一年　伊藤哲朗）

日本はすばらしい

日本の国は、かくも美しきものであったのか。日本人は、かくもすばらしい人間であったのか。ただ、それだけを強く感じました。これ以上の宝が他にどこにあろう。僕は今、この二つのことを大切に育てて行きたいと決心しております。

（鹿児島大学　教　一年　畠中宗一）

心を一つにして語り合うことの困難を感じた

合宿生活の日程が進むにつれて、とげとげしい現実生活から来たすさみがちの心が、序々に洗い流されていく思いがしてなりませんでした。老齢にもかかわらず阿蘇の高原まで出かけてこられた木下道雄先生のお姿を拝見したとき、昨年十一月熊本の明治百年祭式典で、宮中の御体験を涙して語って下さったお姿が思い出されて、思わず胸が熱くなりました。

また、この合宿では、班長を務めましたが、皆んなが心を一つにして語り合うということが、いかに困難であるのか痛感させられました。その困難に生きがいを求めて来られた友だちの心を厳しく受けとめて、これからの新しい生活を送ってゆきたいと思います。

（熊本大学　工　三年　松田信一郎）

共に感ずることの素晴らしさ

私は何を拠りどころにすべきか、何に命をかければ良いのかという問題に悩み続けている状況のまま、この合宿に参加しましたが、答の出ないままで帰って行くことになりました。唯、この合宿に来て良かったと思うことは、人と共に、自然と共に感ずることの素晴らしさ、快よさを私に思い出させてくれたことです。私はこの「感ずる」ということを大切にして行きたいと思うのです。

（神戸大学　経営　三年　和泉俊郎）

感動したことを素直に述べることの大切さ

私は班別討論で、今の講義でこういう所がわからなかったと質問しました。すると、君はそういう所が気になっていたばかりで、他に何も感動する所はなかったのかと逆に質問さ

れました。私は感動したことを論じていると馴合いになってしまわないだろうかなどといろいろ考えていたので、討論というもの自体がわからなくなってしまいました。そのことで班長と議論した結果、感動したことを素直に述べることによって、次第に友達との間に和というものが出てくるような気がしました。これが一番の収穫でした。また木下先生の御講話を聞いて、陛下の御心に触れて強く胸をうたれ涙がこぼれそうになりました。この感動は忘れたくないものだと思います。

（福岡大学　商　二年　安西健二郎）

全学連が憎いのだが

全学連に対抗する為の理論を得ようとしてこの合宿に参加した僕の姿勢はまちがっていたと思う。諸先生の講義の真の意図は掴めなかったけれど、今迄のようなことではいけない、もっと内容の深い勉強をしなければならないと思った。

僕は現在、全学連が憎くてその反対運動をしているが、班長の松田さんに「学園を正すには全学連を打倒するしか道はないのだろうか」と云われたことをもっとよく考えてみたい。僕はこれからは日本の文化伝統の深い意味を探る努力と共に、全学連に対抗出来る程の理論も勉強して行きたいと考えている。

（長崎大学　経　一年　松脇長友）

心を開いて話す姿勢を日常生活に生かしたい

全く見ず知らずの班員が班別討論を重ねてゆくにつれて、心を開いて、率直に話そうとした姿勢に僕は頼もしさを感じた。また、この姿勢を今後の自分の日常生活の上でも推し進めて行こうと思う。

（九州大学　医　一年　前原寿延）

人の心の美しさを再認識した

この合宿において班の人達と話し合って自分の欠点が指摘されて、それが解ったこと。また、ものを考えるということは一体どういうことか、また発言のしかたなどの勉強になったこと。自分が今まで付きあってきた友だちとはより一層、また、未知の友達に会うことができて親しくなれたことは、ほんとうによかったと思っています。それから、この合宿において一番の収穫であったものは、木下先生のお話から人の心の美しさと人の心のほんとうの在り方を、再認識できたことでした。

（亜細亜大学　商　一年　綿引芳行）

第十班 ―男子学生―

感謝の気持ちで一杯

私はこの合宿に参加してほんとうに良かったと思います。御講義での先生方のほんとうに真心をこめられた御言葉、先生方が人生を一歩一歩歩いてこられ、色々な苦難に遇われ、その中から沁きあがってくるお言葉を聞いている時、私の心はなんだか癒され、清らかに澄みきったようになるのを覚えました。八十歳を越える老齢を押して、私達に天皇陛下の尊さをお話しくださった木下先生の気持に、私はなんとかしてむくいなければならないと思います。岡先生の「言葉」へのきびしい態度は私の今までの話す時の態度を叱られた気持がしました。木内先生の御講義では、日本の偉大さを知り、未来への希望がぱっと開けたように思えましたし、自分に勇気がわきおこりました。先生方に感謝の気持で一杯です。

（福岡教育大学　一年　小林　至）

心の触れ合いはあった！

大学に入学して、国際問題研究会というのにはいって活動していましたが、そのサークルで、友人の言葉が単にイデオロギー的なものしか含まずに、何度心を割って自分の悩みを話そうと試みても通じなかった。それで結局は、人と人の心のかよいあいなど、人間にはないのだろうかと、淋しく感じて心がすさんでいた。こんな心境だったので、この合宿でも結局は人と人の心は通じあえないのかもしれない、と予想して参加した。しかし、この合宿で先生方のご講義での真剣な目や声にぶちあたって、自分の甘い考え方や閉じ込もった気持にはっきりと気がついた。

友人とこの阿蘇の地で話しても、結局は心は離れるから、人と人の心の結びつきはないというような考えがなくなりました。自分の甘えに気がついたのです。淋しい淋しいといって、変な観念で自分の心をまとめてもそれは苦しいばかりで、勉強していても喜びがない。それは間違っている、逆なのだと思うようになった。瞬間瞬間の時というものが大切なのだ。その時々を淋しさを越えて味わうのだ。そう思うと本当に心の触れあいを感じはじめました。

（早稲田大学　教　二年　中　道彦）

目がしらがあつくなった

木下先生の御講話をきき、天皇のお人柄や、また国民のことを天皇がいかに思っていらっしやるか、またお創りになられた和歌などをおききして目がしらがあつくなりました。日

本民族の本心というか、新たに自分の胸に感じるものがわきあがった思いがします。そして日本人である以上、学生運動その他これから眼前に次々に出てくる問題には素直に、また信念を持って立ちむかっていきたいと思います。

（亜細亜大学　法　三年　野地純一）

心底から考えを述べあった

この合宿は、普通の合宿と違っている点がいくつかあった。各班に分かれて、全く知らぬ人と生活を共にし、他人とのふれ合いを特に重視していることだと思う。これは、心底の思いを述べ合う場でもあって、単に自分の意志をどう他人に伝えるかではなく、自分の思いを作り飾らず、ただありのままを述べ合い、他人の考えも最高の注意を払って聞く、そのような場であると思う。これは大変ためになった。今迄は自分の心底の考えを述べた事もなかったように思え、友人に対する不信感が非常に強かった。しかし、ここに来て学び、話をしているうちに、段々と思っていることを素直に言え、また、友人の考えに対しても異論を率直に述べることができるようになった。やはり、大切なのは、思っていることをかくしへだてなく言うことだと思う。たとえ表現能力がなくとも。そうすれば友達も、自分の心の底をくみとってくれるに違いないし、友達の方も心底をぶちまけてくれると思う。それから、私達が忘れていたものを思いださせてくれ、これが日本の精神の真髄であると認識させてくれたものがある。それは、和歌創作、国旗掲揚、慰霊祭である。こういう精神に今後もふれて、また研究していこうと思います。

（鹿児島大学　教　一年　前田芳和）

思いやりをもった注意を

最後の小田村先生の御講義で、その前の全体意見発表の時の二人の人の発言に対し、きびしい指摘をされた。僕は少しこの二人に対し残酷すぎるかもしれないと思いながら聞いていたのであるが、先生は最後にこう言われた。

「ただいま例にあげた御二人に対しては残酷でひどすぎると思われるかもしれない。しかし、今私がここで言わなければ、後で誰もその人達に注意をしてあげる人はないと思う。それでは残念ではないか。人として生まれてきてそういう注意を受けぬまま死んでしまうのは残念じゃないですか。」

こういう思いやりで人の誤りを注意できる人が何人いるだろうか。人が自分と違う考えを持っていると、たいていはその人をうち負かすための議論をしたり、見下すように注意をすることしかできない。心からの思いやりをもった注意。そしてそれを本当にありがたいと思って聞ける気持、これを忘れてはならないと思った。

（東京大学　理Ⅱ　一年　広瀬　豊）

あいまいな生活態度にいきどおりを感じた

私は、この四月からは自分のことと就職のことのみ考えて過してきたようなので、班長として皆さまのお世話ができるかどうか不安でした。そして、班の皆さんのすなおな心にふれた時、もしこの合宿の良さを十分わからぬままに友が去られたならば、それは悲しくまた申し訳ないことだと考え、いままでの自分のあいまいな生活態度にいきどおりを感じざるをえませんでした。そのことが、余り肩をいからせ云いすぎたことにもなったようです。

（長崎大学　経　四年　白石　肇）

心と心の交流ができた

この合宿に初めて参加させていただいたのですが、参加して本当に良かったと思います。なぜなら諸先生、諸先輩方の身にあまる御言葉を拝聴し、およばずながら今後の目標なり自信なりが湧いてきたからです。また同じ目標に向かって進もうとする未知であった友とこの合宿において共に講義を拝聴し、共に討論を交わし、学園で得られるのとはまた違った心と心の交流が出来たからです。学園に帰りましても、この合宿で得られた意義ある御言葉、また内容なりを学友に語り聞かせ、おおいに学園の正常化に努めたいと思います。

（大分大学　経　二年　玉ノ井順次）

学問に対するあまい考えを反省させられた

この合宿に参加して一番強く感じた事は自分の無知、不勉強さを痛感したことです。講義でも班別討論においても分らないことが多かったし、それだけに感動も強くわきおこりませんでした。岡先生のお話の時にそれを特に強く感じた。ある質問者に対し、先生が「本を読めば良い」とおっしゃったのを聞いたとき、自分自身が云われたように感じ、国家の重大な時にあたり、祖国を末永く繁栄させるためには、これからしっかりと勉強しなければならないと思った。この合宿は私にとっては、学問に対する甘い考えを反省させ、勉強する気を起こさせてくれました。これを学問の出発点にしたいと思います。

（亜細亜大学　商　一年　松浦秀昭）

友との心のふれあいを大切にしたい

あれこれと感想を書くつもりでしたが、最後の小田村先生のお話をお聞きして、またもや頭を打たれた気持になりましたので止めにします。ただ合宿中に体験した友との心のかよ

いあい、その実感を大切に持って帰り、今一度自分を見つめてみます。

（皇学館大学　文　二年　田崎正夫）

一時は右翼かと思った

僕がこの合宿に参加したのは、何事にも自分の態度がわからず、人生を主体的に生きるための一つの転機になれば良いと思って参加しました。ところが全体意見発表のとき、参加者のある学生で「帝国憲法復元論」などの意見をのべる人がいましたので、これは右翼の集りなのではないかと一時はびっくりしました。しかし合宿生活を通じて国文研の目的は何も既成全学連に対する行動の仕方等を説くのではなくて、学問ということに対して真剣に取り組む態度を学びあうことにあるんだなということがわかり、参加した意義があると思いました。それに班員の真剣なまた純粋な態度に接して、何か心洗われ非常にうれしく感じました。

（九州大学　医　三年　今泉　勉）

第十一班—男子学生—

天皇についてすっきりした気持になった

開会式の時に「君が代」を歌いましたが、あれ程さわやかな清々しい気持のする斉唱は初めてでしたので、非常にうれしく思いました。

また木下先生のお話を聞いて、涙をこらえるのに勢一杯でした。慰霊祭の時の気持と合わせて、この感動を大切にして心の中であたためたいと思います。先生の御体験に基づいた御話の重みというものを痛感しました。自分は天皇について何年も考え、また陛下のお人柄について何人かの人の話を伺ったり、書物を読んだりしましたが、これ程強烈に自分の心に訴えてくるものはありませんでした。今まで天皇について考えていましたが、心の底にはわだかまりが残っていました。だが先生の御話を伺って、何かすっきりしたような気持です。

（明治大学　工　三年　中村敏幸）

陛下の御人柄に感動を覚えた

この合宿に来て初めの三日間は何かもやもやしたものがありすっきりしなかった。それはこの合宿に対する先入観や偏見などが交錯していたからだと思う。だから先生方の御講義を聞いても、単に言葉の上だけで判断して常に第三者的な立場をとった。感銘を受けても自分自身が責任をもって、自分の立場を述べることに何かしら不安を感じた。感情だけでは駄目だ、自分なりに理論を持たなければならないという気持もあった。

しかし班の人達が信念をもって自らの道をしっかり歩こうとしているのをひしひしと感じ、励まされた。そして昨日、木下先生の御話を伺った時、何度か涙が出そうになりどうしようもなかった。天皇制という言葉を聞くときは何か反発を感ずるが、一個の人間としての天皇の御話を伺ったとき、感動を覚えざるを得なかった。小柳先生が「つえを捨てて自らの足で大地に立て」と云われた御言葉、そしてまごころということを我々に判ってもらおうと力をこめて語られた小田村先生の御言葉が胸に残る。

（九州大学　工　一年　稲永　隆）

日本人の心の根底に流れるものが判った

日本人が日本の国家や民族のことを、このような合宿でしか話し合うことができない事は、実に悲しむべきことだと思う。日本民族の心の根底に流れるもの、西洋人の心には決して存在しないもの、それが何であるかを木下先生の御講義を拝聴し、涙にむせびながら強く強く私の心の中に刻み込まれた思いでした。

班別討論では友の強烈な意見に腹立ちを覚えたこともありました。しかしその意見が、自分の考えよりずっと広い視野の中から出てきたものであることが判った時、「ありがとう」と心からの感謝になりました。古事記のよさを知らされ、和歌を作り、日本文化のすばらしさを今程感じた事はありません。苦しい合宿でしたが、何となく楽しい晴れ晴れした気持です。

（大分大学　経　二年　楷木康文）

祖先の御霊に支えられて生きている

特に強く感ずることは、自分の心が全くすきだらけで一瞬一瞬を大切に全身全霊をかけて生きていく気迫が足りなかったということです。班別討論において友達の云おうとするところを正しく理解することができず、独断に陥り易い自分に気づいた。また慰霊祭において、日本のために尽し、後世に思いを托して亡くなられた多くの人々の御霊に支えられて我々は生きているのだと感ずることができ、勇気が湧いて来ました。

友達との間に気持が通ったときに生じた喜び、先生方の信念にこもった一字一句をおろそかにできない御言葉に接した時の感動と緊張感、自分の愚さを指摘された時のおそろしさ――それらを大切にしてゆかねばならないと思います。今後はすきだらけの自分の心を正していくことを一生の課題としていきたいと思います。

（九州大学　医　三年　前田秀一郎）

気取るのはやめよう

私は話がうまくありませんので、班別討論のとき、話す順番がだんだん近づいてくると、胸がどきどきして、話す時は、自分が何を考えていたのかも忘れてしまいました。本当に多くの人達の中で話すのがいやでたまりませんでした。また和歌の全体批評で、私の和歌がとり上げられ、それが特に皆の笑いをさそいました。いかにも自分が馬鹿にされ、大学生として本当に何も価値がないのではないかとさえ思いました。しかし私はこうも考えました。「自分は本当に何もないじゃないか、気取るのはやめよう。自分の思ったことを素直にすればそれで良いではないか」と。和歌が笑われたことは、私にとっては小さなからを破る一つのきっかけだったかも知れません。和歌の全体批評において、私の心は確かに強く動かされました。

（玉川大学　工　二年　会沢二郎）

さわやかな気持になった

最初のうちは素直にみんなの中にとびこんでいけなかったのですが、諸先生方の御話を伺い、班の人達と話すうちに、自分の心の中でもやもやしているものが取除かれてゆくような爽やかな気持になりました。また心を割って友達と語り合えたことをうれしく思います。それと同時に自分の気持を相手に伝えることのむずかしさを痛感しました。今後はこの合宿で感じた気持を忘れないようにしたいと思います。

（日本大学　法　一年　岸本常男）

学問に対する姿勢を学んだ

私はこの合宿に初めて参加しましたが、学問をする姿勢を少しでもくみとることができたと思います。私の心が既成概念にとらわれていて、なかなか先生方の御講義に素直に感動できませんでしたが、岡先生と小柳先生のお話には心が動かされ、うれしく思いました。人生観・学問そして祖国日本に対する基本的姿勢――特に学問に対しての姿勢――を少しでも学び得たことは、大きな収穫であったと思います。

（西南学院大学　法　一年　宮崎洋一）

陛下のお気持が判った

木下先生は「陛下の我々国民に対する御期待」を述べられた。その中で「教養」「宗教心」について述べられたが、これは全ての講師の先生方がそれぞれ話されたことに通ずると思う。ほとんどの先生方は陛下から御言葉を賜った経験のない方々ばかりであると思います。そしてまた我々に話される

時も、これが陛下のお気持だと云われたことはない。だが陛下が我々を思って下さるお気持は、先生方が我々の求めるべき態度を教えて下さったものと同じであると思いました。

今回は班長であった。第一日、第二日目は、班員全員がまとまっていないようで心配でした。毎晩一時、二時、三時と語り続けた。一日目は三人か四人であった。それが三日目の晩は、ほとんど全員となった。不満はまだあるにしろ、全員がすらすら班員の名を呼びながら話せるようになった。共に学び合う学問の場を作り出すことは、一日目からすると非常な盛り上がりを見せたかと思ったら、もう別れの直前となってしまった。班の全てが、一生懸命にやって下さる人ばかりと信じています。

（鹿児島大学　農　二年　定栄安治）

窮極的には行動である

今の日本の混乱は憂えてもなお余りあるものがあるが、私は民族の正直な心情の吐露である万葉集、古事記、国学、明治維新の志士の和歌等の古典や、天皇の御集をより一層努力して味わっていきたい。それなくして、今行なっている学生運動も本当に魂が入ってこないのではないかと思う。しかし古典を読み、祖先の心情を会得できたとしても、それだけではすまないような気がする。窮極的には自分が直接に体得しなければ本物でないのではなかろうか。本当に祖国を憂えるならば、行動にでなければ、嘘みたいな気がする。行動を起せば、何もしない時より、一層はげしい様々な苦しみ、人間の醜さ、自分のだらしなさに胸をかきむしられる思いがするのではないだろうか。

（長崎大学　経　三年　岸川　守）

合宿内容の単純さにあきれた

自分は、高校時代、ベ平連に興味をもち、大学入学当時はいわゆる三派系に属していた。しかし、内部に入って彼らの理論の根底に一種のセンチメンタリズムが支配しているのを感じ失望した。その時に友達から、やや右がかったこういう団体があるのを紹介され、軽い気持できたわけである。しかし、自分は正直いってこの合宿で感銘をうけたことは、岡先生を除いて何もなかった。「唯物論は間違っている」とか「今の日本はだめだ」とか、理由なき理論ばかりで説得力がなく、それらを何かというと、国民意識とかまごころなどで統一しようとする単純さにはあきれた。

さらに国家について自分は、国家などというものは、ただ動物本来のなわばり意識と環境によって生れたものであり、それに固守するようなものではないと思った。ともすれば戦争の勇士をしのび、国の為に散った人を称える傾向は人間無視もはなはだしい。さらに滑稽なのは天皇の話をきいて心か

ら感銘したなどという事である。天皇とて一人間であり、大昔、騎馬隊の長であったにすぎない。かってに作りあげた天皇をして、二千年続いたその伝統は尊いなどバカげているもはなはだしい。

（京都大学　医　一年　根木　昭）

第十二班—男子学生—

〃一人出家すれば魔宮皆動ず〃

僕が感動したのは慰霊祭です。あの厳粛な儀式に、僕は祖先の人々のいのちにつながって生きることの喜びを感じました。夜久先生の明治天皇の御歌を聞き、小田村先生の祭文を聞いて、涙が流れてくるのを禁じ得なかったのです。このような祭りを通じて、いのちの流れを確かめてゆこうとした日本の国柄の美しさを思わずにはおれませんでしたし、日本人として生れたことのうれしさを思いました。岡先生や木下先生の御話を聞いて、僕は自分が日本人に生れたのは幸福だと思いました。日本人の祖先が大切にしてきたものは、まごころを感じうる心であり、またそれを表わすものとして和歌があったのだと思います。

今日の全体意見発表における浜岸さんの和歌の中で、胸にこみあげてくる喜びの涙が明日よりの力となるであろうという意味のものを歌われ、とても力強いと感じました。このような心を大切にしようとする姿勢の中から、学生は学園の場で、学校の先生方は学校の場で、この心をないがしろにする動きに本当に対抗していけるのではないでしょうか。

僕は班別討論の時、常に自分に問いかけていた言葉があります。それは〃一人出家すれば魔宮皆動ず〃という言葉です。この言葉をかみしめていると、心の中に清らかなものが流れ、又勇気の湧くのを感ずるのです。

（九州大学　医　三年　小柳左門）

合宿の成果を学園の正常化に生かしたい

私は昨年十二月のいわゆる国際反戦デーにおいて、それに対する見解をパンフレットに書き全学友に配布しようとしたところ、反帝学評の三十名のヘルメット部隊にとりかこまれ、めちゃくちゃに暴行を受け、二十頁、二千部を目の前で火をつけられ、燃やされてしまった。全く憤りを感ぜずにはおれない経験をしました。その時に私は断じて彼等の暴力を許すことはできないと思い、学協運動に没頭していった。彼等の暴力、マルクス主義を徹底的に排斥することのみが自分の目的であり、それだけでも命がなくなってもいいというエネルギーを生み出してやってきた。しかし全学連の背景——何故彼等に存在の基盤があるのかを考えてみると、まさに戦後の唯物的見解の充満こそが根本的原因であることを知っ

た。そしてこれまでは単なる秩序の回復を目的としてしか運動をしてこなかったが、つい最近、私は大きな問題、すなわち国家、民族、天皇という問題にぶっつかっていた。その克服の一環としてこの合宿に参加した。これまでは、何故和歌をこんなに重視するのか理解できなかったが、今の自分には和歌こそが日本文化の結晶であり、我々が懸命に受け継がなければならないものであることを確信しつつある。今までアジ演説の時、何も知らないで日本文化を守れと云っていた自分が恥しい。今までは運動、運動で、ともすればおろそかになっていた「生き方」を考えさせられた。この合宿で得た新しい成果をもとにして、より一層学園の正常化や、日本の再建に対し、全生命をかけて頑張っていく決意である。

（長崎大学　経　二年　中村英司）

自分の心を大切にしたい

現在の自分には、今までの生活態度に対し、後悔の念と、表現できない程の憤りを感じます。私は今まで、自分から進んで日本人の心を知ろうとしませんでした。なのに、〝日本人〟に対して何かしら嫌悪感を抱いていたのです。それがどこからくるのか明確には表現できないのですが、自分が日本人、否、人間のみにくい所しか見ることができなかったからかも知れません。自分の心が余りにも素直でなかったに相違ないと思います。

私は自分の心を大切にしようと思います。そして、その心をもっと深くする態度を学びました。多くの人に接する程、自分の心の狭さを感じます。ここで同じ班の人々、大学の友人の心をどれだけ傷つけたか判らない程です。どう云えば良いか判りませんが、お許し下さい。

（鹿児島大学　医　一年　藤田　彰）

自分自身になり切って泣いた

ここで僕は感謝して泣いた。そして人間の心の奥底からこみ上げてくる不思議で神秘的な何かを感じた。

僕は今まで真心を追究してきた。いや自分の生き方と離れて、真心とは何かということを追究してきたと云って良い。併し小柳先生のお話を聞いて「真心という概念はない、真心というのは自分の生き方と離れたものでなく、生き方そのものである」ということが判った。僕はこの合宿で泣いた。自分自身になり切って泣いたのだ。この実感だ。班別討論の時、「真心」を仏教的に説明しようとした。すると班長に「一寸待って下さい。仏教はそう云っているかも知れないが、君自身の考えを云って下さい」と云われハッとした。これだと心の中で思った。実に有難かった。

（法政大学　文　三年　木村高志）

全ては日常生活に現われる

日頃の輪読会や、また大学紛争を解決するための運動を行なう中で、もう一歩積極性が足らないことを痛感した。考えること、話すこと、活動することが観念的になっていて、実社会に矛盾することが出てきても、それをそのまま容認するようになってしまっていた。講師の方々の言動が毅然としておられるのに感動したが、班別討論ではその感動の話し方に無駄が多く冗長であり、まとめられない事を痛感し、結局講師のお話を真に理解していないことが判った。それで、毅然とすることは志を立てることと同じだという感じがし、志を立てるということは日常生活の中に自然と出てくるものと思えた。こう思った時、大学に戻るのがうれしくなった。

（山口大学　農　二年　諫山昂助）

同胞感を強く感じた

確かに今の僕の心の中には、合宿前になかったものがある。適確にそれをどう表現していいか判らないが、最近忘れていた「感ずるという心」のようだ。合宿で出会った人々は、確かに〝同胞〟という感情を強く僕に与えてくれた。先生方、先輩達は、はっきりと僕達は日本人であり、僕達全てを結びつけるものは、日本人の全てに共通な、過去から現在を通した懐しい日本人の努力の〝追憶〟なのだということを示して下さった。

川井先生、木内先生、小田村先生、岡先生等の諸先生方の、御講義をなさった御姿の一つ一つを思い出すと、日本人として強く生き抜く力が沸いてくる。

（一橋大学　商　一年　鈴木茂臣）

何かをやりたい

私はこの合宿に参加できたことを本当にうれしく思います。今まで、自分は全身をかけてやりたいと思う事はなくて残念でしょうがなかったのです。しかし、この合宿で、日がたつにつれ〝飛び出していって何かをやりたい。何でもいい。しかし何かやりたい。そしてやれば何でもできる〟と信じられるようになり、うれしい気持がします。

（玉川大学　文　一年　木村秀雄）

古典・短歌を通して祖先とじかに触れる喜び

この合宿に参加して本当に良かったと思う。初めて出会った人と僅か五日で気持を通じ合えるようになった事もうれしかった。班長さんが真剣に皆んなの中に飛び込んで行こうと

された姿勢に感心した。地味な活動をしている人の事を知り自分を反省することもできた。古典を通して、日本人の心を知るということを、また、和歌を通して、祖先の方々とじかに触れることができるということを知ったことはうれしかった。学校に帰ってから古典の輪読をするという話しが出ている。是非参加したい。　（防衛大学校　二年　小林正男）

素直に聞き・真剣に話した

この合宿の感想文を、力強い言葉、美しい言葉で書こうとすればする程、その感動が失われてしまうような気持です。素直に御講義を聞いたつもりです。真剣に班別討論をやったつもりです。その気持を、今後自分の生活の中に生かそうと心に誓っています。　（熊本大学　工　三年　岡田朋久）

勇気を持ちたい

僕は今非常にうれしい。最後の小田村先生のお話を聞かなかったとしたらただ失望に終っていただろう。最終日の全体意見発表で、小柳先生の〝感ずべきことに感ず〟ということについて語ろうと思っていました。しかし僕は勇気のない心のため、とうとう発表することができませんでした。小柳先生の語られた〝べき〟という言葉――すべき時はやる――を強く心に刻み込んで、この合宿で得たものはこれだと思っていたのが、次の日に実行できなかったことに大きな悲しみを抱いていたのです。小田村先生は〝千万人といえども我ゆかん〟という「勇気」がまごころには大事だといわれました。全体意見発表の時は云えなくて駄目だったけれど、小田村先生のお言葉を心に刻んで、この合宿を終えられることを大変うれしく思っています。

（名古屋工業大学　工　一年　江副正信）

第十三班―男子学生―

陛下の御心にふれて泣いた

班別輪読において幕末の志士の歌に触れ、今迄発見し得なかった新鮮なものをはじめて掴んだような気がした。人と人、人と祖先がそのまごころを通して接し得るということが急速に解りはじめてきた。今迄の私は歴史に接する時、単なる事象を追い、知識だけを積みあげてきたように思う。また木下先生の御講義を聞いて陛下の思いやりのある御心に触れて感激のあまり、何回か泣いてしまった。隣りの人も泣いている。いつしかあの場にいたほとんどの人が泣いていた。これが本当の日本人であり日本の姿なのだ。

（防衛大学校　四年　太田文雄）

陛下と国民は一体であると感じた

学問、思想の基礎となるのはそれに対する態度、自らの生き方であるということを諸先生にお聞きして、もはや迷っているような時ではないと強く感じました。また木下先生のひたむきな御言葉が強く胸に浸み入り、陛下の御考え、御様子を知ることが出来ました。分列式のこと、鹿児島湾上でのことなどは陛下と国民が本当に一体となっているのだと感じさせられ、そのことが直接、胸に迫ってきて、じーんと詰まるような思いをしました。

（東京大学　教養　一年　小田村初男）

古典への接し方がつかめたような気がする

初めて国文研の合宿に参加し、先生方の熱のこもった御講義が聞けたことは私の学生生活の中で非常に有意義なものでした。先生方のお話しになることは常々私の思い悩んでいたことでしたので元気づけられた気がします。それに古典への接し方がなんとかつかめたような気がします。しかし、先人の言葉に触れる時の心の姿勢のきびしさ、学問のきびしさを先生方に指摘され、自分に果して出来るであろうかという不安も残って居ります。岡先生、木内先生の御講義を聞いている時にあまりにも先生のお心の深さ、お気持の豊かさを感じ、ただ自分のいたらなさを痛感するだけでした。

（熊本大学　工　三年　古本　守）

相手の言葉をそのまま受け入れるようにしたい

学生運動ばかりやっていると、どうしても戦術面のみを考え、人と話す場合初めから相手を論破することにやっきとなる。しかし今迄の経験では相手とうちとけ合って満足できることはなかった。常に残念さや憎悪や口惜しさが残った。この合宿でその原因がわかったような気がする。それは私が話をするときの心構えだと思う。すなわち、相手が話しているとき心を無にし、その言葉をそのまま受け入れていなかったのである。

（長崎大学　経　一年　木下文雄）

価値のある目標を立てることが出来そうな気がする

僕は中学卒業後会社に勤めていたので大学生はどんなことを考えているのか知りませんでした。初めに「裸になれ」と云われたことを思いだし、この合宿の終りになって、悲しいことではあったが、自分の知識のなさ、また会社でどのように暮し、考えているかということまで全てを話しました。そ

の結果、班内の人達とも会社内の友人以上に親しくなり本当に良かったと思います。今迄の僕の目標は家を建て並の家庭を持つ事でしたが、それ以上に価値のある目標を立てることが出来そうです。　（工学院大学　工　一年　大沼二郎）

自分をつくることに努めて行きたい

先生方のご講義を聞くにしても、班別討論で自分の意見を述べる時にしても心構えとして、素直な態度が大切だということをつくづくこの合宿で教えられ、また考えさせられました。この五日間、強行スケジュールに追われながらも、その中で得た多くのことを基礎として自分の人間をつくることに努めて行きたいと思います。

（亜細亜大学　経　一年　末廣潤二郎）

目標が鮮明になってきた

国文研の合宿に参加して生きる目標がかなり鮮明になってきました。心の中に何もない化物のような人間になりかけていたようなとき、これから学問をしていく上に何らかの基盤が与えられたように思います。化物のような人間になってはならないのだと強く思いました。

（皇学館大学　文　三年　尾崎俊樹）

自分の気持を曲解されて悲しい

何故（全体意見発表での）僕の意見を「第三者的」と称せられるのか。小田村先生が僕をご批評になったお言葉を聞き、非常に悲しく思った。日本を愛する気持、一日本国民としての自覚、現在の混沌たる社会状勢に真剣に対処しようとする気持、僕の発言の奥底の気持を全く理解して下さらない。僕の立場をお考えにならない。そして、ただ一言「第三者的」という言葉をもって、僕という人間を規定してしまう。僕は悲しい。何のためにはるばる二十四時間東京から暑いなかをやって来たのか。自分が参加することにより、何か自分でつかもうと思った気持が僕にはなかったと思われるのか。合宿で「人の意見を聞く」「その人の立場で」ということを御自分自身おっしゃったではないか。御自分の観念的見方で他人を判断しようとする自己矛盾におちいっている。この先生の御意見には自分の立場を強制する傲慢さを見い出す。最後に僕は自分の自覚をもって「日本」に尽す、これだけは忘れないでいただきたい。

（注、カッコ内の言葉は編集者加筆）

（一橋大学　法　一年　都倉裕二）

深いものがあるように感じた

合宿の開会式で〝日の丸〟を掲げ〝君が代〟を二回にわたって斉唱、こりやたまらん、ひどい所に来たもんだと思いました。皆がいうことも全学連徹底反対、大日本帝国憲法復帰、これでは反動以外の何物でもないと感じた。

しかし、講義を聞いていくうちに皆なが皆な会うと口にする反動的な言葉、その人がどうとらえていっているのかわからないけれども自分としては小柳陽太郎さんその他の講演を聞いても、この会の考え方が生まれてくるところには、深いものがあるんじゃあないのか、と思った。学問する態度のきっかけぐらいはつかめたような気がする。

（九州大学　法　二年　成清一臣）

第十四班―男子学生―

天皇の御心に触れ、生きていると実感した

自分が人間として当然心を動かすべき美しいものに触れたならば、常に自分の心が共鳴するように、いつも自分の心のくもりを取り除いて置くように習練しておかねばならない。これが学問・人生に対処するのに最も大切なことであると思い、班員ともこの一点だけをどうしても話し合いたいと全てをぶっつけました。

自分にとって最も印象深かったのは、木下先生の御講話のいたる所で天皇の御心に触れられた時、最も自分が生きていると実感しました。また慰霊祭の折に「ますらをのかなしき生命つみ重ねつみ重ねまもるやまとしまねを」と詠われた時、本当に祖先の御霊に触れた気がして涙が流れて仕方がありませんでした。

（富山大学　工　四年　浜岸悦生）

心に矢のささる思い

この合宿に参加し自分が如何に無知であるかを本当に感じさせられました。講義を聞いても漠然としかわからず、心の中ではわかっているような気がしても、どうしても言葉として表わすことができないのです。先生方の御言葉の一つ一つに心うたれることばかりで、矢が心につきささる様な思いがしました。

（九州産業大学　芸　一年　松尾昭義）

良い指針を与えられたこの五日間

合宿全日程を通じ、良かったの一言につきます。今迄は思想的に一つの先入観があった事を反省させられました。この五日間の体験は今後の私の人生にとって良い指針となってく

れることでしょう。

諸先生が生きるということについて真剣に考えておられることに触れ、身の切られる思いでした。物事に対するとき真剣であるならば自分の人間性をそのままにぶっつけることが自然に出来る筈だと思います。

（香川大学　農　二年　松井洋一）

横面を張られたような思いだった

数々のお話の中で小柳先生の「謫居童問」の講義の中での御言葉、また小田村先生の「〝まごころ〟というのはスローガンではない」といわれた御言葉には、まるで横面を張られたような思いでした。まごころということを盛んに論じているうちに知らず知らず私はまごころを失いつつあったのだ。ほんとうにおそろしいことだ。教職に一生を捧げようとする私にはまごころとは概念ではなく力に他なりません。自分の生活を反省しながらまごころの問題と取り組んで行きたいと思います。

（玉川大学　文　三年　姫野道夫）

私の方法で学生運動を見て行きたい

私は何も作文できないように思います。もし書けば全部がなくなってしまうような気がするのです。昨年の私は何もわからず、唯むやみに感動しました。でも今年は何かつかめそうな気がするのです。今後私は私の方法で学生運動を見て行きたいと思います。学生生活、学生運動を迷わず送ることの難しさがいやという程感じられていますが、私はやはり、三派の学生を救いたい。民青にひっぱられようとしている学友を救いたいと思います。

（大分大学　経　四年　江畑守勇）

相手の気持を大切にしたい

これまでは大学生活の間は一つの思考法に固まってはいけない、各々の考え方に等距離を置くのだ、また人の話を聞く時も相手の話を客観的に聞かねばと思っていた。そして合宿最初の二、三日は班員の人達の話もそんな態度で聞いていました。しかし四日目になると皆が自分なりに心に感じたことを真剣に話しているのに、自分は感じたことを頭の中で分析して、こんなに感じるのは何故なのか、またそんなことを何故感じられるのだろうと考えていました。岡先生の御講義を聞いて自分は今まで実感を大切にするということをしてこなかったことがわかり、これからはいろいろなことに理屈をつけて見ることを先づやめようと思いました。

（鹿児島大学　法文　二年　西谷敏明）

感激の連続であった

この合宿でつくづく自分が馬鹿だということを知りましたし、感激の連続でありました。やっとこの五日間が終った。辛かった、正直に云うならば、ほっとして居ります。しかし良かった、本当にすばらしい合宿教室の経験をしました。来年こそは人並みに勉強して出直して来る決心です。

（長崎大学　教　一年　草場正次郎）

真の教育に接して楽しかった

今迄の小、中、高校で受けた教育とは異なった、知識だけではない本当の教育というものをこの合宿で学んだと思う。諸先生の感銘深いご講義を聞いて楽しい毎日だった。生れて初めての和歌創作もまた楽しいことだった。この合宿で出来た友人を大切にして、これからも共にいろいろの問題を語って行きたいと思う。（明星大学　理工　二年　坂本貞治）

自分がわからなくなった

この激動する時代で、私はおし流されるような、とても不安な気持でした。自分に自信がもてず、自分の心が信じられなかったのです。自分を何か位置付けたくて自分なりの理論を持っていたつもりでしたが、その理論も崩れてしまって、今は、自分がわからなくなってしまいました。

（九州大学　経　一年　諸富隆文）

自分のからを破ることは恐い

自分は、一歩さがったところから、ニヒルな物の見方をしていました。それは信念でも何でもなく、自己の殻から脱け出ることが恐ろしかったからです。自分の理論構成が、もろくも崩れ、今は何も残っていない気持です。

（防衛大学校　一年　中野哲理）

第十五班—男子学生—

日本を正すには〝宗教〟しかない

この合宿中の諸先生の御講義を拝聴し、また、班友との討論の中で感じたことは、この混濁の世を正し、危機的な状況にある日本を正すには「宗教」しかないのではないかと思う。「宗教」とは祈りだけではなく「人間の生き方」、「人間とは何か」という事を実際に追求するものであり、そうでなければ根本的かつ本質的に世の中を是生することはできないで

あろう。とにかく来て良かったと思う。学園における闘争の中で忘れがちであった、いやむしろ故意に避けていたと言えるかも知れぬ、精神面への働きかけと自己の心の充実化の必要性を痛感させられた。

今となっては本当に腹の底から語らなかった自分が悔やまれてならない。「もっと云いたいことがあったはずだ、なぜはっきりと云わなかったんだ」とせめられる思いがする。

（長崎大学　経　二年　近藤史郎）

精神的な支えが明確になった

合宿の日程を終えて、一番感じ得たことは、今の理論尊重の風潮の中で失なわれている精神的な心の支えが、自分の中に、より生き生きとなってきたことです。この合宿で諸先生方がとくとくと説かれた、人間だれしもが共通に持ち合わせているお互いの心に触れ合うということこそ、人間にとって一番大切なものではないだろうか。何事をも、すぐに理屈によって眺めたり判断したりしようとする態度は本当に改められなければいけない。心の奥底から何のわだかまりもなく、こみあげてくる心を持って、現在騒がれている諸問題に対処していくならば、また、それを根気強く続けるならば、何らかの解決の糸口は見いだせると思う。心の触れ合う事のできない人はおそらくいないだろう。

（九州大学　工　一年　井上敏勝）

学問の姿勢を学んだ

「文字の学者 日用を知らず」という、小柳先生のお話しは、この合宿に持って来た一つの疑問に答えを与えてくれました。学問とは何であろうか？　多くの本を読んだとしても、唯、それだけでは今日の大学紛争に何ら積極的に取り組めないのではないか。自分の考えに則った積極的行動が学問か。人の考えを知ろうともしない者の考えは、はたして正しいものだろうか。常にこのような疑問が湧いていました。熟考を経て積極的行動を起こす勇気こそ学問に違いないと信じます。人生には常に厳しさが必要だと信じます。日常のぼくの生活には如何に厳しさが欠けていることか、また、この合宿で常々忘れている素直な心が甦えりました。そんな自分を発見してはっとして我れ知らず目頭が熱くなるときがありました。この気持を忘れないでいたいと思います。

（神戸大学　法　四年　安藤幹雄）

自分自身を発見したおもい

自分は、今まで、人の道なるものを少しは学んでいるのではないか、人は自己を中心に考えてはならないと少しは解っ

ていたつもりでした。

しかし、班別討論で友に指摘され深く反省をしました。今まで自分の話していたことは、ただ概念論的であり、真の自分は第三者的立場にあったのです。この様な事を反省して諸先生がたのお話をお聴きすると、今までと異なり、なおのこと深く胸を打たれました。

今後は、より一層、これらのことに留意して充実した生活を送って行きたいと思います。

（拓殖大学　商　二年　岡田正栄）

〃心〃の発見

幾人かの先生方のお話を本当にありがたく拝聴しました。今まであまり気がつかなかった〃心〃をかいまみる気がしました。この〃心〃のことに気がついたことが第一の収穫でした。私の住んでいる京都は日本の心のあるところだといわれています。これからは祖先の残した立派な寺院などを見る目も変わることと確信しています。さらに、これを現実生活を送る原動力にしたいと思います。

（京都大学　工　一年　宮脇新太郎）

胸にこみあげるものを感じた

昨年同様非常な感動を覚えました。昨年の合宿において、自分のおろかさや、不勉強であったことをしみじみ感じ、この一年間自分なりに勉強したつもりでした。ところが、やはり、小田村先生の御講義にもありましたように、私の勉強というものは全部ではないにしても、知識や、理論に重きをおいていたように思います。天皇制のことや、皇室の伝統ということは奥田先生から教っていたのですが、その時には感激というものはそれほどなかったように記憶しています。ところが、木下道雄先生の御講話をお聞きして、生々しいお声でお話しをされたそのお言葉にほんとうに、何んとも云えないものが胸にこみ上げてくるのを感じました。

（明星大学　理工　三年　松岡達雄）

学問する喜びを味わい続けたい

事前合宿準備などで、合宿に対する心構えも出来ないまま、気が付くと、もう合宿に入ってしまっていた。それから夢中で四泊五日を過した。しかし、今の自分は学生時代最後の合宿を一生懸命やった事で胸が一杯です。何も惜いは残りません。昨日の小柳先生の御講義をお聞きしていて、この合

宿が最後である事が非常にやりきれない気持になりました。生涯学問をする喜びを味わい続けたいという気持になりました。

（富山大学　工　四年　山田　滋）

古典・短歌を再認識した

初めての合宿教室に参加するに当って不安があった。生まれてこのかた、はっきりとした自分の意見をもったことがないし、物事を深く考えたことのないためである。不安な気持で合宿を過してゆくうちに、始めは解らなかった諸講師の御講義が、少しづつ心に感じられ始めていったように思える。また、古典・短歌というものを再認識したことも事実である。自分自身にとって、まだはっきりとは判らないが本当の学問に触れたような思いである。

（熊本大学　工　一年　荒川　正）

合宿に参加してよかった

中途半端な気持でこの合宿に参加したが本当に良かったと思う。日常生活で、なかなか味わうことのできないことを、味わうことができ、うれしい思いがする。参加を勧めてくださった先生・先輩にあらためて感謝したい。

（鹿児島大学　農　一年　吉井　右）

第十六班―男子学生―

心の触れ合いほど貴重なものはない

班員同志が素直な気持で話し合うことによって得られた心の触れ合いほど、私達の人生にとって貴重なものはないと強く心に感じます。

諸先生の懇切丁寧なお話しや、合宿全体の雰囲気によって、最初押し黙っていた人の顔色がだんだんと明るくなり、最終日の班別討論で、合宿に来てよかったと感想をもらしてくれた時は、本当に嬉しく感じました。

「魂の触れ合い」という実感には、はるかにおよばなかった私達の班の合宿生活ではありましたが、本当に人の心とは量り知れない微妙な動きを持つものだと思いました。新たな気持で一日一日を生きてゆけそうに思います。

（上智大学　法　四年　津下有道）

自分をみつめることができた

昨年はこの合宿に何らの心構えもなく参加した。したがって、表面的で興味本位な発言ばかりしたようだった。しかしその後一年間、長崎大学の信和会の人々と接しているうち

に、合宿に参加した態度がいかにいい加減であったかがわかってきた。だから、今年こそはと思って十分心して参加した。そして次のことがわかった。この合宿は僕等が学内サークルや仲間とやる合宿とは違う厳しさがある。緊張した真剣な姿勢が要求される。本当に自分をみつめることができる。はたして今までの自分でよかったのであろうかということが心にひしひしと迫ってくる。五日間ではあるが本当に自分をみつめて考えることができた。

（長崎大学　教　三年　浜田敏和）

自分自身の問題として考えてゆこう

私はこの合宿に第三者的立場で消極的に参加していたようである。というのは私が所属している学生運動団体の合宿に参加したとき、単にその合宿は同じ思いで悩む者の集りにすぎないと失望し、以後こういう合宿では様々な人と意見交換ができればよいと考えていたからである。

しかし、最後の小田村先生のお話を聞いて自分の考えの誤りに気づいた。この合宿は〝人として如何に生きるか〟を学ぶ場であった。まず己を虚しくして臨むべきであった。この反省を日常の生活の中で常に心に留め、イデオロギーや単なる社会学的な学問を追い求めるのではなく〝人としての生き方〟をさがし求めてゆくつもりである。

（大分大学　経　二年　工藤謙二）

言葉をもっと鍛練して使いたい

講義を聞いて感じたこと。

一、日本文化の伝統に対する考え方、或はその接し方が少し皮相的ではなかったかと思う。日本文化の持つ豊かさが逆に縮んでしまったように感じた。

一、岡潔先生の講義を拝聴して、先生の御言葉がいわば感性的に非常に鍛えられたものであることに驚き、今後、今までいい加減に使い、考えていた感性的な言葉に対し、もっと鍛練して使わねばと思った。

（早稲田大学　商　三年　古賀勝次郎）

考え方もかなり変った

大学に入って五ヶ月になるけれど、僕の今まで接してきた世界とは違うものに接したように思う。つまり、高校までは勉強と遊びに追われ、大学に入ってからは紛争が続き、人間の生き方というものについて積極的に考える姿勢が今までなかったからである。この合宿の御講義を聞いて、全共闘の生き方は確かに正しくないという点は認める。しかし、人間の姿勢だけの問題で現在の状況を解決できるかどうか、納得で

きない。天皇の存在に対する疑問も残る。国旗に礼することもナンセンスに見える。けれども、同じ部屋の先輩たちと話をして僕の考え方もかなり変った。僕の理解が正しいと思っていたことがあやふやであったからかもしれない。

（神戸大学　医　一年　田中賢治）

まごころを生活に具現してゆきたい

考え方を異にした人間同士の心が通じ合えるゆえんはまさにお互いが人間であるからこそである。いわゆる〝まごころ〟だとか〝真我〟とかいうものは言葉で表現すれば四文字もしくは二文字であるがその内容は言葉少なに明解にいえるものではないと思う。この合宿で、心を動かされるお話しを拝聴でき、いいものにふれたとうれしく思います。しかしまだまだ自分は頭だけで考えていると感じます。実際生活でまごころだとか真我を具現してゆかねばならないと思っています。

（慶応義塾大学　法　一年　大西利勝）

日本の伝統的精神をつかみたい

ほっとした。かなり厳しい日程であった。この五日間、外の事には全然注意が向かず自分ながら驚く。

思想を行動に現わさんとするエネルギーは何処より発するのであろうか、合宿の講義を聞いて、その答えとなるものがあったことを喜ぶ。僕が日本人の伝統や歴史を学ぼうとすることは、日本人のもつ心そのものに触れようとするためである。日本人のもつ心そのものに自分の心を合わせようとすることによって、自分の思想を行動に現わさんとするエネルギーを得ることができるのではないかと思う。日本の伝統的精神を掴む努力をするつもりである。そして来年また参加するつもりです。

（法政大学　法　三年　古山俊昭）

友よ君に感謝する

私の班は個性の強い人ばかりといってもいい。その個性が強烈な刺激となって脳髄と胸につきささる。彼らの勉強ぶりは驚くべきものである。いい加減のらくらと暮し、何も解っていない私は度胆を抜かれっぱなしでまったく委縮してしまった。しかし、そこには持前のずぼらさを発揮して言いたいことは言ったつもりです。「言は意をつくさず」とはよく言ったもので勉強不足は表現力の不足を暴露し、ナンセンスな言葉を吐いたことは自分でもなさけない。しかしこの合宿での収穫は新しい友を得たことである。自分の無内容さを知らしめた友よ、私は君に感謝する。この五日間の合宿で君は私に人生の重大な出発点を教えてくれた。

（九州大学　農　二年　武富賢二）

人生と学問姿勢を正してゆきたい

私は合宿に初めて参加しました。先生方のご講義を聞き大変有意義だったと思います。また班別討論では友と語らい、色々なことを学びました。自分が全くの無知であったという事実を教えてくれたのも実にこの合宿に参加したお蔭だと思います。

私自身、一番心に残るのは人生と学問に対する姿勢を考えてゆかねばならないということです。その他、様々な問題を一つ一つ克服してゆかねばならないという決意をしています。やがてはそれが私自身の人生を充実させるのだと思います。小田村先生のおっしゃる、人生を懸命に生きようとする〝真心〟は日本人の一人として絶対忘れるべきではないと思います。

（佐賀大学　理工　一年　松田敏男）

岡先生のいう「真我」がよく解らない

〝絶対孤独の自我〟ということが仏典にみえるけれど、それと小林秀雄の「無私」または岡潔の「真我（第二の心）」が僕にはどうしても対立概念に思えてならない。もう何年もこの問題を考えているのだけれどもまだ解決がつかない。

（長崎大学　経　三年　根岸雄幸）

第十七班―男子学生―

たった一人ででも守ってゆこう

合宿参加の動機は率直にいって興味本位だったのです。最初の班別自己紹介の時から少し不安でした。というのは何か右翼的な方向へ自分の考え方がかわってしまうように感じたからです。しかし、実際に四日間の合宿を終えて非常に感激しました。

各先生とも情熱をもって、力をこめて話をされました。その情熱はひしひしと伝わってきます。時には胸をキューとしめつけられて涙が出てきた時もありました。大学とも高校とも違う、真の学問に一歩でも近づいたような気がしました。日本の美しい自然と伝統と人々を我々は絶対に守ってゆかねばならない。今まさに七〇年安保を前に、すべてが破壊されようとしている時に、たった一人でも良いから何かやらねばならないと思いました。

（長崎大学　医　一年　宇都宮俊徳）

この厳しさこそ本物だ

私は班長という大任を与えられたわけですが、果して九人

もの学友と、ともに真に心から語り合い、班員の心を一つにまとめてゆくことができるのだろうかという不安がありました。とにかく、ありのままの私をそのまま班員にぶっけてゆき、私の思いというものを素直に語る以外にないと思いました。そして次第に班員が自分の体験にもとづいた素直な思いを語ってくれるようになった時は、心が通いあっていくという実感がして嬉しかった。

諸先生の御講義はそれぞれに、痛烈な響きをもって私の心につきささりました。本当に厳しいと思いました。しかし、その余りに厳しい先生方に、非常な人間的魅力を感じます。ひかれます。これこそが、本物だという感じがひしひしと迫ってくるようです。この合宿の厳しさとおおらかな精神を忘れず、今後、大学生活の中で地道に活動を続けたい。

（東京大学　理Ⅰ　一年　青山直幸）

この感激を皆に伝えたい

班別討論にて色々の人の話しを聞いておりますと本当に自分の考え方の参考になりました。人の言いたい気持を汲みとることは非常に難しいと思います。それがわずかながらも真剣に取り組むことによってできるようになったと思います。

木下先生の宮中にての御体験のお話しは非常に感激致しました。日頃他の人から聞いても何とも思わなかったことでしたが、何かしら目頭が熱くなってきました。この感激を、また数々の御講義を、東京に帰り、家族や友達に知らせたい気持でいっぱいです。

（明星大学　工　三年　鹿島正二）

この感激を文章で書けない

この様な真の学問を追求する合宿に参加できた事は実によろこびに堪えない。

だいたいにおいて同じような考え方の人々が集まる合宿は馴れ合い的なものになりがちである。しかしこの合宿は安易な馴れ合いが無いことが真剣さを作り出している。それがこの合宿の命であると思う。私は自分のこの感激の気持を文章で表わすことがうまく出来なくて残念です。最後に和歌を習ったことが実に大切なことであったと思う。

（北九州大学　外　二年　阿比留一馬）

物事に対し考えが足りなかった

何の心の準備も無いままに合宿に飛び込んだ自分が悔やまれて仕方が無い。五日間に亘る合宿を終えんとしている今、自分が今だかつて経験した事の無い異様な気持になっている。それはあたかもいきなり足元をすくわれ、もんどりうっ

て横転してしまったような感じである。今まで物と物、現象と現象とのみをとらえて判断をし、それをあたかも己の知識として後生大事に頭の中にしまっていた自分の物事に対する態度の浅はかさにただひたすら……（時間が足りません残念です）

（明治大学　経営　三年　広下博仁）

案ずるより先ずやってみることだ

実際に経験するということの大切なことをつくづく思った。というのは以前ある人からこの合宿に参加を勧められた時、私はすべてのわずらわしさから遠ざかっていたいという気持があって参加を拒否したことがあった。だが今私は合宿で得た新しい友との別離を惜しむ気持で一杯だ。また、この合宿で言葉によって自分の考えを伝えることの難しさを、また案ずるより先ずやってみるということの貴重さを知った。それだけに、自分の言葉が極めて少なく、果してあのとき友は解ってくれたのかと悔恨が今胸をかすめる。

（九州大学　医　一年　安藤文英）

自分の生き方に根ざした学問を

日ごろのんびりと暮していたせいか、先生方の真剣な講義を聞いて、整理がなかなか出来ない。まず、初めにびっくりしたことは小田村先生の〝この合宿を教育の場たらしめよ、教育の場とは一体どんなものか百分の一でもいいからこの合宿で実現できるよう、努力しようではありませんか〟とおしやった言葉が頭の中に響いて来た。昨年の合宿に参加して以来、松陰先生や内村鑑三先生の本を少しづつ読んでいるが、さらに自分の生き方に根ざした学問を少しづつ考えて行こうと思う。祖国の危機について少しも感じていなかった自分をものすごくあわれに思う。もっと真剣に勉強したい。

（東海大学　経　二年　松本洋治）

生を考える手助になった

私は合宿全体に対しては何の感想もありません。唯、岡潔、木内信胤、木下道雄の各先生方の講義は自分の心にあった死に対する生という問題を考える上で手助けになりました。

（日本大学　法　一年　岡野滋樹）

困難から逃げてはならぬ

人間とは常に自己をいましめておかねばともすると怠惰に流れるものであることをはっきりと知った。困難が我々を襲う時、我々は決して逃げの姿勢をとってはならない。背を向けたが最後、我々は敗走の一途を辿る。

この合宿で、私は困難に対して絶対に逃げてはならぬ、そうした態度をもたねばならぬと意を強くした。目前の危機に自らの身を投じ、自らの両眼でしっかりと見すえ、自分の頭で考え本来的な人間の大道を歩まねばならぬ。

（神戸大学　法　四年　足立哲朗）

第十八班―男子学生―

友がうなづき微笑んでくれた

この合宿で私は心を開く努力をしょうと心掛けて来ました。そして、先生方や先輩方のお話を伺ううちに次第に心が素直になってゆくのを感じ、友との話しのうちに自分の心をこだわりなく云い放つことができたという実感を持ち得ました。その時は自分の心の殻と友の心の垣根が一度に取り払われた気がしました。友がうなづき微笑んでくれたことがとても大きな喜びでした。

私は今まで国というものを単に〝国家観〟といった見方でしかとらえようとしていなかった間違いに気がつきました。師や友との心のつながり、その喜びを広げ伝えたいという気持、それが国というものと自然に結びつくような気がします。

人との心の触れ合いを大切にし、もしかりに、この美しい心の交流を妨げるものに対しては敏感に反発する。このような心を持った人々のつながりが日本だと思いました。

（早稲田大学　政経　二年　山口秀範）

学園の暴力に無感覚になるな

客観的にしかものをみない、とりわけ対人間に対して客観的にしかみることができないのはなぜであろうか。これが合宿生活における私の考える所でした。

小田村先生が「自分のからを作り、その中にとじこもり、他人は他人、自分は自分という人間が一番つまらない」と云われた時、私は自分の学園における体験を想起しました。全学連の学生に対して私達学生は、同じ学生という立場から客観的な態度をとりえない。つまり、封鎖やストライキに対して無感覚でいられるとしたら、そのような学生は学生として守るべきものが何もない人だ。そのような人は結局、他人の言動で動かされ、利用される人間になるであろう。

（長崎大学　教　四年　椛島有三）

人の話を素直に聞く態度をとり戻したい

五日間の合宿を終えようとする今、私の心に重く暗くおおいかぶさることが、一つあります。それは私が、人の話など

を聞く場合、その人の話しを理知的、分析的に解明し、体系づけようとするあまり、心で聞くといいますか、その人の話しの中に溶け入って聞こうとする態度に著しく欠けていたように思われることです。むろん小田村先生や木下先生の御講義には胸にこみあげてくるものを感じることが多々ありました。しかし、それが本当のものであるならばお話しの内容なりが今も鮮明に心に焼きついてよい筈なのですが、今ふりかえってみると生々しい実感といったものがないのです。これは私が二十年間、物質的にめぐまれて育ったことと無縁ではないでしょう。できるならそういう心をとり戻したい。しかし難しいでしょう。実に暗い気持です。

（一橋大学　商　一年　相馬教道）

昨日までの自分と違う人間になりたい

合宿の講義内容は難しく解りにくいこともありました。友と語る喜びや、もどかしさもありました。しかし、本当にこのような経験は自分にとって貴重なものとなるでしょう。人と融和し心で感じる、このことは特に深く心にしみました。私の心の中に貴重な体験を与えるきっかけを作ってくれたこの良縁を生かし昨日までの自分と違う人間になりたい。これが今の私の願いです。

（花園大学　社会福祉　一年　山口順生）

班別討論は真剣勝負の場であった

班別討論では参加者全員が熱心に自己のありのままを出して討論した。私は当初、班別討論では今まで学んできた思想、理論体系にそって話せばよいと思っていた。ところがこのような本当の意味での討論の場に出てみると今まで自分の学んだもの（思想、理論）が全くと云ってよいほど役に立たなかった。一体本当の学問とは何であろうか。今一度自分自身に問いかけています。

それから木下先生の今上天皇のお話しをお聞きしているうちに何度も熱いものがこみあげ、涙さえ流していたのは一体何故なのでしょうか。私はこのことを良く考えてみたいと思います。

（法政大学　法　三年　岩田博行）

有意義な人生を送れそうだ

むずかしい言葉や意味深い講義がありました。でも何か心に感じるものがあったように思います。これからは一層勉強して、気持よい有意義な人生を送れるように努めます。短かく長かった合宿ではありましたがとても有意義でした。

（玉川大学　工　二年　池上秀男）

岡潔先生のご著作を全部読みたい

岡潔先生のお話しは、むずかしいでしたが、先生の言われようとする事を是非理解したいと思います。日本人としての生きる道というものをおっしやられていると思います。ご著作なども全部読んでみたい、繰返しわかるまで読んでみたいと思います。来年も是非参加したい。

（福岡大学　経　一年　石田憲作）

心の対話ができた

この合宿に参加するまでは、人と動物の違いは理知のあるなしで単純に区別してきました。そのために三派や民青の人々からさえも「お前は観念的すぎる」と批判された事があります。今考えてみますと人間の「心」をもっと深く考えていなかったと思います。この合宿に参加し、もう終りに近づきましたが「心の対話」ということを体験し、それを大切にしてゆきたいと思います。（大分大学　経　一年　池松真善）

今上天皇に人間的魅力を感じた

私は人間の心の働きというものを不可思議に感じた。この合宿に参加する際、実は一日も早く帰省したく、心は千々に乱れていたが、いざ参加してみると急にやる気が起り真剣に聞きました。木下先生の御講義を聞き、時折、胸がつまるのを感じました。実に今上天皇の人間像を見事に描写されていると思いました。こういう人間的に実に魅力ある天皇を象徴として感じることができるのは我々の喜びとしなければならない。しかし現代では天皇の魅力を肌で感じることができないのは残念に思います。

（鹿児島大学　工　二年　中西達夫）

まごころは感得すべきもの

〝まごころ〟というものがよく解らない。多分、それは理論的、概念的にとらえるものではなく、感情、情緒によって感得せられるものでしょう。だから、簡単に〝まごころ〟という言葉を発するのは少々軽率な感じがしました。

（九州大学　法　二年　小松礼三）

第十九班—男子学生—

志を行動に表す勇気を奮い起したい

私は先ずこの合宿に参加するよう誘って下さった先輩方に

有難うと云いたい。とにかく、今迄私にとって精神的な何かが欠けていた。その欠けていたものとは真心ではなかったかと思う。小田村先生は真心は大勇を発するもとだとおっしゃった。今からはこのことに心をとめて活動出来ると思う。

私は木下先生のお話をお聞きして涙があふれでてとどまる事を知らなかった。天皇の御心を知らない人は天皇制を廃止せよとか、大東亜戦争の全責任は天皇にあるとか云うのだろう。日本の国体は世界に唯一無二のものである。昔から天皇は国民を想い、国民は天皇をお慕い申し上げる。この心のつながりが日本の伝統であったとしみじみ考えさせられました。

（長崎大学　教　一年　岩永道雄）

教育の改革は内面的な改革が必要

将来、教職につこうとする僕は「この合宿を教育の場にしたい」という小田村先生の御言葉からいろいろな事を考えました。人々は現在の大学紛争の原因を教育制度の欠陥に求めます。成程、制度の検討は必要だし、やらねばならない。しかし制度の改革だけでは問題は解決しない。学ぶ人、教へる人の心、態度が問題なのだ。人生を正しく人間らしく生きるにはどういう風に生きればよいのかということを、教へる者も学ぶ者も真剣に心を傾けて話し合い、共に一生懸命であるという態度が必要なのだ。教師を志望する者として教師になる事は大変な事だと思った。

（早稲田大学　文　四年　広瀬清治）

天皇のお人柄にうたれた

この短かかった五日の合宿で特に感銘を受けたのは木下道雄先生の宮中見聞談であります。私も一度、ある先生から終戦後天皇がマッカーサー司令官に会いに行かれ、戦争の責任は全て自分にあると仰せられた事を聞いた事がありました。しかし、その時は聞き流し程度にしか聞きませんでした。ところが、この合宿で木下先生の実感のこもったお話を聞き、胸のつまる思いがしました。欧米の〝ゴッド〟とは異なりますが、やはり天皇は一種の「神」に似た存在だと思いました。

（拓殖大学　政経　一年　中山　正）

日本人である事を自覚した

無理矢理参加させられた合宿でしたが、三日目の和歌の講義の中で和歌の朗詠をした時、自分もやはり正真正銘の日本人だという事を理屈ぬきに素直に感じることができました。今迄は表面的な現象に振り回わされて、つい皮相的な物の見方しかしていない事に気付きました。今はなんとなく、日本人の物の考え方、感じ方のバック・ボーンが自分にもぼんや

りわかってきたようです。

これ迄どうも日本文学、そのうちでも明治以来の小説については素直に感動を覚えることができませんでしたが、和歌という二六〇〇年余の伝統ある、日本人の真髄を捉えた純日本文学の存在に今初めて気がついたようです。

（九州大学　医　二年　中山眞一）

忘れたくない「日本人の心」

まず私がこの合宿で感じた事は参加者ひとりひとりが本当に明るいあすの日本がどうあるべきかという問題に真剣に考えているということです。

この合宿ではあまり政治活動的な意見は話し合わなかったけれど、日常生活、或いは政治活動を行なっている時においてとかく忘れがちな「日本人の心」というものを心にしみる迄話し合う事が出来た。我々は何をやるにも常にこの「日本人の心」を忘れてはならないと思う。

（大分大学　経　一年　野田清文）

理論よりも情緒が大切だと感じた

この五日間を顧みて講義の内容に、また先生方の御人格にことごとく感激する事が出来、本当に満足でした。平素から尊敬していた岡潔先生に真近に接することが出来た事はまた特別な感激でした。しかし班別討論においては自分も含めて皆が自分の殻から抜け出す事が出来ず、討論の内容が散発的に終った事が一寸心残りです。

自分はかねてから大学紛争の渦中にあって、理論性の乏しさに劣等感をいだいていた反面、自分には情的要素があるからと自己満足もしておりました。しかし今理論よりも、自分の情というものをもっと大事にして行動しなければならないと感じました。

（神戸大学　農　三年　渡辺郁夫）

日本人として恥じない一生を送る

木下先生の御講話を聞きながら目頭が熱くなり、涙があふれるのをどうしようもできませんでした。「私は日本人です。日本の国のことを本当に、真剣に考えていかねばならない。」この思いが私の身体中をかけめぐっている現在です。

学問と人生に対する姿勢を正されました。真剣に毎日毎日を生きていかねばならないと思っております。そして日本人として恥じない一生を送ろうと心にちかいました。

（熊本大学　教　四年　永井幸男）

情緒では政治を支配する事は出来ない

七〇年安保の激動期を迎え、政治運動に携る私にとって、国文研の合宿も私の政治意識の範囲内においてのみ位置づけられ、私の感想もそこから生れる。

情緒、感性は政治に支配されることはあっても、政治を支配する事はない。政治は意志であり、力である。意志に挫け、力に屈服する屈辱に我等の前途をさらすことはできない。七〇年安保を切り開く力は若い世代層に意志と力の結晶をうえつけることである。国文研の研修がこうした我等の要請にいかに答えたかは疑問である。

（早稲田大学　政経　四年　山本之聞）

観念でものを考えるな

私は高校時代は柔道をやり、現在は空手部に入っています。そのため、いわゆる学生運動に関与する機会がありません。だから皆が切実に大学問題と取り組んでおられるのを見ると、自分としては別の世界でこれを傍観しているような感じがします。

しかし、小柳先生の山鹿素行の書物に関する講義を聞いて、今後どう考え、行動したらよいのかわかったような気がします。武士道に対する自分の心構えも備ったような気がします。更に観念でものごとを考えずに自分で良く見きわめようという意欲がわいてきた気もします。

（山口大学　農　二年　山根博文）

強い信念がもてた

防大の教育、そのまわりの環境は素晴しいものでした。しかし、そこには何かが欠けている。少なくとも信念が自分には欠けていることに気づいたのは四年になった時で、これではいかんと自分なりに考え、悩み、本も読みました。岡先生の思想にもその著書で触れました。諸先生方の御講義は私にとりましては画期的なものでした。人々の魂に触れた思いがします。「天皇について」「私の死生観」など、私が今まで抱いていた疑問が徐々に晴れてゆくのを今感じます。そして自分は今、合宿に来てよかったと痛切に感じます。

（防衛大学校　四年　徳田佳雄）

第二十班—男子学生—

人との間に心の壁を作るな

先輩から「君の話しには君の心が入っていない。君が他の

人に話す態度には、人を一段高いところから見て教えてやろうとするような点が感じられる」と忠告を受けたとき、私は、はっとしました。私には人を自分の外部においてみる姿勢が出てしまっていました。ですから私が御講義等で感激した種々の印象を班の中で話しても素直な言葉として出ていたものではなかったのです。私には前からこのように人との間に壁を作ってしまうようなところがありました。自分の考え思うことは人とは違っている。人が感激するのをみてもその人の方が違っているなどと自分に対するうぬぼれがあったのです。しかし、私は今度の合宿で人と心を通じ合わせるにはどうしたらよいかはっきりわかりました。自分が思うこと、感ずることは人には理解できぬなどという意識は捨てそのままぶっけてみることこそ大事なのだ。

（玉川大学　文　二年　森山　新）

喜びと悲しみの連続であった

合宿が一日一日過ぎ去ってゆくのがとても惜しかった。今迄、大合宿、小合宿を何度も経験しているが、悉く「早く合宿が終ってくれたらなあ」という気持を抱いていた。しかし、今夏の大合宿はそうではなかった。喜びと悲しみの絶えざる連続であった。班の人と心から語り合えた時ほどうれしいと思ったことはなかった。逆に班の人が合宿に入りこもうとしていないその姿を見ると、とても苦しかった。心をかよわすということはとても難しいことだと思った。それだけに、一日一日を真剣に生き抜こうとすることは難しい。強い生命力と強い精神を持った人間になりたいと思う。

（鹿児島大学　法文　三年　東中野　修）

なぜか理由もなく涙が出てくる

最も感銘したのは木下道雄先生の御体験にもとずいて話された陛下のお話しであった。現憲法の『日本国の象徴』という表現でない、人間としての陛下をみせられたようだ。先生が涙をこらえながらお話されるのを聞き、僕もなぜか理由もなく涙が出てきた。僕としてはどうしてそうした気持になるのか理由をつけようとは思わない。この何ともたとえようのないこの感情をこれからもずっと大事にしていきたい。

（北九州大学　商　一年　前田孝和）

スッキリした気持で合宿を終えた

自分は国文研という団体がどういう目的を持って活動しているのかも知らずにやって来たのだが、最後になって理事長の小田村先生の御話を拝聴して始めてその意図するところがわかった。自分としては何か、国文研が真心ということをス

ローガン的にとりあげているという様に感じられたのだが、その誤解もとけて非常に気持がさっぱりした。合宿に来る前にある問題を意識して来たのだがそれも元侍従次長の木下氏の御体験を拝聴することにより解決することができた。

（大分大学　経　一年　田中　知）

言葉では表わせない何かをみた

神を論じた文をあちらこちらから引っぱり出して「よしこの神が自分には一番良いようだ」といっているような人は本当に神と触れたといえるでしょうか。だがそういう自分もこれと似たようなことをやっていた。色々な思想に対してどうしても知的にしか接することができなかった。そこには真に自分の心の奥底から沸き出てくる物が不在だったのです。どの思想が良くって、どの思想が悪いかを結論づけるのは少々待たねばなりません。岡潔先生という一人の人間の中に私は言葉では表わせない何かを感じ、木下先生の御話しに涙を流した。

（法政大学　法　一年　石橋竹敏）

知識より心を

自分にはあまり知識がない。しかし、知識よりも人間の根本である心、これを掴めたように思います。この思いを大事にしたい。

私は日本人である。私には父母がいる。祖父母もいる。こうしたつながりの中に日本文化が受継がれてきた。この文化を我々は子孫に伝える役目がある。私は日本人の心を継いでりっぱに生きたい。（亜細亜大学　経　二年　木村文夫）

感動を素直に話せて嬉しかった

木下道雄先生の天皇についてのお話しがひしひしと胸に迫まり、目がしらが熱くなりました。この感動は目を閉じると今でもありありと蘇ってきます。言葉であらわすことのできないものです。

一方、この合宿であまり話しがはずみませんでした。それは自分のからに閉じこもり、自分を外に出すことをしなかったからだと思います。表現しようとしても、もどかしく、すらりと物を言えなかった。しかし、最後の夜、木下先生の話を聞いた時の感動を友に寝ころんでボソボソと伝え、わかってもらえた時は嬉しかった。（山口大学　工　二年　中島敏昭）

合宿で得た感動を大事にしていきたい

私は国文研に対して警戒心を持っていました。しかし、今ではその疑いが拭い去られて行くのを感じます。木下先生の

御話、小田村先生の御講義にはしやくに障るほどの感動を覚えました。こういう言い方しかできぬ自分の心、素直になれぬ自分の心が残念でなりません。まだ納得できぬところもありますが、とにかくここで得た感動を大事にしていきたいと思います。

（早稲田大学　文　一年　土田健次郎）

卒直になれなかったがしかし……

班別討論において感動のみを強いられ、ただ不快の念が強まる一方で何一つ率直に取組むことが出来なかった。しかし小田村先生の「合宿四日間を顧みて」というお話しを拝聴して始めて何か真実というもの「これが真なんだ」と確信できたように感じた。

（防衛大学校　一年　加賀爪俊秀）

第二十一班―男子学生―

合宿の友を思い出して頑張っていきたい

この合宿で、まだ自分は感泣する事が出来る、物事を率直に感じる力が残っていたことに気付いた。いや率直に感じさせぬようにしていた何かが消え失せたという感じがする。いま自分の左右には心が通じ合える友達がいる。大学生活一年半に得た友人よりもはるかに多くの友人を得ることができた。彼等は泣く事が出来、光り輝く目をもって自分に話しかけてくれた。

これから故郷に帰ってしまうと、ここで会った友達とは二度と会う機会はないであろう。自分一人で進まねばならぬが、合宿の友を思い出して頑張って行きたい。

（岡山大学　医　二年　納所　実）

共に感ずるうれしさ

この合宿で、何という深い感激を覚えたことであろうか。感激は、いま僕の胸の中で脈打っている。

和歌に表現されている思いをほんとうに感じることができ、涙が自分の目から自然にあふれ出た。師や友と一緒に何かを同じように感じていることのうれしさなどが、余韻を残している。素直にものを感ずるということは、なんとすばらしいことか、なんと人間らしい生き方の源泉になっていることか。それを思うと、自分は素直な心を持たねばならぬと思う。

（鹿児島大学　教　三年　福沢　一）

思いのままに語れる人になりたい

学問するということが、自分に対して厳しい姿勢を要求するということを、合宿の最後になってようやくわかりまし

た。自分は一つ一つの言葉をなんと安易に聞いていたことか。先生のいわれるお言葉の底の御覚悟を感じることが、説明をお聞きするまでわからなかった。自分の言葉に対する感覚をもっと鋭く鍛えたい。素直にものを感じ、聞き、そして語れるように努めて行きたいと思う。友に対して、素直に感じたことをそのままに語れる自分になりたい。

（中央大学　理工　二年　田所　健）

自分の甘さを痛感した

初めてこの合宿に参加して大変充実した生活であった。そして友達の大学生としての心構えには、大変考えさせられ自分の甘さを痛感した。また班別討論において、自分の頭に浮んでいることを率直に「言葉」に出して皆に言えないことは実に悲しいものだと感じました。他人を批判する前に、己を顧りみ自分の甘さを克服して、明日からの自分の生活を堂々と生きて行きたい。（熊本商科大学　商　三年　松永裕彦）

人々との暖かいつながりを感じた

自分たちが休んでいた時、眠っていた時にも、先生方は講義のための原稿を書かれていたという話を聞きました。そして力強い御講義をお聞きしていて、自分も先生に本当にお世話になっているのだ、自分たちのために先生方は生きていて下さるのだと思えて、何ともいえないうれしい気持がしました。自分が求めてきた「生きている自分」を人々との暖かいつながりによってよびおこされてきたような気がします。

最後の班別討論では、みんな泣いた。お年をめされた班付の長内先生も男泣きに泣かれました。

（玉川大学　農　一年　川尻博宣）

日本人として情念の叫びを感じた

今まで空虚なる理論・行動に走っていた事が恥かしい。実生活に足のついた本当の日本人としてのやむにやまれぬ情念の叫びが、今までの私にはなかった。本当に情念が生まれる時、私はその時こそ真の尊王攘夷者（攘夷とは精神面においてのみ）になれると思う。

（早稲田大学　政経　一年　牛嶋徳太朗）

〃自分の言葉〃で話したい

合宿中、痛切に感じたのは〃自分の言葉で話せない〃ということであった。理論的な言葉より、自分の心から発する言葉のほうが、相手にわかってもらえるということもわかった。〃自分の言葉〃の話せる人間になりたいと思うし〃自分

の言葉〃を大切にしていきたいと思う。

（明治大学　政経　一年　舛田治世）

「美しい死に方」を求めていきたい

とにかく阿蘇にきてうれしかった。一学生が小田村先生や小柳先生の御講義をつまらないように云ったとき非常に残念だった。

岡先生の「人間の美しい死に方をさがしなさい」という言葉が強く心に残りました。そして「美しい死に方」をさがしつづけて行きたいと思います。

（長崎大学　工　一年　松村　隆）

参加してよかった

四泊五日が、あっという間に過ぎ去ったように感じる。今思い浮ぶ事は、ほんとうに参加してよかったなあ、という感じです。そして諸先生方へ感謝の念でいっぱいです。一生懸命生きようと思う。

（長崎大学　経　三年　北村正則）

友の心のすなおさに頭が下った

最終日の全体意見発表、その後の班別討論を聞いて、全く自分が恥ずかしくなった。かたくなに自分のからにこもり、素直に自分の感動を発表できなかったのです。それにひきかえ、私の班の人達の心のすなおさには全く頭が下がる思いがした。

静かに考えてみるとき、やはり一番印象にのこったのは、木下道雄先生の宮中見聞談でした。それと班員の中に、本当に心をこめて話している友がいたことです。とにかくきてよかったと思います。

（九州大学　教　二年　久々宮　章）

第二十二班―男子学生―

人生に光明を見い出した

自分が何故に生れ何の為に生きているのかということを考えていた時「そのようなことを考えてみても決して結論は得られぬ」と、他人から言われ、自分もそのようにも思ったが、そのことを捨てきれなかった。そしてこの合宿に参加して――言葉にすると正確には表わせないが――何か光明を見出したという気がします。嘆きとか矛盾とか苦しいことばかりの人生を、何故人が生きているのかわかりかけました。今後は、なお一層自己を厳しく問いつめて生きていきたいと心に誓いました。

（京都大学　農　四年　小山淳郎）

素直に生きていく何かがあった

この合宿には人間が素直に生きていく何かがあった。感情にまかせた激しいやりとりでも、お互に相手の心の中に何かを探している。自分もいつしか引込まれて話していた。自分は常に、物事に対して真剣に取組む姿勢こそ大切ではないかと言い続けてきた。今の学園紛争でもそうだ。もっと皆が自分の問題として考えるならばこんなにはならなかっただろう。

小田村先生のお言葉のように、物事に何の反応もしなくなった無痛感こそ現在の根本的な問題のような気がする。

（日本大学　法　四年　松下　昭）

心の通う士俵を知った

この合宿に参加して、今まで自分が持ち合わせていなかったものを見い出した様な気がする。つまり今まで自分は理論的思考をすることしか考えていなかったが、ここにきて初めて心の通う士俵の様なものがあることを知った。

まごころとか真我とか云うものは、結局は実生活で表わすことより他にないと思った。祖国の為に自ら散っていった特攻隊員達は、果してまごころを論ずることをしていただろうか。彼らは天皇の為、国の為に進んで死んでいったということによって、まごころを体現したのではないだろうか。まごころを論ずることより行動に表わすことこそ大切であると思う。

（西南学院大学　経　四年　青木　徹）

もっともっと話したかった

班別討論で、僕は出来る限り友の言葉に耳を傾けるようにつとめ、また自分で感じ、思っていたことを率直に語りました。ややもすれば、一人性急に自分の思いを述べすぎたかもしれないがその思いを友へ伝える力のないということを痛切に感じました。もっともっと話し会わずには、別れたくないと思いました。

（早稲田大学　法　四年　斉藤　実）

自分のあさはかさに気づいた

現状の諸問題にいかに対処していくかを討議したいというそれだけの理由で参加したので、最初の二日間は少しとまどいました。しかし岡先生のご講義をお聞きして、自分ははたして日本人なのかと思った。日本の歴史、古人の文章を学んで自分のあさはかさに気づいた。まだ気持の整理が出来ていないが、何かをさとったようだ。心に感じたことをそのまま表現出来るようになりたい。

（亜細亜大学　経　四年　加藤伸吾）

日本文化への認識を新たにした

この合宿には、初めての参加だったので、どのような気持ちでとけこんでいってよいかわからず、体験だけして帰えろうなどと思っていましたが、合宿が進むにつれて討論参加への態度や、自分の考えている問題に取組む姿勢をつかんだような気がします。そして一番強く心に残ったことは、日本の文化について認識を新たにしたことです。日本の文化を勉強する意欲が湧いてきました。

（山口大学　教　四年　木原哲典）

日本の本質をまごころをもって探究する合宿

国を思う気持で生きて行こうと心にきめている自分は、この合宿に来て多くの友を得ることが出来て感激して居ります。

また本質論と時務論の対立が、見られましたが、今の日本には時務論を戦わす場は有っても、日本の本質をまごころをもって探求する場は少ないと思いますので、今後もこの合宿の伝統を守っていって下さい。

（皇学館大学　文　四年　吉田真一）

素直に天皇陛下を崇敬できる

日本には天皇がいらしやるからこそ日本として存続しているのだと、講義を聞いていて思った。素直な気持で天皇陛下を崇敬する気持が生れた。これからも、日本の古典を読み、自分の中にひそむ大和ごころをひきだだしていきたい。

（上智大学　文　四年　宮城　真）

自然科学の限界を知った

私は理工学部の学生です。そのためか、どうしても自然科学を学んで養われた物の見方でしか物事を判断していなかったようです。しかしこの合宿で、自然科学の限界ということがはっきりわかりました。これから社会に巣立って行くわけですが、情緒をかねそなえた判断をして行きたいと思います。

（明星大学　理工　四年　藤沢史人）

日本人の心情を求めていきたい

人の心がいかに大切なものであるかを諸先生方に教わりました。今迄、空虚であった心に支えが出来た様な気が致します。

この合宿を期に、もっと日本人の心情というものを求めていきたいと思います。また日々の生活にこの合宿で学んだことを活かしていきたいと思います。

（熊本大学　工　四年　加藤和彦）

国文研には最早魅力を感じない

（最後の感想発表のときに僕が云ったのは）国文研を中傷したり破壊を望んでの意見ではないのです。国文研がこのままでは、旧態依然、形式と形骸に堕してしまうと思ったからいったにすぎない。正直な感想（を述べたり）批判したり、注文つけたりする人間が遠ざけられ、やたらべたべたした修飾語、完成された形容詞の羅列でかざる人がもてはやされるのだったら、国文研には最早魅力を感じません。

（注、カッコ内の言葉は編集者加筆）

（早稲田大学　教　三年　斉藤英俊）

第二十三班―男子学生―

筆舌につくせないものを感じた

日常生活のいろんな障害のためにくもっていた自分の魂が、講義や輪読等によって清められ、ゆさぶられたという感激で一杯である。この感激は頭で考えめぐらしたことによるのではなく、講義をお聞きしていて、我が心によみがえってきたものである。これが大和ごころというのであろうか。私は筆舌につくせないものを感じた。

（神戸大学　経営　四年　合志洋一）

学ぶ姿勢を学んだ

合宿を振り返る時、必ずしも講義内容が理解できたわけではない。しかしこの合宿は「学ぶ姿勢を学ぶ場」であると思った。特に岡先生が質問者の誤った受け取り方を鋭く指摘なされたことに感銘した。あのような厳格な態度を、先生がとられるという事は我等の学園における教師と学生の間にはない。しかし私は先生のあの態度こそ、学者としての本来のあり方だと思う。そしてあの厳しさこそが学生に対する本当の意味での愛情だと思う。木内先生も学生の質問に対し、その質問が第三者的、傍観者的である場合に「そういう恐れがあると思うなら君が全力でやるべきだ」とおっしゃって、質問者に対しても示唆するにとどめられた。私は両先生から「学ぶ姿勢を学び」、提起された問題に心を定めて取り組みたいと思う。

（明治大学　商　四年　豊島典雄）

日本のよさを守り抜きたい

合宿生活をふりかえって、日本人である喜びと参加してよかったという感にひたっております。以前から日本人としての心の尊さ、あるいは日本人としての言葉の大切さを感じておりましたが、それぞれのものが次第に失われつつあるように思われます。そこでこれらを守り抜くことこそ、我々の最も重要な課題であるし、そうしなければならないと強く感じています。和歌の創作にしても自分の心をどのように表現したら適確かと言葉を考えました。そして自分の心を正確に表現できない時のもどかしさも味わいました。このようなさまざまな体験を土台として、これからの人生を歩んで行きたいと思っております。（亜細亜大学　経　四年　川越一男）

日本文化の真髄に触れた

人生経験を深めたいというような漠然とした気持で参加した私にとっては、毎日が反省の日々でした。諸先生方の御講義に感動させられ、木内先生の御講義や木下先生の宮中での体験を通しての御講話を聞いて、本当に日本文化の真髄に触れたような感にうたれました。特に御自身の体験からにじみでてきたお話を涙ながらに話される木下先生の御姿をみて、一生を天皇に捧げ切った先生の人生がうかがわれるようでした。（埼玉大学　経　四年　高橋勝男）

三派の学生にもこの感激を味あわせてやりたい

日本人として生れて良かった、本当にありがたい、この合宿で一番強く感じたのはこの事です。この合宿に三派の学生も連れて来たい。できるだけ多くの人を連れて来て、僕と同じような感激を味あわせてやりたいと思った。この様な生き方の中にこそ本当にお互いを生かし合えるむつまじい世界があると思った。

しかし今僕等をとりまく世界は、日本のもつすばらしさを毒している、破壊しようとしている。じっとしておれない気持になりました。このすばらしい祖国日本の生命の中に僕の生命がとけこんでいく様な生き方をしたいと思います。（大分大学　経　四年　衛藤晟一）

学問に取り組む姿勢を正された

「反体制は内容のよしあし」といわれた木内先生の言葉が、なぜか心に残っています。と同時に「学生（共闘派）の気持ちはわかるが、やり方がどうも……」と考えるのはまち

がいであり、本末を転倒しないようにしなければならないと思いました。

岡先生、小田村先生のお話、あるいは和歌創作を通して、言葉一つ一つをどんなに大切に使わねばならないかを強く反省しました。そして学問に取り組む姿勢を正された気がします。

（玉川大学　文　四年　石橋哲哉）

日本女性への信頼を取戻した

私の常日頃の生活が安直なものであり、学問、人生、祖国に対する己れの姿勢というものが、ずいぶんいいかげんなものであったということを、この厳しい合宿生活を通して体験的に知らされました。人生への真剣な姿勢なくして人格の円満な形成は果しえないと思った。

私の日本女性に対する不信感は非常に強いものでしたが、全体意見発表の時、一女子学生の無言の感動の告白を目撃して、本来の純でひたむきな日本の女性像というものの現実の存在を知って大変うれしい気持になりました。

（早稲田大学　政経　四年　阿曾義男）

家族にも話してあげたい

全国各地の学生と直接話をすることが出来、また自分の存在についての何らかの知識を得たようです。小田村先生を初め数々の真剣な御講義を開き、合宿に来て本当によかったと思う一方では、この合宿に来られなかった同胞にこの合宿で学んだことを早く知らせてやりたい思いです。

木下先生のあのお話、あの精神を家族に話してあげたら、とっても喜ぶことと思います。テレビを見るだけで感激する私の家族へ、このお話は最大のおみやげになると思います。

またほとんど時間通りに日程が実行されたことは、ルーズさが云われている現在において身の引締まる思いがしました。

（福岡大学　商　四年　大野治憲）

自分からやらなければいけない

この合宿に参加する前に考えていた事と現実に参加してからとでは、随分違ってきた。自分は全然勉強が足りず、先生方や合宿参加者のいわれる事がはっきり理解できなかった。しかし他の人が勉強しているから、自分も、というのではなく、自分からやらなければいけないと思った。そう思っただけでも自分自身良い収穫であったと思っている。

また今度の合宿を通じて、日頃自分がかくありたいと思っているそんな人とも友達になれた事をうれしく思う。

（亜細亜大学　経　四年　吉田慎一）

なじめなかった原因を考えたい

「現代の思想の乱れ」ということについて、私も非常に心を痛めてきた。それが何故起こったのか、如何にすれば良いのかを考えるとき、私は人間とは何か、民族とは何か、と次々に疑問がわき、心にわだかまっていた。この合宿に参加して諸先生方のお話を拝聴したとき、今迄私が経験してきたものとあまりにも違っていたので、十分に聞いていたつもりだが、どうしてもなじめなかった。

それはどうしてだろう。この疑問は非常に重大なことだと思う。これから帰ってこの疑問をじっくり考えてみたいと思っている。

（九州大学大学院　薬　一年　大木俊光）

第二十四班—女子学生—

防人の歌に目頭が熱くなった

和歌をはじめてつくってみて、言葉の厳しさを痛感致しました。

こんなにもまっすぐに自分の生き方を、写しだすものがあったのかという驚き、ただもう何を気負ってもだめだ、そういう思いに愕然となりました。しかし、その中から、胸の中にすがすがしいものが、わきあがってくるのを、どうすることもできませんでした。素直にみること、ここからもう一度はじめるつもりです。

いっぱいの矛盾をどっかとひきうけたまま、まっすぐに生きているのが感じられた、あの防人の歌に、目頭が熱くなってしかたがありませんでした。

「どうしようもない矛盾を、いっぱいひっさげて生きていかねばならない人間が、自我の世界を捨てて、無私の心になりたいと思うその悲しみの中に真心がある」という小田村先生のお言葉が胸にピーンとひびいてまいります。とにかく、身の回りにあるささいなことからはじめてゆきたいと思います。

（岡山大学　医　一年　中川登紀子）

万葉集のうたをなつかしく思った

時代遠く隔る万葉集のうたを、今私達が感じられるということを、うれしくまたなつかしく思いました。

古くからこの日本には、多くの人が生き、そして死んできました。それらの多くの人々によって形成されてきたいのちのこもったこの日本に、今、私があるということを実感し、涙を禁じえません。

御講義の中では講師の生き生きした御言葉にふれ、ハッとする思いも多く、今から私が考えなければならないことが、

非常に多くあると痛感しております。

小柳先生の御講義の「武」はよいものでも悪いものでもなく、それを用いる人間によるものだ、という言葉が強く心に残っております。（慶応義塾大学　法　一年　小泉明子）

友に勇気づけられた

五日間、そのどの日を顧みても、私がこれから生きて行く上の心の柱を築きあげてくれた大切な毎日でした。しかし、私は、自分が本当に皆の前に心を開いていたかと思うと、我身が悲しくなります。なぜもっと話さなかったのか、分かってもらおうとしなかったのか、悔まれてなりません。

自分の心の内なるものに忠実に生きよう、決して囲りに流されまい。

大学紛争の中で懸命に自分の信念を貫き通そうとしている班の人たちを見るにつけ、ややもすれば意志のくじけやすい私は、自分を恥ずかしく思う一方、彼女たちに勇気づけられました。（玉川大学　文　三年　今滝須美子）

常に自分を真剣にみつめていきたい

今度の合宿で、一つ確実にわかった事は、どの先生方も日本を深く愛していらっしゃる事と、小田村先生の偉大さが最後のお話でよくわかったという事。

それに、全体意見発表の時の「その場、その場だけ真剣ではいけない」という発言が強く心に残っている。毎日の生活の中で常に自分というものを真剣にみつめ、何をなすべきかを考えなければならないと思う。

（長崎大学　教　一年　森永みち子）

はだで感ずることが大切

この合宿において日本に生まれて本当によかったということを感じました。そして古典をかえりみることの大切さをつくづく感じます。近頃の世の中は理論や理屈に満たされていて、自分が思っている半分も相手に伝わらないことが沢山あります。そしてその理論についつい負けてしまうことがどんなにあるでしょう。けれども先生の講義をお聞きして理論をのけた、そのあとに残るものが大切だということを学びました。理屈ではなく、はだで感ずることが大切であるということを知りました。岡潔先生が「今の女性はたくましい。顔を見ればわかる。ゆかしい女性になりなさい」とおっしゃられた御言葉が強く残っています。

（桜美林大学　文　一年　中沢ひろ美）

女として大切なものを得た

四日間をふり返って今思っていることは、また来ようということです。都合で来られなくても、いつかまた来る。そして、もう一度、木下道雄先生と、岡潔先生のお話をうかがいたい。一生のうちにもう一度あの感激を味わいたい。今度はまだまだ未熟で理解し得なかったが、来年はもっと心を育てて一言ももらさず、この体に収得して帰りたいと思います。

私はここで、人間として女として大切なものを得ました。

（福岡教育大学　一年　河崎富慈子）

陛下の御心に感動した

この五日間、毎日心打たれる御講義に、本当に感謝いたします。木下先生のお話された今上陛下の「民思われる御心」には、涙があふれてまいりました。また、友達の目にも涙が浮かんでいました。

先輩の方々をはじめ班の人々の暖かい心づかいをとてもうれしく感じました。この合宿で得たことをできるだけ多く思い起していきたいと思っております。

（青山学院女子短期大学　家　一年　小川美千代）

自分は日本人なんだ

この合宿の最初の日の私を思い起し、合宿終了後の私とを思いくらべてみますと、この合宿で私が得たものが何であったかよく解ります。

それは「自分は日本人なんだ」という感情です。素直に心の底からそう感じました。そう感じることが出来た自分を本当にうれしく思います。

この気持を基礎とし、岡先生をはじめ、諸先生方の御言葉をよくかみしめて新しく歩き出そうと思います。

（熊本短期大学　教養　二年　甲斐千恵子）

真心をスローガン化させてはいけない

小田村先生の最後のお話「合宿四日間を顧りみて」をお聞きし、これだけで参加した意義があったと感じました。昨年の合宿では、非常な感銘を受けると同時に多少のわだかまりを持って帰りました。今度の合宿ではその心のわだかまりが少しづつ融けてきました。毎日「まごころ」とか「他人の心になって考える」ことが大切だとは思いながらも、そこに何か固定した古めかしいものを感じて、ついにはまごころを説く自分に疑問を抱き、無理して話していたように思います

が、小田村先生の「まごころをスローガンにせず常に心にまごころを念じていくように」との御言葉をお聞きして、まごころは、脈々として人の底に流れ、それによって人間生活は支えられているということがわかりました。

（長崎大学　経　二年　江口篤子）

人の考えの違いを痛感した

何か一つでもつかめるものがあったらと、そんな気持で合宿に参加しましたが、やはり参加しよかったと思っています。質疑応答の時や、班別討論の時に多くの人の話や意見を聞いて、こんなにも人の考えとは違うものだろうかと痛感し、そこに壁のようなものを感ぜずにはいられないのですが、そこでとどまっていてはいけないと思いました。

（大阪外国語大学　一年　山本美知子）

第二十五班―女子学生―

とてもうれしかった

この合宿で、人々の真剣なお話をお聞きして、私は初めて、実感として「真に祖国のことを思っている人がいるのだ」と確信することが出来ました。そして、直かにこのような人々の心と触れあっているうちに、何にも言えないけれど、どうしても何か言いたくてしようがない。この人達に何か応えるためにも何かを言いたいと思って、全体意見発表の時、思わず壇上に上ってしまいました。その時私は初めて自分を忘れて何かに言わされているような気がした。そして「この合宿に来てよかった」と言うので精一杯でした、でもこれだけのことが言えたのだ……とてもうれしかった。誰かに私の心は通じるだろうと思いました。合宿参加を心から有難くうれしく思っています。

（長崎大学　教　一年　加治木かをる）

自分のこの足で大地に立ちたい

大学で目の前にマルキシズムのきちんと首尾一貫した思想をつきつけられた私は、心の中の迷いに目をつむってしまい、デモに何度も参加しました。そして安保反対、大学立法反対と叫びながら、何か自分の声ではない声で叫けんでいる空虚さはどうしようもないものでした。この合宿のマルキシズムと全く相反する思想もかじって、自分を中和するのも無駄ではなかろう。そんな生意気な思い上がった考えで合宿に来たことが、今では恥ずかしくてたまらない気持ちです。

私は、もう一度生れ変った気持ちで自分の目でものを見、自分の頭で考えたい気持ちでいっぱいです。何ものにも流さ

れることなく、自分のこの足で大地に立ちたいと思います。自由で豊かな心をもって、感激で自然に流れ出る涙を持つ人間の心を求めて行きたいと思います。

この合宿の壇上で話されたどの先生方も、また学生の方々も、みんな目が輝いて澄みきっていました。

本当にありがとうございました。

（奈良女子大学　文　二年　小山街子）

すみれのようなゆかしい女性になりたい

この合宿に始めてきました。それも最年少という特殊な立場で参加したのですが、その立場に甘えていたような気がします。御講義も、勉強不足で、半分位しか理解出来なかったようです、そのことが大変すまないという思いでいっぱいです。

岡先生のお言葉のゆかしいすみれの花のような女性になりたいと思いました。小柳先生が杖を捨てて自分の足でしっかり大地に立てとおっしゃった事が深く心に残っています。また木下先生の御体験を通して語られた感動的なお言葉も忘れられません。帰ってから整理して自分の物にしたいと強く思っています。

（筑紫女学園高校　三年　北崎英子）

内面的な心の通いが得られた

四日五日のこの合宿で、私が感じたことは、単調な自分の人生において、短い期間ではあったが、友人らと互いに寝食を共にし、語り、そして、少しずつ内面的な心の通いが得られたことが喜びであったということです。未熟な自己をみがき上げ、少しでもよりよい人間になるため、読書によって先人の考えに触れ、広く師の御言葉をお聞きし、これからの人生を深めて行きたいと思います。

（鹿児島大学　教　一年　山本美織）

岡先生の御言葉を大切にしていきたい

ややもすれば、理論をねり、自分の考えだけが正しいと思い、他人の意見にも耳を傾けようとしなかったのですが、言葉の概念に囚われず、童心のように素直に物を見、感じる、その時の感動が人間にとっていかに大切であるかということを知りました。これから教育界に立つにあたって、いろいろな混乱が待っているかも知れません。そんな時、講師の先生方の御言葉をはじめ、現在教育にたずさわっている方々の御言葉の一つ一つを思い出して、頑張りたいと思います。自分を確立させる為には、自分の殻を抜けきらなければならない

と思いました。

岡先生の「ゆかしさ」や「すみれ」という御言葉の意味を現実の生活の中で真剣に探し求めて行くつもりです。

（玉川大学　文　二年　千葉麗子）

言葉は生命である

この合宿で学んだ中で、強く感じたのは、「言葉を大切にする」ということです。「初めに言葉あり。言葉は神と共にあり。言葉は神なりき」という聖書の冒頭も思い出され、言葉は生命であるというような気がしてきました。

理論をふりかざし、言葉をもてあそぶような、全学連との言い合いが、これほどむなしく思えた時はありません。

（長崎大学　教　二年　真名井節子）

「ゆかしさ」をもった女性になりたい

合宿での五日間、大勢の先生方の御講義をお聞きして、今まで、自分が他人に頼り無責任な態度で毎日を送ってきたことがとても恥ずかしく思われ、もっと自分自身というものをもち、小柳先生がおっしゃったように、自分の足で立たなければならないと痛感しました。

また、岡先生が女子班に来て下さった時に、女性は「ゆかしさ」をもっていなければだめだといわれたことがとても心に残り、ゆかしい女性になることはとてもむつかしいことだと思うが、ほんとうのゆかしさをもった女性になりたいと思います。

（京都女子大学　文　一年　柴田和子）

行動の基準を捜し求める態度のまちがいに気づいた

判断に苦しみ、自分の気持と価値観とが食い違う時、確固とした自分があればと思う。それに照らし合わせたらたちどころに進むべき方向が返って来るような絶対的な信念が欲しい。昨年の合宿では、自分の感情、気持に忠実であることこそ自分の寄って立つべき基盤なのだと思った。ところがこの一年迷った。自分の心に忠実にという言葉が何の役に立っただろうか。そこから何の行動の基準も出てこなかったし、判断の助けにもならなかった。しかしこの合宿で、岡先生のお話しの底の深さに触れた時、確固とした信念を、行動の基準を捜し求める態度そのものがまちがっていることがやっとわかりました。

（岡山大学　医　二年　小田幾世）

天皇という言葉にひっかからなくなった

今まで天皇と言われると、何か特別な感情を持つほどでし

たが、諸先生方の御講義をお聞きしているうちに、その言葉もさほど、ひっかからなくなったようです。この合宿で、勉強していく心構えを学んだ気がします。それに人の言うことをよく聞き、その一言もおろそかにせずその人の気持を理解しなければいけないと思いました。しかしそうすることが如何に困難であるかということもわかりました。岡先生の御言葉「人の死に方」について何か課題を与えられた気がします。和歌をつくることによって、今までただぼんやり見ていたことが、もっと細かくなり、はっきり物を見る態度を養うことが出来たと思います。これからも和歌創作をしていくつもりです。

（福岡教育大学　一年　早野洋子）

第三十一班―教　員―

その場にじっとしておれない気持になった

先月下旬、私用で上京した際、時間をみつけ皇居内を拝観する機会を得ました。玉砂利を踏み、整理された樹木園の芝生を見て何か忘れかけていた私の心に強烈に刺激を与えるものがあった。その気持がさめやらぬまま合宿に参加し、今上天皇の侍従次長であられた木下先生の侍従としての、なまの体験をお聞きし、本当に前回にうわまる感動を覚え、その場にじっとしておられない気持になりました。この事はこれから先、私の心の支えになると確信致します。

（八代市立第五中学校　田浦政義）

小田村先生の言葉が強くひびいた

班別討論での活発な意見の交換、遠慮のない発言と真剣な態度に感激しました。私の意見も深められたいへん有意義でした。とくに私は教育の現場にたずさわる身として「教育の場というものはどういうものか、はだで感じ、心でとらえろ」といわれた小田村先生の言葉は強くひびき、私の今後の生き方をささえてくれるものと思います。

（熊本市竜南中学校　成松一生）

教育の場の実現を

「教育の場をここに実現してみよう」という開会式での小田村先生の言葉を柱として、それを体験し、味わい見つめてみようということで、この合宿はスタートした。このことは平素自分が教育の現場で痛感し、他にも訴えてきたことと共通することであったと思う。今の教育で欠けている一面は何か、知育を重んずるあまり教師と子供との心の通いあい、人格のふれあい、心を育てることが軽んじられていたのではないか。子供を甘やかし、人生に処するきびしさを教えること

にも欠けていたのではないか。社会生活の中で自分がやろうとしていることにどんな意義があるかを教えることを忘れているのではないかということである。このような心がまえに立って明日からの教育の場で子供に接していこうと心を新にした。

（熊本県阿蘇町立春牧中学校　塚本武美）

心から語り合えた

最近の世情は私どもの心に大きな不安をあたえる。社会情勢のさまざまな問題、特に教育の問題には私自身その現場に立っており、正常化のためにどうしようもないいらだたしさを何度か味わった。その私にこの四泊五日の合宿教室の体験は大きなエネルギーを与えてくれた。

多くの講義、講話とともに、ことに忘れ得ぬ事は、同室の先生方の事である。勤務する学校は互いに遠く離れているが夜、昼となく教育のあり方、二十世紀を背負う子等について語り合う日々は楽しくてたまらなかった。共通のなやみを心から語り合い感じいる日々であった。

（熊本県人吉市立第二中学校　永井陸雄）

日本を愛する子を育てたい

日頃職場では、毎日毎日の教育をどうするかという細事に心を配り、休む暇もない教員生活の中で、世界を大きく見つめる習慣をなくしていたものだが、この合宿での諸先生の話は、私の心を大きく開かせ、物の見方、とらえ方の方向を与えていただいた様に思っている。

教育を技術としてしか考えず、一時間内で教えこむ知識や技術のみにとらわれて、どうかすると百点を取れる子に教えこむことが教育者であるといった感じがしないでもなかった。しかし、私はいま、日本の子を日本をよりよく考える子に、日本を愛する子に育てていかねばならないと思う。

（熊本市立白川中学校　西村　淳）

頭の下がる思い

諸先生方の御人格、人生観、深き憂国の情には頭の下がる思いがした。また志を同じくする諸先生、同僚、青年学生に身を以って接することが出来たのはこの上ない喜びである。わずか五日間であったが非常に充実した生活が送れ、日頃の自己の悩みも、おぼろげながら解決の糸口がつかめたようで、今後勇気をもって自己の途をつき進む姿勢が出来た。

（熊本県南関町立南関北中学校　村上圭介）

班別討論の時間がもっとほしかった

三十一班はすばらしい班であったと思う。班長中心によくまとまり、心と心が通いあい、私にとっては非常に有意義な合宿であった。ただ班別討論の時間がたらなすぎたのは残念だった。

私としてはこの四泊五日で学んだことを教育の現場で私なりに活かして行くつもりです。

（熊本市立竜南中学校　中尾　晃）

友の心の奥までのぞく

合宿教室に参加できたことを有難く思う。国文研の志向されるところも、四泊五日の期間を通して自分なりに理解できたし、また自分自身、率直に自分の思うことを述べ、友達の心の奥ものぞかせていただいたと思っている。この合宿を通して体験し、また自らの心に受けとめたものを、今後の生き方を展開するなかで、生かしていきたいと思うのみである。

（熊本県人吉市立第二中学校　小松　正）

第三十二班―教　員―

真心の躍動なくして教育問題の真の解決はない

今日の教育問題、特に大学問題の解決方法は、学者として適当でない方々は国民多数の意見によって立法された法によって全て排除し、暴力等を行使する学生は徹底的に検挙すべきだと強く考えていました。しかし、日本の将来、教育の本質から考えればこれだけでは真の解決は無いという事、真の解決は、小田村先生の最後の言葉「全ての人々を動かさずにはおかない」真心の躍動というか、これなくしては本当の解決はないという事を強く感じた。

教職にあるものとして、純真な子供達にふれる日々の喜びや恵みにこたえ得るような生活を続ける事を新たに決意した。

（熊本市立東野中学校　大野昭雄）

心と心のふれあいがあった

合宿に参加して本当によかった。うまく文章で表現できませんが各先生方の熱意あふれる御講義によりまして、何かもやもやしていた心がはればれとしていく感じがしました。またこの合宿では先生方をはじめ主催者の国文研の方々が一生

懸命に私たちに接し、心と心のふれあいを求められたことに深く感謝しております。小田村先生の「合宿をふりかえって」で述べられた教師の生徒達に接する心がこの合宿で実践されていたと思います。私はこの気持を常に心に持ちながら教育の道を精進していきたいと思います。

（熊本県人吉市立第一中学校　吉村　安）

勉強不足を痛感

私は日頃身に感じていて、しかも言葉で表現できなかった思いを、諸先生の熱意にあふれた言葉で聞き、深く感激した。と同時に私自身の日頃の精神生活のいいかげんさと勉強不足を痛感した。また小田村先生の昭和の志士とも言うべきその精神力が、その姿にも言葉にもあふれていて驚いている。いやでもファイトを燃やさねばならないと思っている。

（熊本県小国町立小国中学校　北里　功）

決断力を与えられた

長いように思われていた合宿教室も夢のように過ぎてしまった。今ではもう二、三日いてもよいような感じがする。小田村、岡、木下の三先生そのほか多数の先生方の誠心誠意をこめた講義は今まで迷いがちな自分の気持に一つの決断力を与えてくれた。今後この教えを末永く持ち続けて、自分の人生を生き抜く為の心の糧としたい。

（熊本県長洲町立腹栄中学校　竹本　繁）

木下先生の御講話に涙がでた

第一日目の日程が終り、床についたときは身心共に疲れてしまい、五日間も身体がつづくだろうかと心配だったが、第三日の阿蘇登山ごろになると慣れてきたのか心にゆとりができ楽しい合宿生活になってきた。今思えばこの合宿教室で得たことが実に多いことに気づく。諸先生方の講義や講話の一つ一つが思いうかばれる。特に心打たれたことは、木下先生のお話である。日本人としてあたりまえのことであるが、涙をこらえることができなかった。

（熊本県菊鹿町立城北中学校　永田一吉）

力強い小田村先生のお話

小田村先生の御講義を聞き、まごころということについて深く考えさせられた。特に先生の力強い御教えを聞きながら私はシラーの「ウィリアム・テル」の中でゲスラーの圧政に身を挺して立ち上ったテルの姿を彷彿させられた。

私自身明日からまた生徒に接し、若い生命をよりよくのば

してやらねばならない。今迄御導き載いた気持でよりよい社会の発展のために力を尽したいと思う。

（八代市立第四中学校　橋本正臣）

和歌の創作に取りくみたい

先生方の講義、講話をお聞きし、自分を深くみつめ自分なりのしっかりした生き方を体得したような気がします。また和歌の創作指導と創作は非常に私にとって有意義であり自分の生き方に光りを持たせてくれた感じです。今後もこの勉強に取り組んでいきたいと思っています。

（久留米市立荒木中学校　緒方　舳）

矛盾を心の中で統一したい

古来、人間は暴力を憎むあまり宗教にその救いを求めてきた。聖徳太子の「和を以って尊しとなす」而りである。

私は、四十三才余の人生をあゆんできたが、「自分がいかに生きていくべきか」「日本のあゆみはいかにあるべきか」につき、新聞をよみ原典をよんで、いろいろな矛盾を自分の心の中で「統一」してみたい。同時に、西洋文化、日本文化の夫々のよさをつまびらかにしていきたい。

（熊本市立藤園中学校　田口省一）

第三十三班―教　員―

国を思われる心情に心打たれた

木下先生のお話で天皇のお人柄と国民の心を聞いて、このお話とはあまりにもかけ離れた「責任を他人に転稼する」という現代の日本の風潮を思って悲しい思いがした。そして先生が最後に「どうかみなさんお元気で、日本のことはたのみます」と云われた御言葉は、ただ国を思う心情であると感じ、私の胸を強く打ちました。教育に従事する一人として、機会ある毎に、日本人であることを胸をはっていえる様な人づくりに努めたいと思う。

（熊本市立藤園中学校　重安真三）

自分の教師としての態度に慄然とした

戦後二十有余年、社会科の教師として歴史や政治を教え、ただ皮相なる知識のみを教えたこと、また教えられている社会科がそうであることを考えるとき、大変淋しく思います。憲法の授業まで「天皇の地位は国民の総意に基づく」とか或いはまた、天平の彫刻をただ美術品として美術史を教え、作品がどうして生れたかというその心を忘れ、詳しくやれるこ

とに得意すら感じていた自分の態度にまさに慄然としました。

教育の場、教育というものを真剣に考えて、教師としてのこの上ない喜びを感謝しながら生涯をこの道にかけることを決意しました。（熊本県植木町立吉松中学校　田中良之介）

教えることのきびしさが解った

日教組のあり方の間違いを同僚に説明しても組合理論で反発され、その反発を封じるだけの説得力がなかった自分に何とか心の支えとなる考え方、思想はないかと考えて来た。だが今、その動機がまちがっていたと反省している。岡先生のお話を聞いてほんとうの勉強とは何か、教育とは何かという教えることのきびしさがわかったような気がしている。祖国日本のために散っていった人たちの志を出来るかぎり大切にして、自分も美しく死んでいきたいし、そのための努力をしていくことを日常生活で続けたい。

（熊本県天水町立天水中学校　隈部国和）

言葉のきびしさを知る

合宿に来るまでに様々な話を聞かされていただけに私自身ひどく身構えた姿勢であったし、緊張し過ぎていた。だから小田村先生の「虚心に話を聞け」という言葉に一打を受けた思いであった。また岡先生の「わたしはそうは言いません」という厳しい叱責は言葉を正しく受けとめることの重大さを見せつけられた思いでした。ことばに責任をもつこと、それは自分の学ぶ態度を厳しくすることだと教えられた思いです。これからの読書、勉強に、より厳しい姿勢で向かうつもりです。より深くものを見つめて行こうと思います。

（八代市立第六中学校　兼丸欣一）

日本を思う日本人を育てたい

木下先生が天皇のみこころ、侍従の心、国民の心というものを体験をとうし、実感をこめられて語られた御言葉を聞き私は感激して涙がでてきてとまらなかった。この感激は一生忘れることできない。

教育する場がどんなものであるか、教育とは何かということをおぼろげながらつかみとれた気持です。今後の教育にこれを生かして、日本を思う日本人を育てていきたいと思います。

（熊本県人吉市立第一中学校　黒川淳二）

求める姿勢を学んだ

木内先生の御話により、視野の狭さを思い知らされ、視野

を広げる必要性を感じた。また岡先生のお話で「情の深さ」を感知し、教育とは、人間とは何であるかを求めるための姿勢を学んだ。そして班別討論では、現在の問題を解決すべき方向を見出すことができ、心の触れ合いを感ずることのできた思いがする。

（熊本市立江原中学校　林田　光）

心の中の何物かに火を吹きかけられた

小田村先生が教職員に対する合同懇談会の折、淡々と語られたご自分の生涯をかけての生き方に強く感動し、この御姿こそ言葉で云えば「まごころ」とでも云うのだろうか。先生ご自身は実に何事もなく、さりげない調子で話されましたが、私にとっては一つ一つの御言葉が私の体をゆさぶり、心の中の何物かに火を吹きかけられた思いでした。

「その国の将来は、青年を見よ」との言葉は古来云い古された言葉でしようが、過去十四回の歴史を有するこの国文研が明日の日本を背負う「若人の集い」を開催されたことに一日本人としてこんなに力強く感じた事はありません。

（久留米市立城南中学校　中村代基）

第三十四班―教　員―

心をゆさぶられつづけた

これ程心を打った会に参加したことは戦後初めてであった。「自己に忠実なりや」「友の心の友たり得るや」「日本人たり得るや」この三点を自分自身確かめるのに十分な会であったと思う。

ごまかしのない人間、友の力、友情に気づき感謝することや、両親、社会、国家への尊敬をも、ともすればわすれがちな自分にゆさぶりをかけてもらい得た喜びは大きい。特に今日の日本を建設してこられた祖先の遺業へのおもいを何よりも強く感じさせられた次第である。

自分の人生に悔いを残さぬよう、教育の中で一人一人の魂を正しく生かすことに活力を入れたいと思う。

（熊本市立尾ノ上小学校　上村芳輔）

生きる道標を学んだ

このたびの合宿において、講師の先生方のお人柄と教育をなさるお姿に心をうたれました。同時に情熱あふれる講義をお聞きして「自分の小ささ、無知さ」「生きる意味と目的は

自分で解決しなければならない」ということなどこれからの生きる道標を学びとることができました。今この高まった感動を忘れることなく悔のない生き方を追求していきたいと思います。

（熊本市立城北小学校　田中　隆）

「日本の美」を感得した

どの御講義からも、脈々として流れる共通の「日本の美」を感得することができた。心の拠るべきふるさとについて改めて深く考える機会を得たことは私の大きな収穫であった。

祖国の精神的荒廃を回復するにはやはり先人の精神的遺産を尊びそれを明日の日本に正しく承けついでいくことがだいじだと思う。

今後はこの合宿で見聞し考えたことを更に深め、自信をもって教育の道に徹する覚悟である。

（八代市立代陽小学校　戸田市治）

まじめさに心を打たれた

先輩の一言を機縁に初めて合宿教室に参加しました。ここで今はっきりとした確信や信念をつかみ得たのではありませんが、ただこの合宿教室が規律正しく、まじめであることに強く心を打たれました。

私はこの合宿で勉強したことを機会に教育現場にあっては、指導の方法、技術の研究だけにとどめずに、学問の基礎となるべき人間の姿勢を確立すべきことを強く痛感致しました。

（久留米市立西国分小学校　大洲房雄）

貴重な体験を生かそう

厳粛でしかも身のひきしまる思いで、四泊五日の合宿にとりくみ真の教育の重大さを痛感した。この感激を新たに、諸先生の御言葉の背後にある精神を謙虚に受けとめ、教育の現場に生かす事こそ教育者としての正しい姿勢であり、責務であろう。この合宿の尊い体験に誇りをもって、力強く教育の道に前進していきたい。

（熊本市教育委員会　井島幹明）

生きる自信を与えられた

中央をはなれた田舎に住んでいると自分の存在自体に非常な不安を覚え、これでいいのだろうかという焦燥感にとらわれる場合が多い。この点でも、この合宿における諸先生方の話は、私に生きる自信を与えていただいたことに深く感謝したい。また他ではとても聞けないようなお話の数々や、テレビでしかお目にかかれない岡先生、木内先生などから直接お話を聞く機会を得たことはこの上ないよろこびである。

（熊本県阿蘇町立内牧小学校　吉良公紀）

勇気をもって教育の正常化にあたりたい

講師の先生方、国文研の先生方が国の前途を憂えて、情熱をこめて導かれる姿や参加者の真剣な姿に胸をうたれた。

私も教師の一人であるが、今までの自分の勉強不足を痛感した。正しいものを正しい、良いものを良いと教える事の出来る教師として更に信念をかため、勇気をもって教育の正常化にあたりたいと覚悟を新たにした。そのためには、数々のお教えを大事にして「日本人である」という誇りを自覚し、更に勉強を続け、日々の教育をしていきたいと思います。

（熊本市立壺川小学校　内田　実）

純真な子供に日本人としての心を教えたい

日本の一教師として、純真な子供の目、純粋な子どもの目、その目を見つめて私は教育にあたっている。理屈では表わせない日本人の心、日本人だけしか持たぬ日本人の心、その心を大切にしてきた。昨年の合宿では日本民族の伝統を見失なっていたのではないかと強く反省した。そのことを一年間、教育の現場において、子どもと共に考えつづけてきた。私のやってきたことは間違っていなかったのだと私の心に今、言いきかせている。これからも私は私の職業を通して純真な純粋な子どもに日本人としての心をやしなっていこうと思っている。

（八代市立八代小学校　加世田和馬）

第三十五班―教　員―

新しい希望を与えられた

同じ日本の教員が心ゆくまで自分の考えを述べ討論し、同じ目的のために四泊五日を話し合ったことは、終生忘れることの出来ないものである。講義の中に、「小学校教師の怠慢を純心な子供がカバーしている」とあった、また「教師は純心な子供の魂にふれている時、教師としての本分、満足がある」ともあった。三十五年の教育生活の中で、いつのまにか知識のみを教える月給取り的な教師になり切っていた私に、改めて新しい希望を与えてくれた。

（久留米市立西国分小学校　萩尾達也）

教育正常化への意欲が湧いた

四泊五日の合宿教室に参加させていただき、各講師の講義や学生、一般の人々の討論、意見発表は心打たれる事が多く

教育の正常化へ今後一段の努力をしなければと意を強くすることができました。

しかし、この合宿教室が、学生青年を対象として行なわれる意図から教職員にとっては何かものたりなさが感じられたのではないかと思います。未来に生きる子ども達を育てる教育の現場には数々の問題が山積みされ、その解決には、教師の勇気と決断とが強く要求されるのが現実です。

国づくりは、人々の力によってなされるものであり、その人々は教育の力によって育てられるとするならば、現実の教育現場に実存する具体的な問題に一つ一つスポットを当て講義し討論することこそ意義があるのではないでしょうか。

（久留米市立鳥飼小学校　平島俊之）

女性も共に国づくりに努めたい

「日本のあるべき姿」「今後どのように進むべきか」をみんなで求め究めようとする心、また講師を始め諸先生方の自分の本心から、青年学生が祖先の伝統を受け継ぎ、本当の日本人になってほしいと願われながら導びかれる心、その二つの心が一体となって真の学びの場を実現していったのは、得がたいものであった。木下先生のお話を聞き、終戦後天皇というイメージにまつわったものが清々しくあらい流されるような気持でした。

小田村先生がご講義に全身を打ち込んでおられるのに目を見はる思いでした。小柳先生のお話には、山鹿素行先生の教えが今も脈々と生きていることを知りました。

国の問題も女性は女性なりに考えている筈であり、今後の日本をよりよく進めるには共に考えるようにしなければならないと思います。もっと共に語り合い、共によりよき国を作り、その結果を共によろこび、かなしみたいと思います。

（熊本市立池田小学校　伊藤トキ）

生涯を印象づける経験

私はこの一ヶ月間、生涯を印象づける様な経験を二つしている。一つは二十八年前に台湾で教えたかつての教え子から招待を受けたことである。もう一つは今度の国文研の合宿参加である。私が敢えてこの二つの事を取出したのは、或事実を通じて共通の感動を持ったからである。それは「海ゆかば」の防人の歌を、遠い台湾のはてでもう四十になる中国の教え子から、別れに歌われたことである。私は教え子の同窓会で、よもや開会の時「君が代」が歌われ、閉会に「海ゆかば」が歌われようとは思わなかったのである。それは実に厳粛で、真心のこもった雰囲気であった。

慰霊祭では「海ゆかば」の合唱で最高に盛り上がったと思う。台湾の教え子のそれの再現の様に思えた。

（熊本市立城山小学校　西岡静雄）

教育の方向を見い出した

この合宿に参加して、この会の真剣さ厳粛さに驚いた。日本人であるが故に、どんな考え方、どんな態度を持つべきかということについて、自分なりの信念は持っていたつもりである。しかしそれが子ども達の本当の肉となり、血となり得たかについて、深く反省させられた。

古典を読み、先人の残した精神にふれ信念をもって教育すべきだという一つの方向を見出したように思う。

次の世代を背負う子どもたちの純真な心を見つめ合宿で得たことをよりよく生かし指導に励まなければならないと思った。

（熊本市立砂取小学校　前川信行）

和歌を創作する喜びを感じた

先生方の講義も、その内容も各分野にわたり、充実した有意義なお話を拝聴し、深い感銘を受けました。班別討論という言葉に驚きましたが、班の人達と心のつながりができ、何かしら心の晴れ晴れしさを感じました。和歌創作は初めての経験で四苦八苦致しましたが、創作するよろこびを経験したことは大変な収穫だったと思います。ここで体験できたことを心の糧とし、今日からの生活の中にいかして人生へのよりよい門出としたいと思います。

（熊本県横島町立横島小学校　坂梨琴寛）

「日本人」を自覚しながら教育に取り組みたい

御講義、討論と学習していくにつれて、目先の生活や仕事に追われて日々を無意味に送っていた自分の不勉強さが恥ずかしく思われた。人生や教育の問題について貴重なお話を拝聴することができ、この合宿に参加して良かったと満足の気持で一杯です。講師の先生方の熱意あふれる御講義、班の先生方の真剣な討議に頭の下がる思いがしました。今後の教育の現場に帰り、日本人であるということを自分に言い聞かせながら、日々の教育にとり組んで行きたいと思います。

（熊本県小国町立下城小学校　元主健一）

国を思う情熱が心をゆさぶった

先生方の御講話の一つ一つの感動が胸に波うっている。御講義の内容はもとより、諸講師の国を思う情熱が誠の言葉を通じ、これ程私の心をゆさぶり、感銘を深くしたことはなかった。特に木下先生が、御体験を通して語られたお話を聞き天皇のお人柄に接した思いがし、目頭があつくなるのをどう

しようもなかった。

日本の伝統を護り、承け継ぎ、真の日本を築いていかなければならない。教育界の現状を思う時、私は教師の重大さを新たに自覚する。友と誠をもって語り合い、勇気をもって実践し、一歩一歩改善して行きたい。

（熊本市立健軍小学校　田中　広）

教育者としての使命の重大さを自覚した

先生方が国を憂え、熱情溢れるはっきりした信念を持って行動していられることをうらやましく感じた。日本に生れ、日本人として生きるのは当然のことながら、歴史を通して日本のすぐれた良さ、美しさを再確認し、この日本を護り、将来この日本を愛する国民を育成することにたずさわる教育者としての使命の重大さを改めて痛感した。

私の生き方の一転機になった気持がします。

（八代市立松高小学校　成田行次）

第三十六班―教　員―

美しいものをすなおに感じ得る子供を育てたい

教育の現場で思想的に混乱をおこし、それが純粋な子供に悪い影響を与えているのはまぎれもない事実である。この時、この合宿に参加し五日間ではあったが、ここで学んだことが自分の今後の現場での教育に一つの光を与えてくれたと言える。自信がわいたような感じである。

明日からの現場での教育にあたっては、次代をになう子供を美しいものは美しいとすなおに感じ、言える人間に育てあげる教育を行うことが自分に課せられた使命であると痛感した。

（熊本市立中島小学校　田中準一）

前進へのきっかけがつかめた

人間として生きることの意味が如何に大切なことであるか、国家民族の継承発展の中で個人はどうあるべきか等を静かに反省し考える機会を持ち得て安らぎを覚えることが出来たことは大きな収穫であったと思います。中でも先人の国を想う熱き心と、自己をこえた道へのきびしい姿と力は現代の世相に立ち向う自分にとって大きな前進と行動の力を与えてくれたように思います。（熊本市立託麻原小学校　萩原康司）

素晴らしい日本人を育てたい

学校で子供達と一緒に暮すとき、子供達は何かを自分に求

めている様である。自分の人生姿勢が敏感に子供達に映っていくのをみてとても恐ろしくなってくる。それ故に自らの姿勢を何とか定めたいと思いつつこの合宿に初めて参加した。

五日間の合宿で多くの人々に接し、職業を同じくする人達の話を聞き、これから先の自分の姿を定めるのにひとつのきっかけを得た。めざましい科学技術の進歩の中で忘れかけている人間性というものを今一度深く考え直し、素晴らしい日本人を育てるために頑張りたいと思います。

（熊本県深田村立深田小学校　福島清爾）

友を信じ得た喜び

我が国の思想界が現在の安全保障問題を軸として肯定と否定の立場に二分され国民のひとりひとりが、また教師のひとりひとりが具体的に決断を迫られている時、この合宿で日本の伝統的な美に触れることが、国民同胞感にひたり得る本質的解決になる事実を感得してうれしく思います。特に班生活を通じて「友は信ずることができる」自信をつけることができたことは最大のよろこびでした。

（久留米市立御井小学校　金子祐幸）

稲妻のように内心によみがえった日本の姿

昭和二十年三月学徒出陣、そして終戦―復校、その目まぐるしい変遷の中でも「死と対決し、祖国のために戦おうという気持だけは間違ってはいない」という心の支えがあった。しかし、復校してみると、かつての教授たちは無表情に吾等を迎え、開口一番、デモクラシーの講義に入られた。

初めに抱いていた「祖国日本」の存在は、長い年月の間にしだいに薄れていった。だが、この会に参加し、電気にでもかけられたかのように、マヒしていた「日本」がよみがえってきた。

教育という世界に今は携さわりながら、西欧の教育学的方法にのみ明け暮れた卒業後の私の生き方に、まさに稲光のように、日本の姿を見せてくれたこの合宿を、忘れないだろう。

（熊本県一の宮町立宮地小学校　山内光輝）

調和のとれた教育をしたい

物質的、分析的にのみ走る今の教育に精神的、総合的な見方を加え調和統一した姿にもっていくべきだと考えた。日教組が政治闘争にまき込まれているとき、私はどのような事を研修していったらよいか方向を得たように思う。この合宿で

得た自信を毎日の生活の上で実行していく覚悟である。

（熊本市立健軍小学校　宮本安之）

諸先生方の気迫に打たれた

厳しい四泊五日の合宿であったが、教育の道に進む者としての生き方について、心が開かれた思いがする。万葉の心、聖徳太子の御心に少しでも触れ得たのは、心の中を見抜くようなするどいまなざしで話される諸先生方の教えによる。

（熊本県山鹿市立山鹿小学校　松永公保）

指標がつかめた

わずか四泊五日の研修であったが、今まで私がおぼろげに考えていたことがはっきりし、今後進むべき指標がつかめたような気がする。今後更に勉強を積み重ね、よりよき日本人となるよう努力してゆきたい。

（熊本県菊水町立菊水中央小学校　後藤庄一）

第三十七班―教　員―

教育にたずさわる喜びを感じた

混乱した現代に生きる人々に一番大切な「心の支柱」が欲しかった。何の為に生き何を為すべきかをしっかり握っておかないと日常の生活が実に空虚なものに感じられる。物質万能の世の中に精神的な拠り所が欲しかったが、今回の合宿に参加してはじめて本当に生きる喜びを、教育にたずさわる身の嬉しさを感じた。

小田村先生の仰しゃる「まごころ」の真の意義も理解できたように思います。自分をしっかり見つめ、児童生徒の教育に専心しなければならぬと決意を新たにする事が出来た。

（熊本県阿蘇町立碧水小学校　井沢長世）

生きることの厳しさ・学ぶことの重大さを痛感

日頃教育者の営みという目先の事のみに埋没して（実はその中にしか自分を生かす道は無いのですが、そしてそれは限りなく重要で困難なことなのですが）人生と学問に対する心がまえの基本にふれる思索の足りない毎日であったことを恥ずかしく思います。今日の社会問題や国際問題に対しても口先

の議論にだけ終始していたように思えるのです。生きることのきびしさ、学ぶことの重大さをひしひしと感じる四日間であったことに限りない喜びを感じます。

木下先生の御講話には実に深い感動にひたらせていただきました。尊い御経験からにじみでる先生の御実感を拝聴して、いいようのない感激にひたりました。

（熊本市立高平台小学校　川上久雄）

講師の日本を愛する心にうたれた

迫力ある小田村理事長の講義、世界情勢を見通して大局的見地から講義された木内先生、いつかはお話をお聞きしたいと思っていた岡先生の講義、そして今まで知られなかった天皇の御心を実感をもって話された木下先生、あるいはまた和歌、古典の講義等々、それらの全ての底流には日本を想い、健全な日本の将来を願うお心が切々と感じられた。

現在の社会情勢がゲバ棒とマルキシズムの渦まいている大学紛争、愈々先鋭化する日教組の動きなど世情騒乱の呈を示している折り、私達に必要なものは本当に祖国日本を愛する心、古くから伝統として受けつがれて来た、いわゆる「まごころ」であろう。四日間の合宿はこの心の大切さをしみじみと知らされた意義ある合宿であった。

（熊本市立池田小学校　菅　秀隆）

先ず自分で確かめよう

すばらしい幾人もの講師の話を聞き、来た甲斐があった。特に、班別討論を通じて、自分の目で見て、自分で考え、確かめて、自分で行動することが大切なのだと感じた。

帰って、友人などに会の内容を報告したいと思う。

（久留米市立金丸小学校　吉武啓治）

もっと早く参加すれば良かった

合宿教室に初めて参加し、全国の人と一緒に寝食を共にし、どれもこれも大変参考になることばかりで、何故もっと早く参加しなかったのかと残念に思っています。

講義は本で読むのと違って、直接先生方に接し、自分の目で見、耳で聞き、肌に感じ、何かおごそかに心打たれるものがありました。司会、自由発言、慰霊祭、班別討論、和歌等すべて一人一人を生かした主催者の心づくしに全く感服しました。また、助言者の一人一人に気を配り親切に助言して載いたことも印象に残っています。この合宿を契機にして一人でも多くの人にこの思いを伝え、学校においても一人一人を生かす、心のつながる教育を明日から実施してゆきたい。

（熊本市立花園小学校　東　正和）

教師としての人生姿勢が得られた

日本人として、教師として、自分の人生に厳しく立ち向う心の姿勢の基本的なものが得られたことに喜びを感じます。

数年前に拝聴しました木下道雄先生の御講話を再び拝聴して前回以上の感銘を覚えました。この研修で得た心の姿勢を教育の現場で根を張らせたいと思います。

（八代市立高田小学校　金橋良治）

第三十八班―教　員―

まごころを感じ得る生き方をしたい

日頃、学校の子供に接し多忙な毎日をおくっていると教育や学問の本質を忘れがちな時が多い。単に知識の伝達のみに追われ生徒と教師の心のふれあい、人間性のあふれる教育など忘れてしまう。最後の小田村先生のお話によってそれがはっきりわかって反省させられました。

木下先生の体験を通じてのお話を聞いて、天皇の御人格にふれ涙が流れてなりませんでした。国文研の目的が人間のあらゆる生活の中での心を求めるあゆみであることを知り、自分もともに心を同じくして友と語り合い、自分を深めつつまごころを感じ得るいとなみをしたい。

（熊本県玉名市立八嘉小学校　上原浩史）

教育の正常化に積極的に取り組みたい

合宿に参加された方々が意気盛んな発表をされ、とても頼もしく思った。講義される先生方も自分の信念をはっきりと述べられるのを興味深く拝聴した。

現代の社会は先ず、個々の家庭の子供の躾けからはじまり、それが集って、社会というものがつくられ、国家に通じることを思えば、家庭の教育、学校教育をもっと充実させ、よりよいものにしたいと念じざるを得ない。

そのためには真剣にものを見つめ、自分で積極的に解決に当らなければと思っている。

（熊本県人吉市立人吉小学校　西橋　毅）

生きる姿勢を学んだ

初めは、何と古めかしい研究をする合宿教室かと気の遠くなる思いでいたが、先生方の講義に聞きいっているうちに今までの自分に欠けていた、人生に対する姿勢や価値判断について共通の指標を見いだした感じを深くした。

（熊本市立泉ケ丘小学校　今井賢次）

「まごころをスローガンにするな」

参加して本当に良かった、のひとことにつきる。木下道雄先生のお話に涙を流したことは云うのも惜しい気持ちがする。この会に参加して心打たれたのは、「合宿教室をかえりみて」と題して語られた小田村理事長の「まごころをスローガンにするとはとんでもない」とのお言葉である。このお言葉はこの合宿教室の目ざすものが何であるかを端的に示されたものと感じ、本当にまごころをこめて、熱意をこめて語られるお姿には目頭のあつくなるのをおぼえた。

今日の日本の混迷を打開する為、我々一人一人がなすべき事は何であるかを教えていただき、新たなる喜びにうちふるえて山を下る事が出来る幸せを思わずにいられない。

（福岡県立朝倉高等学校　堺　修）

日本人であることを実感

私の生活信条はともすれば古い人間のそれとして評価されて来た。だが今合宿は私にとって真の確信と指針を得た素晴らしい出来事であった。口にだして十分に表現することは出来ないが私は日本人なのだと感じた。私はこれを今後の生き方の指針としたい。（熊本県玉名市立豊水小学校　小篠一郎）

教え子に伝えたい

教育の道ひとすじに生きる私にとって、この四泊五日の合宿教室で百万人の味方を得た喜びがします。ここで得たすべてを教育の現場に持ちかえって教え子に伝え、地域社会に生かすべく真剣に取り組みたいと思う。

（熊本県三加和町立緑小学校　白木敏明）

傍観者的立場を排除しよう

この合宿に参加している学生の中には自分自身の問題を第三者の立場で、自分自身の身に受けとめ得ずにいる者がいる事を残念に、また悲しく思いました。明日よりの教育の場に立つ者として、提起されるさまざまな問題を、他人まかせではなく、自分の問題として受けとめ、大いに努力したいと思います。

（熊本市立託麻原小学校　北原　孝）

第四十一班―社会人―

得難い場だった合宿教室

私は、合宿に参加して大変嬉しく思いました。日頃、会社

ではこの様な場合は持たれず、ただ、いかに売上げを伸ばすかそればかりです。

日本人として、人間として、自分のおかれている立場を考えると、漠然と生活は出来ません。その日その日を大切に、素直な気持で、自信を持って生きたいと思います。

（西武青果綜合食品㈱　宮本　信）

明日からの仕事に意欲がほとばしる思い

学生の素朴な、祖国、文化、学問を想う気持、常に問題を掲げ、融和の中にも真剣に考え、物事に対処してゆく姿に、本当に素晴しい、真の青年の横顔を見たような気がした。

ここで学んだことによって、明日からの仕事に対する意欲が無限に広がっていくことを信じます。

（㈱高田工業所　渡辺清俊）

日本人の心にふれた喜び

五日間の合宿を通じて我々社会人に一番欠けている物が何かを理解し得た様な気がする。

とにかく仕事に追いまくられている現状において、人と人との関係が表面的なつきあいに止まり「心」というものが存在し得なかったのではないかと思われる。

また、天皇についての考え方も現代の利己主義、物質主義的風潮の中に忘れかけていたものを今回の合宿でしみじみと目覚めさせられた。やはり自分は「日本人である」ということに深く感銘した。

（高千穂相互銀行　中牟田喜彦）

相手を思いやる心が大切なのだ

今回参加して、この合宿が至極平凡な常識を述べている合宿であるということを感じました。平凡ということがどんなにむずかしいかということも感じます。

特に感じる心を養うこと、頭はいつでも柔軟なものにしておく、頭を自由に働かせること等々の重要性を強く感じました。また平凡な行動の中にも相手を思いやる心こそが本当に大切なのだと思います。（鹿児島興業信用組合　本村健三）

講師の御言葉にうたれた

太田先生の御話の中で「国民が一つの理想を持ち精神力の充実した国民によって支えられている国家は繁栄し前進する」と言われました。このお言葉を折りにふれ嚙みしめて行動して行きたいと思います。

（明星大学理工学部助手　塩崎恵一）

魂をゆさぶられた思い

日頃より多忙に取り紛れ、仕事のみを精一杯したと言う満足感はあっても、ほっとくつろぐ時、人としての在り方に何か足りない、空虚な、これで良いのだろうかという、満たされぬ思いで悩んでいたが、数々の教え、指針の中に脈々と流れる歴史と伝統に培われ、知らない内に自然と育まれた魂をゆり起こされ、目覚めさせられた思いである。この合宿で汲み得たこの気持を心の糧として、じっくりとかみしめ反芻しながら充実した毎日を創り出し、精神の浄化、向上を図り自他共に誠の道を歩みたい。（中球磨林産開発㈲　三反田知行）

傍観者的態度を反省させられた

ともすれば日々の仕事に追われ自分自身をみつめ人生を考える時を失いつつあった私ですが、講話をうかがいつつ、また班員と語らいつつ「ああ、やりなおしだ」と心を新たに致しました。

この合宿に参加するにあたり、私自身は傍観者的意識を抱いておりましたが、そのよって立つところはそれぞれ異にするとしても学生諸君のまさに行動しつつあることから発する熱気に触れ、また自らの実体験を通しての何かを感じさせずにはおかないような諸先生の御講義をお聞きして内心の変化を見い出さざるを得ません。（出光興産㈱　西川正弘）

有意義だった五日間

有意義な五日間を過したと思います。一般社会人として仕事に追われ、いろいろな事を考えることすら忘れてしまうのが現実です。その中で、この合宿に参加して真剣に考え、語り合う、その機会を持てたことだけでも意義深いものを感じます。今度、このような機会に巡り会えるかどうか解りませんが、何かの折にこの合宿を想い出し、なつかしみながら、自分の生き方、心の持ち方の支えにしたいと思います。厳しい日程、自分一人で考える時間さえ持てないようなスケジュールの連続でしたが、精神的にも良い試練の場であったと考えます。（高千穂相互銀行　小松弘明）

人間としての正しい生き方にふれた

人間としての正しい生き方、また、新しい進む道を捜し求めることがいかに重要なことか、自己に忠実に真心をもって生きる意義の深さに今さらながら感じ入りました。また、天皇の御人格の偉大さに日本国民としての誇りを感じました。（高千穂相互銀行　西　憲一）

第四十二班 —社会人—

教育の本質を感じた

四泊五日にわたる今回の合宿は私にとって大変有意義かつ感ずることの多い日々であった。こうした催しを企画推進していただいた小田村先生をはじめとする主催者側の真摯な、全力を傾けた学生に対するお世話に、現代の学園生活に欠けているものを改めて痛感させられ、大学人として大学改革に取り組んでいる私にとって、今後の取り組む姿勢に大きな示唆を受けたように思う。とかく論理で終始しがちな現在の学問研究はゆきずまった状況にあるが、学問、真理の探求とは我々の日常性の中で真心の感じられる姿勢の中でものごとの本質を見きわめることであろう。今後の留学の中で日本の伝統的精神と西洋の精神との出会いの問題等を追求してゆきたい。

（早稲田大学　大学院　小沢善雄）

胸のひきしまる思い

私は社命により合宿教育に参加させていただきました。この合宿は右翼教育をたたきこまれるものだと聞いていましたので正直に言ってあまり気乗りがしなかった。しかし、実際に諸先生方の御講義を聞きまして、私は一国民としていかに自覚が足りなかったかと我ながら情なく思われました。

「天皇について」も今まで全く考えたことはなく、ただ天皇は国民の象徴であると漠然としたことしか習って来ませんでした。しかし木下先生のお話をお聞きして胸のひきしまる思いがしました。

（林兼造船㈱　谷川博亮）

目先のことにとらわれがちであった

四泊五日のこの研修会は私の人生にとって最も意義あるものであったと思う。「祖国と学問と人生」について大局的な話を講師の方々から聞いたことと、班別に分れての討論はほんとうに勉強になった。今まで自分はややもすると目先のことにとらわれがちで自分だけの小さいことが大部分であったように感じる。全国の若い学生諸君、教師、社会人、主催者側の方々が日本を憂え、人生を深く考え、気迫にあふれて生きておられるのを目の当りに見て、私も社会人の一員として全力を尽くしたいと思う。

（吉川工業㈱　工藤昭久）

真剣に生きたい

会社員として社会に奉仕している私にとって、若々しい学生や諸先生達のお話やお言葉にふれ、今迄の生活態度がはず

かしく思われてなりません。怠惰な自分をはげまされたような気がして、真剣に考えて生きたいと思います。

（小野田セメント㈱　荒川敏之）

常日頃の生活感度を反省した

企業体に属する私は毎日の生活に追われ考える余裕もなくただ単純に生活を送ってきた。ともすると国のことも日本文化のことも考えず日々の生活をいかに送るかとそれのみに心を配って来た。

小田村先生、岡先生始め多くの先生方の御言葉をよく理解し得たとはいえないが、私自身「これではいけないのだ」との感を強くしている。日々の生活の中で、教わった御言葉を思いおこしながら生活してゆきたい。

（林兼造船㈱　五島一朗）

いい加減な気持を反省させられた

社命で合宿に参加したが、最初はいい加減な気持で四泊五日を過ごそうと思っていたが、講義を聞くにつれてこの様な気持ちではたしてよいのだろうかと疑問が生じて、色々なことを考えさせられた。

（小野田セメント㈱　木佐木靖男）

短かかった四泊五日

合宿当初は全国から来た見ず知らずの人達で、なかなか討論も滑らかに進行せず司会の方に大変お骨折りいただいたが、寝食を共にする生活がつづくにつれ、同じ日本人なのだという気持が次第に深められていった。床についてからも話しは止むことなく続けられたが、今日で合宿が最後だと思うとこの合宿が短かく感じられてならない。

（鹿児島音楽文化協会　渡辺昌幸）

耳のいたい思いをした

企業体の中にいると、つい利益第一ということで生活してしまう。そうした自分にとって、この合宿で聞いたことは、時に耳がいたい思いになることもあった。

（吉川工業㈱　西　富士男）

指揮班

大役を終えた充実感

指揮班の仕事に追われ、班別討論はほとんどできず、講義

も中途で止むなく席をはずしたりしたが、全日程を終えた今あるのは指揮班の大役を終えた充実感である。

木下先生の御講話には涙がこぼれんばかりだった。また、友達から「御苦労さん」と声をかけられて気持を奮い立たされることもあった。その他、いろいろな感激が一緒になり、まだ僕の心の中でまとまり切れずにいる。これから先、この感激を、もう一度かみしめ、あらためて自分がまず何をやらねばならないかを見定めたい。

（東京大学　経　二年石村善悟）

生命を感じさせるまごころをつちかいたい

僕が合宿で非常に感じたことは、人間の価値は個々人の主体性なのだということです。「真心」とは、やさしい響きをもつ言葉であり、そういう意味のものだと思っていました。しかし、本当は厳しい研鑽の上に始めて生れてくるものだと感じました。

俗に言う「人の好い奴だ」では「真心」というものの一端は感じ得ても、鋭い生命を感得することは出来なかった。主体性の一語に含まれている意味を、今一度考えてみようと思います。

（皇学館大学　文　四年山脇敏夫）

概念論の空しさを痛感

就職が内定した私に友人が、その仕事は結局のところ資本家に貢献するだけのものではないか、と指摘された。彼の言葉は自分にはどうしても実感として感じられなかった。ところが小田村先生の講義の終りのところで「実感を伴わない概念論など何の役にも立たない」と言われたことでこの点をはっきりすることができて良かった。

また、木内先生の御講義の底に流れるものは法華経の仏教思想であるということを知り、この夏は学生時代最後の夏であるので、難解な法華経を親類のお寺にこもって読んでみたい。

（長崎大学　経　四年田中　洋）

参加者全員の熱意に発憤

班別輪読、討論の時間は、指揮班の仕事で中断し、ほとんどなかったが、合宿の終りごろには、あまり心の壁を意識しないで話しあえるようになった。いや、それよりも参加者全員が、それぞれ一心に努力している姿に打たれた。また、全国の大学を中心として一生懸命、活動している人々に会えたことは力づけになった。

講義の内容もさることながら、それらを通じて、先生方を支えている生き方の一端に触れ得たことは貴重であった。

（岡山大学　理　三年菅　志朗）

合宿中に創作された「短歌詠草」

―しきしまのみち―

短歌詠草について

本居宣長はその源氏物語論の中で「もののあはれ」を規定して「感ずべき事にあたりて、感ずべき心をしりて、感ずる」ことだと言っている。それは日本人の伝統的な情意の世界を規定した言葉だと受け取ってよい。「感情」が個人の心の世界に占める比重や、一国の文化の中における位置が、今日ほど不当にゆがめられ、おとしめられている時代はない。そして、それは一国の文化を恐るべき情況に追いこんでゆくという実例を、今日の日本ほど鮮やかに示している国もない。「感情の洗練」を欠くこと現代のごときは、日本の歴史の上で未曽有のことであろう。日本の知性の変革のために、短歌を指して「奴隷の韻律」と称し、これを破壊しなければならないというような不遜な妄想は、次のような現象となって現われて来ていると思われる。

一、人文科学系統の学問は、その主体である人間の人格に裏うちされることによって、始めて生きた学問となるべき筈であるのに、情意を切りすてることが「科学的」だと信じられた結果、学問とは人格と遊離した、論理の分析、再構成という知的操作にすぎなくなった。学問が単なる「技術」となってしまえば、それはもはや人の生命に訴えかけ、全人的な感動を与えるものではあり得ない。現代の学問の退廃といわれる現象の根源は、ここまで遡って始めて究明されるべき性質のものではないだろうか。

二、不当に軽蔑されたり、抑圧されたりした感情は、そのアン・バランスを回復するために必ず熱狂的な破壊衝動や原始への復帰のようなマイナスの働きをする。現代の学園に横行するゲバルトを、単なる反体制的な政治運動としてとらえるのは不充分であろう。それは㈠で述べた学問の退廃と根は全く同じであり、情意の涸渇、感

情の荒廃を、真に「内的」に克服しなければ、社会の恐るべき非人間化をもたらすであろう。

三、以上二つの現象のもう一つ底の方では、「感ずべき時に、感ずることのできない」多数の人々が恐ろしいスピードで増加しつつある。あれほどデリケートな情感の持主であった日本民族が、敏感な感受性を喪失し、やり場のない虚無感が広がってゆく時、それは政治革命の母胎が着実に醸成されつつあることを意味する。事態は誠に重大な段階である。われわれが合宿教室で予兆として感じていたことが、実にはっきりとした形となってあらわれて来たというべきである。

われわれが合宿教室で短歌を創作するという背景には、前述のようなきびしい現実がある。国民の「感情」は陶冶され、洗練されることによって、国民生活を内的に支える大きな力となるであろう。その方法は必ずしも短歌に限らないかも知れないが、短歌の創作がその最も有力な方法であることはここ十年の合宿教室の経験によって、確信を持って断言することができる。

合宿教室の三日目、阿蘇登山の日程の前一時間を割いて、国民文化研究会の山田輝彦会員によって、短歌創作の導入講義が行われた。ここに収録された作品は、大部分は初心者の第一回目の創作である。技巧が幼稚であるとか、発想が類型的であるとかという批判はいくらでも出るであろう。しかし、われわれの意図は、そこで個人的な「芸術」を作ってもらうことではなく、日本人の情意の原型でもあり、源泉でもあった「うた」の創作を通じて、「人の心」の問題と正面からとり組んで貰うことであった。心が素直に表現された歌は、技巧をこえて「うつくしい」と人々から実感された。上手な歌でも虚偽や誇張があると、班別討論で容赦なく指摘された。そういう「勉強」を通じて、論理の迂路を経ずして人間同士が了解し合える世界があることを経験的に知ることができた。そこから何が生れるかは今後の問題であるにしても。

短歌詠草（しきしまの道）

第一班

長崎大　西田伸二

真剣に生きゆくことの苦しさを師の言葉よりひしと感じぬ

東北大　河合忠雄

岡先生への質問の折に

語気強き師の御言葉に驚きてゆるみし心ひきしまりけり

福岡大　大熊信久

父母が支へきたりしこの日本心うれしくほこりに思ふ

神奈川大　森本誠司

人間のいとなみすべてはかなしと大きなる阿蘇の山みて思ふ

専修大　堀之内耕司

吹く風に流れし汗はかわきゆきさやかなりけり頂きに立てば

九州大　広瀬将徳

けむり噴く火口に深くたぎりゐるあつき生命を我持たまほし

熊本大　曽根田満

火の山のけむりたなびく彼方をば見つつしのばむ古き日本を

九州大　吉田哲太郎

友どちに思ひのたけを語らむと力をこめて胸に誓ひし

集ひ来て再び別るる友どちと人の誠を語りあかさむ

九州歯科大　小田展生

深夜まで語り明かせし友どちと別るる事にさびしさ覚ゆ

今日を限りに別れゆく友と手を握りまた来年と心に誓ふ

玉川大　青木常泰

人生を裸になって語り得ず班の友らにすまなく思ふ

第二班

鹿児島大　玉田末信

大阿蘇は小さき我に噴煙を怒れるごとくふきつけにけり

玉川大　松岡康生

阿蘇の山バスの登りし後方にかすみて見ゆるは我が宿舎なり

法政大　田村平八

親子牛いつのまにやらそばにきてたはむるる姿見ればうれしき

大分大　藤戸清澄

質疑応答の折に

友達のしられしことを他のごとく笑ひし後の恥しきかな

明星大　斎藤茂

阿蘇の空今日も澄みゐて帰りゆく胸に消えざる楽しさのあり

上智大　北崎伸一

木下先生の御講話を聞きて

祈るごとき思ひをこめて先生は声をつまらせ話したまふか

民草の一葉一葉の身の上に思ひはせらるるみ心かしこし

岡山大　湯浅保

雄大な火口を見ればわが胸の悩みもいつか消

えてゆくなり

第三班

九州歯科大　深　水　康　寛

わがなやみ言はむと思へど思ふごと言葉にならずもどかしきか

拓殖大　加　藤　茂　男

草千里の沢に浸りし牛たちを空から見下す阿蘇えぼし岳

九州大　藤　井　清　孝

ひたすらに我が魂を正す師よ両の目がしらあつくなりたり

玉川大　福　岡　英　一

草千里歩く親馬ゆつくりとふり返りみる子馬の姿

一橋大　黒　岩　良　樹

整ひし言の葉よりも心より出づる言葉に友うなづけり

木下先生の御講話を聞きて

こみ上ぐる涙こらへて聞き入れば語りたまふ師の声ぞつまれる

法政大　猪　股　文　彦

班別討論にて

わがおもひのぶる言葉のたりなさに汗のたまりし手をにぎりしむ

長崎大　本　田　　栄

バスの中にて

しみじみと友の歌へる民謡を聴きつゝ我も口ずさみたし

京都大　財　津　順　一

旧道を籠を背にして登りゆく荷や重からむ老いし村人

鹿児島大　金　津　洋　雄

合宿に来た母の手紙を読んで

合宿で何かつかめと書き給ふ母のことばに涙こぼるる

第四班

玉川大　岩　垣　博　士

師の口よりほとばしりいづる御言葉にわが胸燃ゆる心地するなり

岡山大　田　中　輝　和

参加者自由発言の折に

如何にして思ひのたけを述べむかと思へど言葉はつきはてにけり

亜細亜大　新　井　修　身

合宿にて何かつかまむと思へどもいまだつかめずすなほならぬか

鹿児島大　岡　本　幸　信

自由発言を聞きて

友どちの堅き決意を聞くにつけ我にも自信のわく思ひする

長崎大　熊　本　　司

吉田松陰先生の和歌を友と詠じて

先生の親思はれし御言葉にわがふるさとの父母をしのびぬ

皇学館大　小　串　芳　夫

ねむらじとわれみづからをいましめてねむりとたゝかひ講義きくなり

早稲田大　藤　井　　貢

麦わらに下駄ばき姿の友人の顔一杯の笑みに答ふる

九州大　江　頭　啓　介

思はざりき理知の世界のその奥にまごころといふまことのあるを

東京大　加　来　至　誠

地を鳴らし煙ふき上ぐる大阿蘇の火口の縁に我は今立つ

第五班

上智大　飯　白　誠　一

小田村先生の御言葉を聞きて

壇上に立ちし我師の言の葉に胸のつまりてじつと見入れる

鹿児島大　松　木　　昭

親ならむ牛のかたはらによりそひて子牛は無心に草をはみたる

鹿児島大　相　徳　和　義

とつとつと述ぶる言の葉真剣に聞きし友らに頭下がりぬ

亜細亜大　荒　平　　裕

国おもひ真心こめて語りたまふ吾が師の姿永久に忘れじ

法　政　大　小　川　洋　司

木下先生の御講話をおききして民思ふ君の御話うかがひつつ涙こらへて胸のつまりぬ

早稲田大　古　川　　忠

高校時代共に学びたる石村君が、心をつくして働ける様を見て壇上に立ちて指揮せる我が友の強き姿に心打たれぬ

福　岡　大　久　保　文　剛

むせかへる硫黄煙はく火口底わが足下にひびきつづくる

長　崎　大　北　村　好　信

美しき我が友どちのまなざしは弱きおのれの力とならん

第六班

上　智　大　山　口　良　男

まごころをこめてかたれば我が友の心と心ふれあふをおぼゆ

西南学院大　国　平　与四雄

広き野でのんびり暮らす子牛等と別れゆく時は寂しかりけり

九州工業大　末　次　義　明

心なくも岩ばかりなる山道の小さき草を踏みたおしけり

東北大　岸　本　洋　一

合宿で感じし気持いつまでも心に留めて強く生きたし

長　崎　大　犬　塚　博　英

師の言葉胸にたたみて帰りゆく我が学舎に何が待つらむ

大　分　大　首　藤　公　明

阿蘇山に集い来たりし我が友と明日の祖国の夢を語らむ

早稲田大　片　山　　裕

今こそは二度と得られぬ時なりと師の声聞きゐる友の姿きびし

西南学院大　小　野　吉　宣

ひたむきに語れどいよよ我言葉うつろにひびくか友の心に

時として友の心にふるるとき救はれしごとうれしかりけり

早稲田大　原　川　猛　雄

群がれる白雲あまた青空に速舟の如く走りゆくなり

九　州　大　中　原　誠　男

地の底に絶ゆることなく鳴りひびく大地の命力強きかな

第七班

亜細亜大　牛ノ浜　和　人

うつたふる師の言の葉のきびしさに若き日の父ふと浮び来ぬ

明　星　大　楠　本　達　士

緑なす阿蘇の山辺にうち集ひ日本の心かみしむるかな

長　崎　大　久　留　島　　学

空洞化されし言葉をうちくだく努力すべしと心むちうつ

九　州　大　木　村　俊　夫

真心を熱をこめて語る師の一きわ強き顔の輝き

鹿児島大　米倉秀一

心からいでし言葉でいひはなてといふ我が師の教へたふとかりけり

早稲田大　北原賢三

生涯の友得たるこの喜びを胸にいだきて阿蘇をくだるも

一橋大　北川文雄

小林至君の発言を聞きて

乱れたる学園の様をたださむと力尽ししと友は語りぬ

大学に入りしだかりの友どちの雄々しき姿に心うたれぬ

山口大　合志栄一

数々の思ひとともにすぎし日々静かに思へば心うれしも

大分大　浦崎貞治

振り返りみれば短き五日なれど我が得しものは限りなしと思ふ

皇学館大　白江恒夫

時をりは言ひ放つごとく述べ給ふ師の言の葉は胸に迫り来ぬ

第八班

熊本大　福永好紀

紺碧にひかりかがやく夏空に白雲はきだす阿蘇の御山は

防衛大　矢野進

中岳の噴き上ぐる風に挑むごと噴煙の中に若人は立つ

慶応大　小川章

大阿蘇で学びしことを故郷に帰りて我は友に語らむ

早稲田大　西山芳克

友どちのわれを見つむるまなざしはよく語らねど我が胸を打つ

福岡教育大　広修治

ひたすらにそのかみしのぶ慰霊祭静けさの中に夜はふけゆく

長崎大　田中日出治

うた一首つくる苦しさを語られし師のきびしさに心いましむ

拓殖大　松浦伯郎

我来たり草千里見れば青き空緑の草よいはむすべなし

亜細亜大　石川俊男

実感を大事にせよと述べ給ふ師の御言葉をつねに忘れじ

長崎大　佐藤健治

ともすればくじけがちなる己をば正しゆかむと友の語らふ

学舎での苦しきことのくさぐさをのぶる姿に胸を打たるる

第九班

東京大　伊藤哲朗

慰霊祭にて

祭壇の前にみうたをよみたまふ師のみ姿のかがり火にはゆ

読みあぐるみうたの言葉たどりつつ一声一声耳澄まし聞きぬ

玉川大　橘国太郎

集ひこし若人の心あふれくる泉のごとくすみわたりけり

熊本大　松田信一郎

木下道雄先生の御講話をお聞きして

こころこもる師の言の葉のうるはしく時のたつのも気づかざりけり

まごころのあふるるばかりの御言葉に心うたれて胸あつくなりぬ

亜細亜大　綿引芳行

草千里広ごる緑見わたせばそのすがしさに心ひかるる

鹿児島大　畠中宗一

心よりあふるる友の言の葉は身にしみにけりしみじみとして

明星大　山本晴生

木下先生の御講話を聞きつつこみ上ぐる涙こらへて講話聞く手に取る筆もすすまざりけり

神戸大　和泉俊郎

友と離れてくだれば阿蘇は風吹きて寂寥たる思ひあふれくるなり

九州大　前原寿延

日をふるにつれて触れ合ふ友の心苦しき討論実りそめしか

長崎大　松脇長友

木下先生の御講話を聞きて

天皇に忠誠尽くす美しさこれぞまことの真心なりき

福岡大　安西健二郎

凄まじく吹き上げて来る噴煙に足すくむほどの思ひするなり

真心をこめて話さるる言の葉に胸つまりきて涙こみ上ぐ

第十班

長崎大　白石肇

つまりたる胸の思ひをのべゆけば友皆われをじっとみつむる

亜細亜大　野地純一

友どちに声かけられてみなほせばなつかしき顔に心はなごむ

九州大　今泉勉

真心の深き言葉に胸打たれわが人生の糧とするなり

大分大　玉ノ井順次

知らざりし友と人の世語る時のこのうれしさを語るすべなし

早稲田大　中道彦

人の世を淋しきものと思ひける心なごます阿蘇の合宿

東京大　広瀬豊

就寝前庭に出て

一日の日程を終へ友どちと庭に降り立ち星を眺むる

東京の空には見えぬ天の川を澄みたる阿蘇の夜空に見出す

天の川はさみて白く輝ける七夕の星ひときは明し

伝説をおのづと思ひ起したり頭上に並ぶ七夕の星

○

苦しげにうつむきながら語る友の一語一語に心こもれり

福岡教育大　小林至

話されるその言の葉に先生の命こもりて心ゆらぎぬ

鹿児島大　前田芳和

をちこちゆ集ひ来たりし学友と話しは尽きぬ阿蘇山の夜

亜細亜大　松浦秀昭

寝むられぬ夜の暑さに抜け出でて空を仰げば星の輝く

皇学館大　田崎正夫

たのもしき友と語れば今までの憂ひもすべて晴るる気のする

第十一班

玉川大　会沢二郎

やはらかに緑広ごる草千里むれ遊ぶ馬を見ればたのしき

明治大　中村敏幸

木下先生の御講話を聞きて
大君の大御心を胸に秘め我は尽さん御国のために
日本大　岸本常男

合宿にのぞめる姿勢の誤まりを叱り給ひし言葉忘れじ
京都大　根木昭

汗ながし登りし阿蘇のいたゞきで始めて知りぬ友とのつながり
九州大　稲永隆

木下先生のお話を伺つて
声つまらせて天皇のこころ語らるる師の言の葉に胸のつまりぬ
大分大　楷木康文

阿蘇の合宿を終へて
晴れわたる夏空のもと心晴れいざ帰りなむわがふるさとへ
西南学院大　宮崎洋一

まごころを大切にせよといふ師のみ言葉にはげしくゆるる我心かな
鹿児島大　定栄安治

うつむいて面を上げぬ友を見て共に語らむと吾は言ふなり
友達のみな顔上げて語らへばみなの面は輝きを増す
九州大　前田秀一郎

とどろきて吹き上がりたる噴煙のするどきにおひわが鼻をつく
巨大なる火口の底ゆわき出でし噴煙やがて雲と連なる
慰霊祭にて
星空にかがり火さえてしめやかに慰霊の祭は行はれゆく
日の本のためにたふれし御霊にて我守らるるを知りてうれしき
けふよりは留めをかれし御魂をば我うけつぎて強く生きたし
長崎大　岸川守

学園正常化運動の禍中にありて
たたかひに傷つきたほるる友みつつなほたたかひつづけむ力つくして
大学を正常化せむと働けどわれの不孝を如何にわぶべき

第十二班

山口大　諫山勗武

火の山のけぶりは白く広ごりて果てなき雲居に連なり昇りつ
玉川大　木村秀雄

合宿を終へて
おさへてもおさへてもまた溢れでる熱き思ひのみなぎるを覚ゆ
法政大　木村高志

班長さんごくろうさまと頭さげ思はずむせび声のつまりぬ
防衛大　小林正男

外輪の山の連らなり太平の海の広さを我に想はす
熊本大　岡田朋久

感動の心のままに語りかくる班長の目をわれは見つむる
長崎大　中村英司

こくこくと別離の時はせまれども心のきずなの強く身にしむ
名古屋工大　江副正信

来年は期待に応ふる人となりて必ず来むと心に誓ふ
この仲間またあふことをねがひつつ一人々々の顔を見てゆく
鹿児島大　藤田彰

いかばかり狭き心か我を思ふ友のいましめを憎む我が身は

九州大　小柳左門

霊祭ると庭におり立ち見あぐればすみたる空に星は輝く

星満つる阿蘇高原にみおやらの霊をまつらむ時とはなりぬ

霧島の山に集ひし友どちと霊祭りしゆ一年は経ぬ

雷のとどろく中に霊祭るわざはせしかも去年の夏は

みおやらのみ霊は来ませみ友らと祭をせむと定めし野辺に

ますらをのかなしきいのちと歌ひたまふみ声は庭にひびきわたりぬ

かがり火に照らし出されたる祭壇に向ひて歌ひたまふみ声清しき

祭文を読みあげたまふ師の君の言の葉強く胸に迫り来

一橋大　鈴木茂臣

ときどきは訪ねて来るべし阿蘇の山この数日を思ひ起こさん

第十三班

九州大　成清一臣

草原に遊べる子牛道に出でて我が乗りしバスしばし止まる

亜細亜大　末広潤二郎

合宿へむかひし時よりなほおほく胸ふくらまし家路に向かふ

熊本大　古本守

ふみしめて阿蘇を登ればあらたなる力わき出で心地よきかな

東京大　小田村初男

誠なる心のふれあひ求めむと集ひし友の言の葉美し

長崎大　木下文雄

話し聞く心のすなほならざりしその誤りに今気付きたり

一橋大　都倉裕二

みわたせばはるかにつづく山のみねききしにまさる阿蘇の雄姿よ

皇学館大　尾崎俊樹

我が思ひ決意新たに帰りなば真の道は開かれゆかん

防衛大　太田文雄

木下先生の御講話を聞きて

艦上にただお一人で手を振らるる陛下の御姿まぶたに浮びぬ

大君と民との心の触れあひに感きはまりて涙あふれぬ

ふと見ればとなりにすはりし友どちも涙おさへてむせびをるなり

工学院大　大沼二郎

阿蘇の山見つつ得たりしこの心いついつまでも忘れじと思ふ

第十四班

富山大　浜岸悦生

すめらぎの国民思ふ御心を偲びて涙押へかねつも

我がむねにこみあげてくるよろこびは明日より我の力とならむ

九州産業大　松尾昭義

草原の緑広ごる高原に遠くに見ゆる赤牛の群

玉川大　姫野道夫

大阿蘇の広きすそ野のかすみたるかなたにわれの宿も見ゆるなり

鹿児島大　西谷敏明

とつとつと語りし友の言の葉は別れし後も我は忘れじ

大分大　江畑守勇

岡先生御夫妻とお会ひして

老いし師に会ふ日ありやと思ひしをここにまみえぬありがたきかな

老いし師と話したけれど勇気なく言の葉知らぬ我のもどかし

母のごと声よせらるる奥様のその言の葉に心なごみぬ

九州大　諸　富　隆　文

感動を我求めんと思へどもすなほにならぬ心苦しも

香川大　松　井　洋　一

さはやかな緑と水の草原に立ちて想ひぬわれらがつとめを

防衛大　中　野　哲　理

二十年を積み重ねしはずの我が思ひたちまちにしてもろくも崩れたり

長崎大　草　場　正次郎

コンパの折、太田君のフルートの演奏を聞く

静かなる大き広間はただひとつ心にひびくフルートの音（おと）

明星大　坂　本　貞　治

合宿に来りて学びしこのみちは心定めて進む道なり

第十五班

拓殖大　岡　田　正　栄

友どちにそれは危険だと注意されし師の御言葉の深きを思ふ

神戸大　安　藤　幹　雄

友の姿を見付けえずして

今年こそ語らむとして来しものを君が姿の見えずさびしき

富山大　山　田　滋

紛争の事どもありて友どちの集ひ来れざりしがさびしかりけり

熊本大　荒　川　正

雄大な阿蘇の大地に我を忘れ乱れたる世界も遠くおぼゆる

鹿児島大　吉　井　右

みめぐみ深き大君のみ心知らずして大和心をなどか知るべき

明星大　松　岡　達　雄

中岳の火口近くになるにつれ無気味な音に身のしまりけり

長崎大　近　藤　史　郎

わが思ひ秘めたるままに別るるを今になってはくやしと思ふ

九州大　井　上　敏　勝

先生の説かるる言葉のきびしさに思はずはっと師の目みつめたり

京都大　宮　脇　新太郎

我が暗き心を照らす温かき師のみ言葉は有難きかな

第十六班

上智大　津　下　有　道

長内先生の意見発表をお聞きして

大学はつぶれて良しとくり返しうったへられし言葉強しも

早稲田大　古　賀　勝次郎

火の国の阿蘇の夏山ゆたかなり赤黒き岩はだ緑の草原

神戸大　田　中　賢　治

別れゆく前の日の夜にやうやくに友とうちとけ心開かる

大分大　工　藤　謙　二

忘れたる幼き頃の無心さに吾の生く道を見つけ出せり

慶応大　大　西　利　勝

しづかなるみどりの原にすゞ風の吹けどもさびしきみの居ぬ日は

法政大　古　山　俊　昭

阿蘇山の合宿に来て人間の心の尊さをあらためて知る

九州大　武富賢二

友どちの強き言葉はせまりきて新しき生命を我に知らしむ

長崎大　浜田敏和

参加者自由発言のときの福教大小林君の発言を聞きて

孤立するをおそれず起ちて学園を正しくせむとの御言葉ひびきぬ

佐賀大　松田敏男

風吹けば草の香りの鼻をつく別れがたきは阿蘇の野辺なり

長崎大　根岸雄幸

溶岩の意外に思ふぬくもりに窮みなき大地のいのちを感じぬ

第十七班

東京大　青山直幸

小田村先生の御講義をお聞きして

一点を見つめたまひて述べらるる師のみ姿のせまりくるかも

○

新しき友としみじみ語りつつ阿蘇の山辺を登りゆきけり

北九州大　阿比留一馬

萬世に語り伝へよ大けむり大和男児の心の和歌を

明治大　広下博仁

戯むるる我が子を前に目を細め母親牛は草をはみをり

九州大　安藤文英

木下先生がつまさき立ったまま

お話しになつたと聞いて

師の君はつまさき立ちて語れりと知りし時また胸のこみあぐ

○

合宿を終へるにあたつて

ながむれば今さら目にしむみどり葉のすがすがしきは我がこころなり

東海大　松本洋治

本物の学問せむと集ひこし友の姿のたのもしかりけり

日本大　岡野滋樹

小田村先生の最後の御話を聞いて

浅薄な意見を述べし我が胸に師のいましめのつきささりけり

言の葉をだいじにせよといましめらるる師の御話の心にせまる

かみしめていひさとすごと述べ給ふ師の顔みられずじっとうつむく

明星大　鹿島正二

何かしらこみあげてくるこの思ひ大御心の身にしみわたりて

神戸大　足立哲朗

小柳先生の御講義をお聞きして

霧島の去年に続きて今年また心にしみいる言葉なりけり

長崎大　宇都宮俊徳

天皇の民思ふ心に触れし時日本の国の美しさを知る

第十八班

福岡大　石田憲作

初めての歌をよまむと思案して指折り数へ口ずさむ友

大分大　池松真善

露深き草千里浜をのびやかにあゆみゆくなり放牧の馬

長崎大　椛島有三

緑なすすそ野のかなたながむれば白煙のうづ空をこめたり

早稲田大　山口秀範

木下先生のお話を聞きて

これのみは若人達に伝へむと声震はしつつ語りたまひぬ
天皇の御心語る師の言葉いつまでも居て聞きたしと思ふ
天皇の御心偲び師と友と力をあはせ日の本守らむ

鹿児島大　中　西　達　夫

草千里草をはみける大牛に近付き見ればひとみつぶらなり

九州大　小　松　礼　三

あかぐろくおほきくくさきものなれどうしどしなればまたあいらしき

一橋大　相　馬　教　道

米塚に雨よ降りて溜まれかしわれはひたりて阿蘇をながめむ

花園大　山　口　順　生

木下先生の講義を聞きて感じしこと

まごころで感謝を述ぶる司会者の声もふるへて我が胸をうつ

法政大　岩　田　博　行

やうやくに心一つになりし友との別れせまるはかなしかりけり

玉川大　池　上　秀　男

青空に雲は流るゝ阿蘇の山仰ぎて思ふ我れら同胞

第十九班

大分大　野　田　清　文

みづうみに足を浸せばおのづから牛も暑さをわするるごとし

神戸大　渡　辺　郁　夫

ひぐらしの声しみわたる森の中の小さな社に一度登りたし

熊本大　永　井　幸　男

中岳にのぼりてみれば雄大な外輪山の峰つづく見ゆ

早稲田大　山　本　之　聞

合宿の最後の日なり朝日受けて朝礼に立てば身のひきしまる

長崎大　岩　永　道　雄

木下先生のお話を聞きて

天皇を涙ながらに話さるる師をみて涙あふれいでたり

終戦の大御心を今知りて想はず吾れは涙おとしぬ

早稲田大　広　瀬　清　治

試験終へあせる心をおさへつつやうやく阿蘇に吾は着きけり

受付もまばらになれるその中に友の声かけ我を迎ふる

拓殖大　中　山　正

中岳に登りてながむる噴火口まさに神秘の姿なりけり

九州大　中　山　真　一

大阿蘇の煙よ強く燃えあがれ二十才むかふる希望をのせて

山口大　山　根　博　文

友どちの何か言はむとする心わが心にも似し思ひあり

防衛大　徳　田　佳　雄

わが友は隣に筆を動かせど思ひは我と同じなるらむ

第二十班

玉川大　森　山　新

自らの為すべきつとめ忘れめやこの一時にいのち活かさむ

大分大　田　中　知

世の中の人と住みかは変はれどもうけつぎゆかむ大和魂

法政大　石　橋　竹　敏

岡先生のお言葉を聞きて

戦ひにたをれし者はこの世にて生きていますと師はのたまひし

亜細亜大　木　村　文　夫

煙たつ阿蘇にのぼればわが心空の高きに舞ひあがるかな

山口大　中　島　敏　昭

わだかまり残りしところをさらけだし語りしときよ忘るることなし

早稲田大　土　田　健次郎

別れがたき時近づきてわれはいまはじめて知りぬ師の御心を

防衛大　加賀爪　俊　秀

今の世の乱るる学園を正さむと呼びかひつどひし我らますらを

鹿児島大　東中野　修

ことば足りずたづねし我に心こめ答へし友はありがたきかな

北九州大　前　田　孝　和

友の祖国につくす強い意志を聞きて

吾が友の発言きけば戦はむ決意あらたなり胸もせまりて

第二十一班

九州大　久々宮　章

最後の班別討論にて

ほんとうにきてよかったと語りたる友のまなこに涙あふるる

鹿児島大　福　沢　一

まごころをスローガンにはするなよとの師のみ言葉のいたく身にしむ

中央大　田　所　健

おろかなるわれ友どもを導かんとりきみをりたることはづかしき

友どものすなほに述ぶる言葉にもわれの気づかぬ事多くして

長崎大　北　村　正　則

別れにとカメラの前に肩を寄せし今日の思ひ胸に留めん

熊本商大　松　永　裕　彦

阿蘇山につらなる雲を見つゝおもふすぎし日のこと今日の日のこと

長崎大　松　村　隆

岡先生の御言葉を聞きて

「人間の美しい死に方をさがしなさい」といはれし先生の御言葉たふとし

岡山大　納　所　実

岡先生と長内先輩

先生と握手したまふ先輩の姿を見れば涙浮ぶも

明治大　舛　田　治　世

白煙の湧き出る山にたたずめば神の怒りにふるるおもひす

早稲田大　牛　嶋　徳太朗

師の言葉誠たらざる心には天声のごとく響きたりけり

玉川大　川　尻　博　宣

うらやまし遠くひろごる千里が原に無心で草はむ牛馬のむれ

第二十二班

日本大　松　下　昭

敷島の道の姿はかくあると説く師の真心に心うたるる

早稲田大　斎　藤　英　俊

みんなみのひごの国原美しきすめらみくにはゆめくづすまじ

西南大　青　木　徹

はてしなく緑広ごる阿蘇の野に濁世のあかを落とさんと思ふ

山口大　木原哲典

輪読にて松陰先生の歌を読んで
ひたすらに国思はるる御歌は我が心をば強くゆさぶる

熊本大　加藤和彦

天皇は朝夕民を思はるると知りて我が胸あつくなりぬる

明星大　藤沢史人

宿につき去年の友を見出して思はず手を取ればなつかしさこみあぐ

亜細亜大　加藤伸吾

阿蘇山の深き緑に思ひよせ清き人となりたしと思ふ

皇学館大　吉田真一

和歌読みて気づきし事は言葉をあまりに知らぬ我が身なりけり

京都大　小山淳郎

表はせぬ胸の思ひに絶句する友の瞳に涙光れり

早稲田大　斎藤実

力強き筆の運びを偲ばするポスターのあり道の角々に
友どちの書き給ひたるポスターは色うすれたれど厳と立ちをり

上智大　宮城真

けぶり立つ阿蘇の姿は神々のいぶきつたふるしるしなりけり

第二十三班

埼玉大　高橋勝男

木下先生の御講話を聞きて
日の本の天皇（すめらみこと）のみすがたを涙ながらに語りたまへり

大分大　衛藤晟一

大君の吾れらを思はるる御心をはじめて知りて涙あふれけり

福岡大　大野治憲

雄大なる阿蘇連峰を仰ぎ見てこの美しさを母に見せたや

早稲田大　阿曽義男

慰霊祭で「海ゆかば」を歌ふ
闇深き祭りの庭に歌ひゆくますらをの歌天にとどけよ

玉川大　石橋哲成

杖を捨てて自分で立てよと諭（さと）しゆく師の言の葉に襟を正しぬ

九州大　大木俊光

山はだのみどりの色は心地よく群がる牛馬の姿も楽し

亜細亜大　川越一男

さりげなく話しかけたる言の葉に友の心を強く偲びぬ

亜細亜大　吉田慎一

秋立てる阿蘇の山には霧こめて朝目覚むればせみの声する

明治大　豊島典雄

勇気ある友の言葉をききて
学び舎の命護れと訴ふる君の言の葉強くひびけり
思ひ述べ演壇下る後姿に湧きあがりけり強き拍手は

○

マッカーサーとの会見における陛下の御話を聞きて

我が身捨て民救はんとの一念に心うたれけむ敵将すらも

神戸大　合志洋一

み友らのつどひうれしも日の本のこころにふれて涙あふるる

第二十四班

長崎大　森永みち子

全体意見発表をききて

壇上で言葉多くは言はねども我心には深くしみいりぬ

慶応大　小泉明子

木下先生の御講義をお聞きしながら

日の本はかくありけりと語らるる師の言の葉に心ふるへたり

桜美林大　中沢ひろ美

先生のこころこめたるみことばに思はず我は姿勢を正せり

玉川大　今滝須美子

大演習の帰途、戦艦榛名艦上にて

遠く沿岸に見送る民に敬礼されし

といふ天皇の御話をききて

暗闇の中にお一人立ちたまふ民のかかげし火は見えねども

暗闇に敬礼なされし天皇の民おもはるる御心あつし

福岡教育大　河崎富慈子

野の風にゆれるすみれの花の如くすなほになりたき我心かな

岡山大　中川登紀子

真剣に生きんといひし友の声にあたたかきもの胸にこみあぐ

大阪外国語大　山本美知子

言の葉の中にこめられしまごころに触るることのむづかしさを知る

長崎大　江口篤子

今ぞ思ふ我が言の葉も行動もすべて他人の支へなりしを

熊本短期大　甲斐千恵子

木下先生の御話しの折に

大君の御言葉静かに述べ給ふ師の御姿は涙でかすむ

青山学院女子短期大　小川実千代

岡先生のお話をお聞きして

日の本の女と生まれしこれの身はすみれのごとくゆかしくなりたし

第二十五班

鹿児島大　山本美織

恥ぢらいの心をもちてものを言ふ友の姿の美しきかな

玉川大　千葉麗子

合宿の講義を聞きて身にせまる古よりの道のけだかさ

岡山大　小田幾世

いささかの心構へもできぬまま参加せし事心苦しき

いたらねどあらん限りの力持て師の御言葉に答へたきもの

筑紫女学園高　北崎英子

岡先生の御講義を拝聴して

女性にはすみれの花のゆかしさをほしいといはれし言葉忘れじ

福岡教育大　早野洋子

全体発表を聴きて

今からはと一点見つめる友の顔決意に燃えてりりしく思ふ

奈良女子大　小山街子

イデオロギーの前に人の心ありと師はわれわれに訴へたまふ

熱こもる声なほ残るわが目にはポプラの緑強く浸み入る

長崎大　真名井節子

木下先生のお話に

大君の心のうちはいかばかりとこみあぐる涙おさへかねつつ

京都女子大　柴田和子

天皇の国民思ふ御心に触れたることに胸をうたるる

長崎大　加治木かおる

全体意見発表の折に

何かしら心に迫るものありておもはず挙げし我手なりけり

我が心整理つかぬままに昇りたりただ何事か言はまほしくて

第三十一班

熊本県人吉市立第二中学校　永井陸雄

心かよふ友どちこぞり大阿蘇に登りし今日を忘れじと思ふ

熊本市立竜南中学校　成松一生

朝霧のしづかにはれて大阿蘇の外輪の緑遠く広ごる

熊本市立白川中学校　西村　淳

此の子等は将来いかに生くべきか子等と共々考へゆかん

熊本県南関町立南関北中学校　村上圭介

合宿で語りあかせし吾が友は決意あらたに帰りゆくなり

熊本市立竜南中学校　中尾　晃

見上ぐれば大阿蘇の山雄然と雲は流れて我を迎ふる

八代市立第五中学校　田浦政義

こころこめてつどひし友等と語るとき己の非力を痛く感じぬ

熊本県人吉市立第二中学校　小松　正

火口壁這ひのぼりくる噴煙のたちまちにわが視野を閉ざせり

生命たぎつ音と聞きをり太古より鳴る大阿蘇の火口に立ちて

熊本県阿蘇町立春牧中学校　塚本武美

カナカナの声ひとしきり山あひに聞きて暑き日暮れなんとする

第三十二班

熊本県人吉市立第一中学校　吉村　安

木下先生の御講義を拝聴して

大君の民思ふ心まなびたるこのよろこびを胸にとどめむ

熊本市立藤園中学校　田口省一

見はるかす外輪の尾根につらなりて九重の山は秋雲にそびゆ

熊本県長洲町立腹栄中学校　竹本　繁

先生の誠意こもれる講演に思はず我の心開けたり

熊本県菊鹿町立城北中学校　永田一吉

木下先生の御講義をききて

むねにせまり涙ながらに師も我も時を忘れてすごししひとときに

八代市立第四中学校　橋本正臣

小田村先生の御講義をききて

身を挺し国の行末語り給ふ先生の姿に力みなぎる

久留米市立荒木中学校　緒方　舳

講演を聞くたびごとにわが心みつめるきびしさ深くなりぬる

熊本市立東野中学校　大野昭雄

身を正し真心の道語り合ふ友の眼の輝きを見る

熊本県小国町立小国中学校　北里　功

この宿に集ひ来りて語り合ひなつかしき言葉聞きてうれしき

第三十三班

熊本市立江原中学校　林田　光

人の道もとめ来たりし合宿にわが身の無知を知りてはずかし

熊本県天水町立天水中学校　限部国和

山々の峯のつらなりながむれば故郷の子等を恋しく想ふ

久留米市立城南中学校　中村代基

山分(やまわけ)の起源(おこり)伝へし米塚のまろき姿は記憶に残

れり

熊本県植木町立吉松中学校　田　中　良之介

大阿蘇の火口の緑にたたずみて我を忘れてしばし眺めぬ

八代市立第六中学校　兼　丸　欣　一

噴煙に曇れる空のその隅に真白き雲のかがやきてあり

熊本市立藤園中学校　重　安　真　三

この道はいかに遠くあらんとも強き意心(こころ)で貫き通さん

熊本県人吉市立第一中学校　黒　川　淳　二

合宿の終りにさいして

今日よりは学びしことを心してわが教へ子に向はむと思ふ

第三十四班

八代市立代陽小学校　戸　田　市　治

合宿の実り多きを口口に語らひながら朝会に出づ

久留米市立西国分小学校　大　淵　房　雄

火の山の高くそびゆる姿みてふるい立つごとく強く胸はる

熊本市教育委員会　井　島　幹　明

同僚の熱意あふるる言の葉に時を忘れて我も聞き入る

熊本市立尾ノ上小学校　上　村　芳　輔

もくとうを捧げる中にますらをの残せし強きことば偲びぬ

熊本県阿蘇町立内牧小学校　吉　良　公　紀

雲間よりもれいづるただ一すじの光の中にうかぶ日の丸

熊本市立壺川小学校　内　田　実

朝もやの中にかがける日の丸を仰げばわれの心しまるも

熊本市立城北小学校　田　中　隆

大阿蘇のふところ深く集ひきて我らが道を共に求めつ

八代市立八代小学校　加世田　和　馬

赤々と燃えるかがり火見つめつつ靖国の兄に想ひをはせぬ

第三十五班

久留米市立鳥飼小学校　平　島　俊　之

合宿につどひきたりし人々の心たけきはたのもしきかな

熊本市立城山小学校　西　岡　静　雄

ますらをはかくありなんと煙立つ阿蘇の五岳に向かひてぞ立つ

熊本市立池田小学校　伊　藤　トキ

女子もまたともに歩みて語りあひ悔なき国を後に伝へむ

熊本県横島町立横島小学校　坂　梨　琴　寛

山路きて噴煙あふぎなき母と共に登りし昔なつかし

久留米市立西国分小学校　萩　尾　達　也

子供らのまつ学舎(まなびや)に帰途いそぐわれの心はよろこびに満つ

八代市立松高小学校　成　田　行　次

研修に出立つ我を見送りし病臥の妻のことば悲しも

熊本市立砂取小学校　前　川　信　行

かへりこぬ時ををしみて学ぶ師の真心にふれ心改む

熊本県小国町立下城小学校　元　主　健　一

先達の熱意わすれず今日よりは日々教育に取りくまんと思ふ

熊本市立健軍小学校　田　中　広

合宿に発つわが背(せな)に病む母の言ひし言葉の耳に残れり

第三十六班

熊本県一の宮町立宮地小学校　山　内　光　輝

ひのもとのまことのすがた見きはめむこの合宿を終へにしあとも

久留米市立御井小学校　金　子　祐　幸

一点をみつめてしばし黙したまふ師のみすがたに大君を偲ぶ

熊本市立託麻原小学校　萩　原　康　司

木下先生のお話をききて皇神の民しのばるる御心のあたたかくして涙こぼるる

熊本市立健軍小学校　宮　本　安　之

民おもふ大御心を偲びつゝ師のみ言葉に涙こぼるる

熊本市立中島小学校　田　中　準　一

床につき師の言の葉をかみしめて心たかまりねむさわするる

熊本県山鹿市立山鹿小学校　松　永　公　保

せつせつと教へ導く師の心胸に迫りて眼くもりぬ

熊本県菊水町立菊水中央小学校　後　藤　庄　一

いとし児を思ふ一筋に教へこしをこの合宿でたしかめてをり

熊本県深田村立深田小学校　福　島　清　爾

合宿で学びし事の数日をいかさんと思ふこの子らのため

第三十七班

熊本市立花園小学校　東　正　知

憂きことも楽しきことも今日よりは歌にのこして忘れじと思ふ

熊本市立池田小学校　菅　秀　隆

共に寝て語りあかせし合宿の最後の夜の心さびしき

熊本市立高平台小学校　川　上　久　雄

まなかひに気高き大君の御姿を拝するごとし情せきあへず

堂に満つる感動深くしずもりし師のおことばもしばしとぎれつ

熊本県阿蘇町立碧水小学校　井　沢　長　世

国思ふ真心けだかき師の君に心おのずと頭下がれり

久留米市立金丸小学校　吉　武　啓　治

やわはだのみどりの草原つらなりて千里が浜に赤き牛いこふ

八代市立高田小学校　金　橋　良　治

天皇の深きみ心ときたまふ師の言の葉しばしとぎれつ

第三十八班

熊本市立泉ヶ丘小学校　今　井　賢　次

歌よまむとあたりの景色見渡せど思ひは煙の如く消え去る

福岡県立朝倉高等学校　堺　修

母校の後輩六人と会つて白煙吐く大阿蘇のいただきに同じ学びやの友と逢ひけり

熊本県玉名市立豊水小学校　小　篠　一　郎

合宿で学びし事は吾が道の行先照らす光とならん

熊本県三加和町立緑小学校　白　木　敏　明

民思ふ天皇のみ心に今国民は立ち上がるべし

熊本県人吉市立人吉東小学校　西　橋　毅

世の中はまごころ持ちてみずからのつとめはたすに開けゆくべし

熊本市立託麻原小学校　北　原　孝

汗流し登りし上のいただきで昔の友と語るたのしさ

熊本県玉名市立八嘉小学校　上　原　浩　史

神代より大阿蘇の火のつづくごとまごころの火を我らともさん

第四十一班

明星大学理工学部助手　塩崎恵一

天皇のお心聞きておのづからありがたさにただ涙こぼるる

鹿児島興業信用組合　木村健三

友どちの心の奥をきはめんとその言の葉に耳を傾く

高千穂相互銀行　中牟田喜彦

いにしへの真の心聞きなむとただひたすらに友と語れり

中球磨林産開発㈲　三反田知行

老松の梢の繁り今もなほ千古の森の面かげ偲ばる

出光興産㈱　西川正弘

雄々しくも生きむとぞ思ふみ友らと阿蘇のふもとで学びし道を

高千穂相互銀行　小松弘明

知らざりし友と親しく語らふも今日で別れと思へばさびしき

高千穂相互銀行　西憲一

阿蘇の土を我踏みしめて思ふとき生きる歓び深く味はふ

西武青果総合食品㈱　宮本信

小田村先生のお話を聞きて

師の君のにじみ出る如き体験を聞きてしをればば涙流れぬ

㈱高田工業所　渡辺清俊

一人立ち阿蘇のすそのを望みをれば無限のおもひ我れに迫り来

第四十二班

吉川工業㈱　工藤昭久

師のみこえ血しをわくごと身に徹るこのよろこびをとはに忘れじ

鹿児島音楽文化協会　渡辺昌幸

草千里ひろごるみどりはてもなく人の小さきにたゞおどろきぬ

早稲田大学大学院　小沢善雄

阿蘇に来て雄々しき火口眺めつつ日本の危機を師の君と語る

小野田セメント㈱　荒川敏之

青空にもゆるみどりの山見ればおさなきころのふるさとしのばる

吉川工業㈱　西富士男

君は我我は君とぞ思はれて人の心の不思議さを思ふ

林兼造船㈱長崎造船所　五島一朗

我が胸にこみ上げてくる師の言葉この感激に合宿を去る

林兼造船㈱長崎造船所　谷川博亮

雄大な阿蘇に学びて帰るとき心は晴れてすがしかりけり

小野田セメント㈱　木佐木靖男

東京の空にくらべて星くづのきらめくさまの不思議なるかな

指揮班

東京大　石村善悟

溶岩の石をふみしめ登る背に涼しき風の吹き上げてきぬ

登り来て頂きに立てば友どちの手をふりながら登り来る見ゆ

長崎大　田中洋

もうもうと煙吹き上ぐる火口にて友と語れば風ここちよし

岡山大　菅志朗

すかさずに質問の言葉正しゆく師のみことばのひびきするどし

皇学館大　山脇敏夫

阿蘇山上にて偶然先輩とお会ひして

久々に伊勢を語りぬ諸共に宮居の森に参りたる日を

大学教官有志協議会

明星大学教授　奥田克己

いつしかに遠くきにけり草千里草を踏みつつ
語らひゆけば
ふたたびをここに立つ日のありやなしや雲流
れゆく阿蘇千里原

会友

世界経済調査会　清水茂子

かねてよりのぞみし集ひに参加して直かにう
かがふ教へのかづかづ
汗ふきつあへぎあへぎつ見あげたる嶺に今し
も上る黒けむり

国民文化研究会

亜細亜大学教授　夜久正雄

和歌批評

あやまりをしめして友は一首一首うた直しゆ
く心をこめて
言の葉のあやまり指摘さるゝごと聞き入るわ
れらわらひどよめく
しかすがにおそろしきかな若ものの歌のこと
ばのかく乱れたる
なほされてうたらしきうたとなる聞きてみな
感心す作者もしからむ
ひとのうたのあやまりはかくおのづからしら
るるものをおのれのうたは
おたがひにうたのあやまりたゞしつつなごむ
心よ何にたとへむ

宝辺商店社長　宝辺正久

火口底にとどろく音は何ならむかしこみ思ふ
地の底の音
噴煙の高きが夕日に輝きてみどり目にしむ草
千里浜

九州大学附属病院内科研修医　友池仁暢

二泊三日残りし日々を心こめ過さんと思ふこ
の高原に

福岡県立宇美商業高校教諭　小林国男

小田村先生御講義の後、前日徹夜してレ
ジメを書き給ひしと聞きて
さまざまの思ひこらして夜を徹し綴り給ひし
かこれの刷文（すりぶみ）
壇上に獅子吼し給ひしみ姿の思ひあらたに胸
せまるなり

電源開発㈱伊予電力所　長内俊平

合宿に出で立つ朝よ空は晴れ四国嶺しるく朝
日浴びゐつ
稲の葉の深き緑のひろごりて連なる峯の濃き
に続けり

岡先生に握手を求めて

師の君にみ手とらしてよと求むれば握らせた
まひき細きそのみ手
もろの掌（て）に師の手いだきつゝみ身（からだ）をいとはせ
給へと申し上げたり
「そのように致しますよ」とみ言葉を返し給
ひぬ肩かす我に

舞岡八幡宮宮司　関正臣

木下先生の御講話を承りて

雨の日もぬばたまの夜もみ民らを思ひ給へる
我がすめろぎは
自ら涙にじみて止らず我もみ民といふうれし
さに
日の本のみ民と生まれし喜びの涙あふれて止
らぬなり
満ち足らふこれの思ひをたゆみなくうつたへ
ゆかむまだ見ぬ人にも

亜細亜大学講師　倉前義男

見はるかす久住大野に矢の如く雷雨は迫る草
の葉を揺りて
草を喰む雄牛の背なに雨かかり風吹きすぎぬ
広き野中を

削ぎ立てる阿蘇外輪の山並みも雨にけぶりてさだかに見えず
青々と稲の葉しげる国中に陽はさしきたる雨あがるらし

新技術開発事業団管理部　野間口　行　正

松陰先生の留魂録を褌にかくし守りたる人を偲びて
師の文を守り抜きたるいさをしは文とともにぞわが胸にひゞく

神奈川県立横浜翠嵐高校教諭　国　武　忠　彦

阿蘇の地でとほき妻より便りあり思ひがけなくうれしかりけり
わが留守のこどものことが書いてあり読みゆくうちに笑ひだすなり

㈱富士銀行福岡支店　島　津　正　数

頂きの石に坐りて足伸ばしわづかばかりのくつろぎをとる

㈱千代田コンサルタント　上　村　和　男

合宿地へ向ふ
別府へて由布院をくれば車数少なくなりて山なみ美し
夕立の雨にぬれたる山なみは緑にはえて夕日沈みつ
まなかひに久住の山のつらなりて雄々しき姿美しく見ゆ

木下先生のお話を聞きて
目に見えぬものにも心をつくし給ふ大みこころの強く胸うつ
国民のことのみ思ひすぐさるる大君の心にこたへて生きなむ

熊本県嘉島中学校教諭　北　島　照　明

天地の息吹きあらはに噴煙は熔岩原をおほひ包みぬ
大分県国見町教委社会教育主事　三重野　悌次郎

あらがねの土をやぶりて噴き出づる煙はのぼりて雲とつらなる
馬もまた心通ふか親と仔の身を寄せ合ひて山の背に立つ

神奈川県立新城高校教諭　山　内　健　生

小田村先生の御講義を聞きて
獅子吼する師の御言葉のはげしさに思はず我は戦慄覚ゆ
マルキスト教授学者にこの国の歴史を論ずる資格なしといふ
かくまでもはげしく呼びかくる師の君の御姿深く心に残りぬ

神奈川県立横浜平沼高校教諭　福　田　忠　之

全体発表を聞きて
素直なる思ひを込めし若きらの語るを聞けば心苦しき
思ひこめたゞ一言をくりかへし立ちつくしたる乙女ありけり

中京コカコーラボトリング㈱　高　村　光　紀

六年ぶりの合宿に参加して
六年前集ひ来し友は見えずして寂しき思ひで合宿に入れり

国民文化研究会副理事長　浜　田　収二郎

ときにより力つきはて伏すわれをいだきたまへよ阿蘇の山々

日商岩井㈱広島支店　折　本　　求

山肌が緑ともゆる外輪に浮ぶ白雲美しきかななにげなき言葉のはしゞにこもりたる意味の深さに胸をうたるゝ

皇宮警察本部皇宮護衛官　亀　井　孝　之

たのしげに笑みうかべつゝ歩む子に吾子の姿を思ひうかべぬ

佐賀県武雄市会議員　毛　利　　潮

外輪山の太き輪の上に旧阿蘇はそそり立ちしか神のごとくに

近畿大学附属小学校教諭　堀　切　勝　之

明治天皇の御歌を拝して
同胞に寄せ給ひたる大君の御歌をよみてしば

し黙しぬ

熊本県立御船高校教諭　片　岡　　健

大阿蘇のえぼしのもとの草千里夏日のかげりて緑色濃し

はるかかなた草千里ヶ浜の行きつくところ夕日を受けし牛の群あり

熊本市経済部長　徳　永　正　己

緑こき田の面をわたるそよ風の阿蘇路を行けば心清しも

停車して道を横切る牛を待つバスの車窓に笑顔並べり

熊本県林務部林政課　瀬　上　安　正

いたどりのわづかに生ひて草といふ草は生ひざり阿蘇の神山

熔岩の山の背づたひ草も木も生えぬ神山今登り行く

草木の生ひざる峯の底ひには地鳴りもやまず煙吹き居り

白煙の立ち登りつつ大空の雲に連なりみ空おほへり

熊本市立竜南中学校教諭　松　浦　良　雄

我たちし教への庭をかへりみぬまことの心養ひ来しやと

岡山県立笠岡商業高校教諭　名　越二荒之助

山々は動かず風もおとなはず蝉の音降るごとなきしきるかな

ひとひらの雲夕まけて阿蘇が峯ゆ動きそめたり黄金色なして

天ざかる友らの魂もかへりてよ今宵われらが慰霊の集ひに

熊本県下益城郡砥用東中教頭　北　島　道　治

麓なる杉の林を登りきて阿蘇の眺望いよよ開くる

東京鋼鉄工業㈱浜松営業所　大　川　寿　雄

今まさに合宿の地へ思ひはせ我が乗るバスは遅しと思ふ

神奈川県箱根町立仙石原小教諭　岩　越　豊　雄

暮れがけの尾の上に雲のわきいでて夕日にかゞやき美しきかな

かゞやきて美しき雲いつのまにか消えさり行きて夕ぐれにけり

自由民主会館管理部　今　泉　重　郎

小田村理事長の最終講義をきゝて

まことある人の言葉はかざらねどいのちさながらわれにせまり来

「しきしまのやまと心はうつそみの目にはみえねど耳にきくべし」

かくのごとうたひたまひし大人（うし）のことばまことに感じぬけふの講義に

農林省林業試験場研究室　行　武　　潔

くぐもれる想ひ語らふ友だちとともに過すはたのしかりけり

己が身のわからざりきと我が想ひを言葉少なに述ぶる友もあり

短かかるひとときなれど友どちの一人一人の面輪忘れじ

日商岩井㈱海外統括課　沢　部　寿　孫

あらがねの底ゆたちまち白雲の如き煙の噴き上り来ぬ

いにしへの国生みのさましぬばるる遠く広ごるカルデラ見れば

山陽電軌㈱山口営業所長　加　藤　善　之

感動とは何かと問ふわが友の強きまなざし鋭かりけり

たゝみかけ如何がすべきと問ひかくる必死の友の声はきびしも

八代市助役　加　藤　敏　治

空晴れて東に雲はうつりつゝ阿蘇国原は夕まけんとす

夕もやにうす霞みつゝ頂は雲にかくろひ中岳の見ゆ

小泉明会計事務所長　小　泉　　明

窓辺ちかくにひときはたかくひぐらしの鳴く
声ありて夕べを知りぬ

都城市立庄内中学校教諭　坂東嘉美

まごころを養ひ育つべしといふ師のみことばの強くのこりぬ

岩波書店奈良六大寺大観編集部　梅田咲子

もやいまだうっすり残る庭に出で朝露踏めば足にすがしき

さはやかに今日も暮れたりと阿蘇山の噴煙静かにたなびくを見つ

野辺に咲くすみれにしのばるゝゆかしさを忘れず生くるわれにありたし

㈲こんや別館代表取締役　青砥宏一

熔岩のこごしきみちをなづみつゝ登るかたへに白き花咲く

やうやくにふみわけのぼれば頂きは涼し風吹きしばしいこひつ

火口近く近づきゆけば地の底ゆ地鳴りの音の聞えくるかも

安田信託銀行渋谷支店長　松吉基順

岡潔先生のご講義を聞きて

四年前み教へうけし師の君の変らぬ姿に心躍りぬ

天地のはじめといふは人の心かよひあひたるその時なりしと

今の世のたゞならぬさま嘆かるゝみ声きびしくひゞきわたれり

おのが身の至らぬことの今さらに思ひしられぬみ教へ聞きて

講義終わりて窓ゆ眺むる外輪の山はだ青く目にしみ入りぬ

窓の辺のポプラの梢伝はりて吹き入る風のさやかなるかな

兵庫県立姫路北高校教諭　伊藤三樹夫

広ごれる阿蘇の山すそみわたせばこころはろばろすみわたるかも

白きけむり湧き上りくる地の底にこもれる力をひたに感じぬ

熊本県立八代高校教諭　高瀬邦一

岩はだに赤みをおびし火の山をロープウェイのますぐにのぼる

八代市厚生会館事務局長　百崎素明

古の文読む友の声さやか己が心を洗い清めき

共同通信社論説委員　島田好衛

紛争の責任感ぜず立法反対のデモ行進するおぞの教授ら

ほろびゆくものほろばしめよしからずば大学改革は成らじとぞ思ふ

㈱講談社広告局　磯貝保博

夏草のみどり目にしむ山すそに草はむ牛ののどかなりけり

こころよき風にふかれて夏草のみどりを見れば心すがしも

富山県立福光高校教諭　岸本弘

自由発言の折、広瀬先生を偲びつゝ「記紀の古伝承」を読む

ふることを祈りこめつゝ語られし師の御姿の浮びくるなり

我が口にのりていづるは越路なる師の語られしそのしらべなり

三井石油化学工業㈱人事部　河原倫子

岡先生が女子班に来て下さつたときに

野に咲けるすみれのごとくゆかしさをそなへなさいと師はのたまひぬ

日本的情緒を語るがために生まれこしと厳しき面(おも)で師はのたまひぬ

東急建設㈱建築技術員　奥富修一

かうかうと陽は照りつゝも清らかに阿蘇の草原涼しかりけり

夏の陽に阿蘇の山肌あからみて固きいわをを踏みしめてゆく

鹿児島大学教授　川　井　修　治

夕陽かげかたぶきはててひぐらしの鳴く声しげき阿蘇の山里

たまきはる生命をこめて鳴く蝉の声は心に沁み入るごとし

福岡県八幡西高校教諭　村　田　英　雄

阿蘇火口皆に負けじ登りくれば冷き風の心地よきかな

福岡県立若松高校教諭　山　田　輝　彦

友

一とせに一たびあひてたまゆらにかはす笑まひよ友はなつかし

生きがたきうつし世にしてかゝる友持ち得しえにしわれは忘れじ

合宿

討論の席にもだして語らざる友よ昔はわれもかゝりき

窓近きポプラの群葉風立てばさわさわと鳴る潮騒のごと

若きらの討論の声さ夜ふけて叫ぶがごとく聞えくるかも

八幡製鉄㈱管理部　今　林　賢　郁

ま青なる夏のみ空のひろごる中に山の緑のいよよしるけし

地の底ゆふきあぐる噴煙のそのまゝに雲となるかの如くのぼりゆくなり

医　師　木　田　浩　隆

緑なす阿蘇谷遠く見下せば雲影しるく落ちて動かず

東京都関東高校教諭　井　上　佳　彦

小田村先生の御講義を聞きて

せつせつと国の危難をとかれゆく師の御言葉の胸にせまりく

班別討論

とつとつとおもひかたむけて語りをる友の言葉の胸にせまりく

佐賀県立佐賀工業高校教諭　末　次　祐　司

阿蘇山頂にて

進みゆく道はけはしくあらむとも守りてゆかむ美しき祖国(みくに)を

九州大学大学院・医師　田　村　潔

班別討論にて

わが胸の思ひを友に伝へまし心を開き心つくして

福岡県立修猷館高校教諭　小　柳　陽太郎

岡先生の御言葉をききて

人の話を正確に聞く心なき者とは語らず去れとのたまひし

弁解とおぼしき言葉はたまゆらも許すことなくしりぞけたまふ

身の毛もよだつおもひに聞きぬ師の君の火を吐くごとき強きみことば

富士学院教務部次長　加　部　隆　三

学び舎にありてたゝかふ若きらの雄叫びききて心しまりぬ

木下元待従次長のお話をききて

天皇があらしの中に若きらを観閲せられし話忘れじ

艦上に夜陰ひそかに立ちませるすめらみことのみ心かしこし

探照燈のとびかふさまに民草が喜こびあへりと聞くもかしこし

長崎県経済農協連　内　田　英　賢

ますぐなる心の人としみじみと語らひあふは楽しかりけり

理論家や小賢しき人多かれどますぐなる人はさらに少なし

賢きといはるる人よりますぐなる心根の人と我は起たなむ

国民文化研究会理事長　小田村　寅二郎

合宿教室に加はると不思議に「時」と「記憶」の感覚が異常となつてくる

はりつめし心のままに過ごし来れば三日の経過も瞬時のごとし

まぼろしの彼方のことのごとくしてさだかに浮び来ず初日のことども

拙なかるをのが心も極限に使ひつくされての記憶の薄らぎ

「時」経つも忘れつあとの印象の記憶も失せつたゞ「時」の経つ

もろびとと心交はしつ生くといふことのきびしさうつゝにこゝに

事務局

菅野テル

緑濃き山ふところにいだかれてこのうるはしき祖国を想ふ

熊本市役所　中山悦子

雄大な大阿蘇ながめ我がこころあまりに狭くなさけなくなりぬ

中津睿子

乳色の阿蘇の噴煙を仰ぎつつ故郷の母をおもひだしたり

福岡県立修猷館高校三年　松尾新子

山を背に風にはためく日の丸を我が心にも深くきざまむ

お茶の水女大付属高校一年　小田村和江

牛馬の我が物顔に歩きゆく後ろ姿はのどかなりけり

鹿児島県立甲南高校一年　川井治子

なつかしき旧知の友と再会し我を忘れぬ阿蘇の山辺に

福岡県立修猷館高校一年　西高辻信美

事務局の仕事を終えて友と二人コークのふたをあけるうれしさ

福岡市立城南中学校二年　小柳志乃夫

すさまじき音たてながらわきいづる白き噴煙天にのぼりぬ

小田村先生の御講義を聞きてお言葉の全ての意味はわからねど心は晴れて快きかな

（記録班）最高裁判所秘書課　西川伍朔

窓を被ふポプラの葉ずれサワサワと阿蘇の一夜は清(すが)しく明けぬ

（写真班）熊本大三年　高田允

阿蘇五岳のいつもながらの雄大さに我小さきことをただかへりみる

あとがき

雄大な阿蘇高原での四泊五日の合宿を終えた直後に、東京在住の国民文化研究会の若い世代である若い国文研グループによって例年のように阿蘇「合宿教室」感想文の編集会議がもたれた。

十月下旬には発行して出来る限り早い時期に参加者の皆さんのお手許に感想文集が届くようにと念願しつつ参加者の皆さんの原稿をたんねんに読み、正確に理解しようという作業から編集が始まりました。合宿終了直前のあわただしい雰囲気の中でまとめられた一枚、一枚の原稿を読んでいくうちに、あの厳しいスケジュールでの合宿のひとこまひとこまが鮮やかに思い出され、四人五人と編集者一同の手をまわるうちに阿蘇で合宿しているような錯覚さえ覚えさせられました。

編集にあたっては限られた紙数に参加者全員の感想文を掲載する関係で全文を掲載することは不可能なので筆者の真意が最もよく表われている個所をとり、その他を割愛させていただいた文章もあります。字の誤りは訂正しました。意味不明瞭な個所はそれこそ編集者一同が代わるがわる幾度も目を通して筆者の真意を吸みとろうと最善を尽くしました。もし筆者の真意が誤って述べられている個所があれば、それはひとえに編者の力不足の為であり、この点ご了承ください。

編集にあたった若い国文研グループには学校の先生、会社員もいます。皆それぞれの仕事を終えた後で、ある時は事務所に集まり、ある時は自宅で、その間、一泊二日および二泊三日の合宿を行なって作業にあたりました。

×　　×

この感想文集にもられた皆さんの思いのこもったひとことをあらためてお読みになり、明日からの活動回転の源泉としていただけることになれば編集者の喜び、これに過ぎるものはございません。

最後になりましたが、参加者の和歌は必ず一人一首はのせるということで、その選択に当たっていただきました山田輝彦先生、小柳陽太郎先生に深く感謝致します。同時に、編集と校正にご協力された野間口行正・古賀保臣・山本博資・柴田悌輔・行武潔・森重忠正・井上佳彦・古川修・福島義治・住吉俊彦の諸君にもお礼を申し上げます。（沢部寿孫記）

×　　×

（資料）
第十四回合宿教室（阿蘇）感想文集
非売品
昭和四十四年十月二十日発行
編集兼発行者
東京都中央区銀座七―一〇―一八柳瀬ビル
電話（五七二）一五二六～七番
社団法人　国民文化研究会
理事長　小田村寅二郎
編集委員　上村和男・国武忠彦・沢部寿孫
福田忠之・山内健生・岩越豊雄
磯貝保博